王の二つの身体

Menschsein

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

モモンガに伝えたいことがあった”ぶくぶく茶釜”は、ユグドラシル最終日にログインしようとするが、間に合わなかった。

最終日に最後までログインをしていたことにより、ユグドラシルに取り残されたモモンガ。

そして、現実に取り残されたぶくぶく茶釜は、鈴木悟の昏睡状態を知る。

ゲームと現実が溶け合った世界で、ぶくぶく茶釜は、鈴木悟を求め続ける。

鈴木悟はどこにいるのか？

モモンガはどこにいるのか？

最終日以降のユグドラシルとは一体なんなのか？

ぶくぶく茶釜は、鈴木悟を求めて、仲間たちと立ち上がる。

〈恋愛小説です。原作３巻までの内容で完結です〉

目次

Prologue 1

Upload the WORLD

Upload the WORLD 1 4

Upload the WORLD 2 7

Upload the WORLD 3 10

Upload the WORLD 4 13

Upload the WORLD 5 17

Upload the WORLD 6 21

Upload the WORLD 7 26

Upload the WORLD 8 30

Upload the WORLD 9 34

Upload the WORLD 10 38

Natural Divisus 43

Natural Divisus 1 47

Natural Divisus 2 52

Natural Divisus 3 55

Natural Divisus 4 60

Natural Divisus 5 65

Natural Divisus 6 71

Natural Divisus 7 75

Natural Divisus 8 80

Natural Divisus 9 80

Digital animamea

Dilligitanimamea 10
Dilligitanimamea 9
Dilligitanimamea 8
Dilligitanimamea 7
Dilligitanimamea 6
Dilligitanimamea 5
Dilligitanimamea 4
Dilligitanimamea 3
Dilligitanimamea 2
Dilligitanimamea 1
132
125
119
114
107
103
99
95
91
86

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ

西暦２１３８年現在、サイバー技術とナノテクノロジー技術の進化により、仮想現実であたかも現実にいるかの如く遊べるゲームが開発された。

そのような仮想現実型ゲームの金字塔とも言うべきゲームが登場した。

その名も、ＹＧＧＤＲＡＳＩＬ

それは１２年前の２１２６年に、日本のメーカーが満を持して発売したゲームである。

しかし、金字塔といえど、古びればそれは遺跡となる。ＹＧＧＤＲＡＳＩＬといえど、その例外では無かった。人気を博したものの、次々と現れる新システムを導入したゲームに押され続け……ついに、ゲームのサービス終了が運営より発表された。

・

・

【ＲＥＡＬ】

一台の自動送迎車（タクシー）が、スモッグの中を走っている。星の光も月の光も届かぬ闇夜であるのにも拘らずその車がライトを付けていないのは、ＧＰＳにより完全制御されているからだ。磁力によって音も無く進んでいく。

「もっとスピード出してよ。もうすぐ１２時回っちゃうじゃない。間に合わないじゃない」と、一人の女性が時計を見ながら自動運転装置に蹴りを入れた。

「これ以上の速度は、法定速度を超えます」と機械的な音声が車内に響く。

「もう！　私は大事な用があるから打ち上げの三次会は行けませんって言っていたのに。どうしてあの監督は私をカラオケに連れていきたがるかなぁ～。唄わされててばっかりだし。こっちは喉が資本だってのに。マネージャーもマネージャーよ！」と、彼女は時計を気にしながら愚痴をはき続ける。

彼女は多忙だった。彼女がメインヒロインを担当したゲームが大ヒットを記録し、シリーズ化している。今日、収録の打ち上げが行われた、彼女がメインヒロインを務めた新作が、売り上げ目標を既に予約で達成したと打ち上げに参加した社長がほくほく顔で報告していた。

また、メインテーマ曲の売上、関連グッズなどの販売も好調である。また、各アーコロジーを回り、富裕層向けの生ライブイベントなども定期的に行っており、家に帰れることも少なくなった。

その他にも、ライブなどへの出演の関係上、体重管理が必須となり、ジムでのエクスサイズがマネージャーの手によってスケジュール化されている。

自動送迎車（タクシー）という一般市民では手が出せないような高価な通勤手段を、事務所の経費扱いで日常的に使えるようになった。ロリキャラがいるエロゲーで、彼女が出演しない作品は全く売れないというのが業界の定説になり、ロリキャラ声優界で不動の地位となった。

愚弟が土下座して頼んでくるサイン色紙。最近では、こちらがお願いしている立場であるのにかかわらず、

「弟様宛てのサイン色紙を私が書けるなんて光栄です！　幾らでも書かせてください！　あっ！　あと、私、最初はプライドが高い高慢な女ですけど、調教陵辱で最後は従順な雌奴隷とか肉便器になる役回りには自信があるんです！　もし、脇役とかでそういう役があれば、私を推してください。お願いします!!」と、なぜか逆にお願いされてしまう立場になってしまった。

自分は成功者と言えるのかも知れない。

だが、その大成功の傍ら、彼女は喪失感を拭えずにいる。それは、大好きなＹＧＧＤＲＡＳＩＬにログインする時間。第６階層の巨大樹で、仕事という枠組みを外れてざっくばらんに話すことができる大切な女友達。アインズ・ウール・ゴウンの仲間達。そして……。

彼女は、ＹＧＧＤＲＡＳＩＬで多くの事を学んだ。太っていて内気だった自分に初めて友達ができた。現実で、誰も自分に声をかけてはくれない。どうせ同じでいいやと自暴自棄で選んだピンクの肉棒。

しかし、そんな私に声をかけてくれた人。そして、仲間へと迎えいれてくれた。オフ会が開催されるということで、本気でダイエットをしたのも、ライブ進出へのきっかけだった。

ＹＧＧＤＲＡＳＩＬの戦闘で、ヘイト管理を学んだ。隠され、高度化したヘイト管理システムであるが、彼女は学んだ。そしてＹＧＧＤＲＡＳＩＬのヘイト管理をマスターしてしまえば、エロゲー上で展開されるエロス管理などお手の物だった。山場の前では、９０度から１３０度まで声色の使い分けで上下させることができる。監督が言うところの抜きどころでは、腹筋に食い込む程の角度まで引き上げる声色を出せる。

今の自分の成功があるのは、ＹＧＧＤＲＡＳＩＬのお陰だった。しかし、今、自分はその大恩あるＹＧＧＤＲＡＳＩＬのアインズ・ウール・ゴウンを蔑ろにしている。

「ご自宅に到着しました。マンションに連結。エントランスの空気は清浄です。ご利用ありがとうございました」という自動送迎車（タクシー）の定型文句を聞かずに、彼女は車から飛び出した。

ＹＧＧＤＲＡＳＩＬのサービス終了まで後、１６分……。

Ｕｐｌｏａｄ　ｔｈｅ　ＷＯＲＬＤ
Ｕｐｌｏａｄ　ｔｈｅ　ＷＯＲＬＤ　１

Ｎｏｗ　Ｕｐｌｏａｄｉｎｇ，Ｗａｉｔ　ａ　ｍｉｎｕｔｅ……

「もう、なんなのよ！　量子回線のくせに、もう５分以上アップロードしているじゃない！」と、仮想世界へダイブする専用コンソールに入りながら彼女は愚痴った。

原因は、彼女がしばらくログインしていなかった為であった。暫くといっても、数日とか数週間というような単位ではない。ＹＧＧＤＲＡＳＩＬへログインしたのは何時振りであろうか。彼女がログインしない間にも細かい修正が何度もなされていた。順番にパッチを当てているため、アップデートに時間がかかるのは当然であった。

彼女が最後にＹＧＧＤＲＡＳＩＬにログインしたのは、彼女の家の前の立体フォログラフィーに紅葉が映し出されていた時であった。

その紅葉は散り、そして、真っ黒に汚れていない純白の粉雪がフォログラフィーに映し出され、白化粧をしたクリスマスツリーへと移り変わり、そして、いつの間にか、雪だるまが表示されるようになっていた。そして、その雪だるまが徐々に溶けてゆき、春の到来を知らせた。そして、桜が咲き、嘘くさく散っていった。今は、青々と茂った緑色の木々が繁茂している。気温湿度が年間を通して一定に保たれているアーコロジーに、擬似的な夏が到来していた。

「やっと、終わった！　って、あと１分しかないじゃん。お願い間に合って！　どうか、円卓（ラウンド・テーブル）にいてください」と、彼女は自ら信じてもいない神様に願った。

今からログインして認証をしても、会話できるのは数十秒であろう。それに、彼女がどうしても会いたい相手がナザリックの第９階層の円卓（ラウンド・テーブル）にいてくれる保証はない。ナザリック地下大墳墓の広さを彼女は身を以て知っていた。彼女が作り出したＮＰＣ（ノン・プレイヤー・キャラクター）が守護する領域、地下第６階層を考えればすぐにその答えはでる。でも、彼女は一縷の望みをかけたかった。伝言（メッセージ）などでは無く、直接会って言

いたいことがあった。たとえ自分のその姿が、ピンクの肉棒であっても……。
「繋がった？　って、ログインできない!?」
「長い間、ＹＧＧＤＲＡＳＩＬをご利用いただき、誠にありがとうございました。本サービスは終了致しました。システムを大幅リニューアルの後、【ＹＧＧＤＲＡＳＩＬ　２】としてサービスの再開を予定しておりますので、リリースをしばしお待ちください」
　システムは彼女の想いとは裏腹に無情だった。彼女のログインは拒絶された……。
「はぁ」と彼女は大きなため息をついた。会えなかった。伝えたいことがあったのに。
「もう、化粧落として寝よう」と彼女は独り言を言った。声の高い、人びとを魅了するロリ声ではなく、彼女の地声に近い低い声だった。
　彼女は化粧を落とし、化粧水を塗った。そして、目覚ましをセットしてそのままベッドの中へと入った。

・

・

「予定の時間が経過したよ――」
　ＤＩＹ（Do It Yourself）した自分の声を吹き込んだ腕時計の目覚ましが鳴り響く。とある誰かとお揃いなのは彼女だけの秘密だ。
　彼女は今日、先行販売記念イベントに出席せねばならない。
「シャワー浴びなきゃ」と、庶民には贅沢で夢のような、特別な濾過、蒸留がされた純水によるシャワーの蛇口を彼女は捻る。一般庶民は髪を洗うといえば、２１世紀の宇宙飛行士のように、水を使わずに洗えるシャンプーで洗い、そしてそれを拭き取るだけであった。一般庶民には、体の汚れは、アルコールを含んだ布で拭き取るだけしか方法がない。体に害の無い水を飲食以外で使えるという彼女の成功の証明であった。
　そんな彼女が、いつもの習慣でＭＴＶ（モバイルＴＶ）のスイッチを付けた。家の何処に移動してもテレビが見られるように、彼女が部屋の中を移動するのに合わせて３ＤのＴＶ画面が彼女の前方に自動的に映し出される。

シャワーなどの雑音がある場所でも、その雑音と逆の位相の音声を自動で発し、雑音を相殺させて、ＴＶの音声だけが聞こえるようにする機能付きだ。

彼女は、ＴＶのニュースに耳を傾けながら鼻歌を歌う。自らが発する声は雑音相殺機能で相殺されないように設定してある。

「昨日、サービスを終了したＤＭＭＯ―ＲＰＧ、ＹＧＧＤＲＡＳＩＬに重大なシステムトラブルが発生したというニュースが入りました。サービス終了時にＹＧＧＤＲＡＳＩＬにログインしていた被害者の意識が戻らない状況です。意識が戻らない状況では生命に危険が生じるため、当局は緊急措置を行い、被害者を病院へと搬送しています。また、ＹＧＧＤＲＡＳＩＬの運営会社に対して、電脳法の営利誘拐に抵触する行為の可能性があるとみて、本社を家宅捜索する……」

え？　ＹＧＧＤＲＡＳＩＬが？

彼女の心臓の鼓動が早くなる。まるで警鐘を打っているようであった。とても嫌な予感がする。

彼女はＴＶを凝視する。

「現在判明している被害者です」とアナウンスロボットが被害者名を次々と読み上げていく。そして、画面上では、その被害者の氏名がテロップとして表示されていく。

・

「鈴木悟さん」

アナウンスロボットが読み上げた声。思わず彼女がＴＶ画面に食いつく。そして、その氏名と、そしてその横に表示されている彼の顔を見る。身分証明書用の顔写真であろう。無愛想な、そして疲れた感じで写っている彼の顔。だが、彼女が見間違えるはずも無い。オフ会で顔を合わせたことのある、鈴木悟。いや、モモンガさんの顔であった。

「ど、どうして……」

彼女が思わず落としてしまったシャワーのノズルがシャワールームに響いた……。

Ｕｐｌｏａｄ　ｔｈｅ　ＷＯＲＬＤ　２

【ＹＧＧＤＲＡＳＩＬ】

もう誰もログインして来ないだろう。サービス終了の時刻が刻一刻と近づいている。円卓（ラウンドテーブル）という名の与えられた部屋をモモンガは後にする。ギルドメンバーのみに与えられた指輪を持つ者がゲームにログインすると、この部屋に自動的に出現するように設定されている。だから、モモンガはこの部屋で待っていた。

しかし、終了ギリギリにログインしてくる者などいないだろう。他のギルドメンバーが来る可能性は限りなく低い。ヘロヘロさんが、体に鞭を打ってログインしてきてくれたことが奇跡とさえ思える。

モモンガは、ナザリック地下大墳墓最奥にして最重要個所、玉座の間に向かう。かつて、プレイヤー１５００人が攻めてきても、そのプレイヤーを全滅させたというナザリック地下大墳墓。そしてそのナザリックをギルド拠点として支配していたアインズ・ウール・ゴウン。このナザリックを支配していた残滓、過去の栄光、最後に残った一人として、ゲームの終了は玉座に腰掛けて終わるべきだと思った。このナザリックはアインズ・ウール・ゴウンが初見で攻略に成功した。他のギルドのメンバーがこの玉座の間に座ったことなどない。このナザリックを支配したのは、長いＹＧＧＤＲＡＳＩＬの歴史の中でも、アインズ・ウール・ゴウンだけだ。このナザリック地下大墳墓の唯一の支配者は、ギルド、アインズ・ウール・ゴウンだ。

玉座の間。そここそ、ゲーム終了の時を迎えるには相応しい場所だ。モモンガは、玉座の間の赤絨毯を威風堂々と歩く。そして、モモンガの視線は、玉座の横に立つ女性型のＮＰＣへと向けた。

それは純白のドレスをまとった美しい女性だ。彼女の名は流石にモモンガでも忘れてはいない。ナザリック地下大墳墓階層守護者統括、アルベド。ナザリック地下大墳墓全ＮＰＣの頂点に立つ存在。

モモンガが玉座へと続く階段に足をかけると、アルベドは片膝を地面につき、右手を胸の前へと優雅に運んだ。支配者への忠誠を示しているのであろう。モモンガは、そのまま玉座の間に座る。

ＹＧＧＤＲＡＳＩＬというゲームの性質上、もしくは、アンデッドという種族であるためか、玉座に座った感触は何もない。しかし、その玉座は冷たく冷え切っており、とても固いようにモモンガは感じた。

２３：５９：４８、４９、５０……

モモンガは目を閉じた。

時計と共に流れる時を数える。モモンガの青春。人生に黄金時代というものがあれば、ＹＧＧＤＲＡＳＩＬで遊んでいたその時期こそが自分の黄金時代であっただろう。後の人生は、残り香に過ぎないのではないか。アインズ・ウール・ゴウンという思い出を抱えて、自分は社畜として身をすり減らして、そして死んでいくのだろうか。老人達が、地球は青かったのだよ、と懐かしげに語りながら処理施設に送られていく。モモンガ自身は、青い地球などまったく知らないし、青い空すら見たことがない。唯一、あおいそらを見たことがあるのは、スーラータンさんに薦められて見た初期のあおいそらの「妹の秘密」だけだ……。

思い出の中で生きて、身を削って働き、そして死んでいく。敷かれた線路に乗って生きていく。小卒の自分には、夢も希望もない。ＹＧＧＤＲＡＳＩＬという思い出を胸に抱きながら生きていけるだけでも、幸せな方ではないだろうか。

「楽しかった。本当に楽しかったんだ。ありがとう。ＹＧＧＤＲＡＳＩＬ。そしてアインズ・ウール・ゴウンのみんな……」

０：００：００……１、２、３

「……ん？」

モモンガは目を開ける。自分がいるのは、相変わらずＹＧＧＤＲＡＳＩＬ内の玉座の間だった。

「……どういうことだ？」

０：００：３８

何が起こったのか状況把握をしようとするが、コンソールが浮かび上がらない。サーバーがダウンするはずであるのに、サーバーがダウンしていない。自分が強制排出されていない。そして、自力でログア

ウトしようにも、コンソールが出現しない。
「お伺いしますが、あなたのお名前は、プレイヤー名、モモンガ様でお間違いはありませんか？」
初めて聞く女性の綺麗な声。
モモンガは呆気に取られながら声の発生源を探る。そして誰の発したものか理解したとき、唖然とした。
それは、顔を上げたＮＰＣ――アルベドのものだった。

「お伺いしますが、あなたのお名前は、プレイヤー名、モモンガ様でお間違いはありませんか？」とアルベドが問いを繰り返す。不可解な事態だ。

なぜコンソールが出てこない？

ユグドラシルのサービスは終わったはずだ。

そして、ＮＰＣが喋っている。アルベドが言葉を発するとともにそれに合わせて口も動く。そして彼女から僅かに漂ってくる芳しい香り。ユグドラシルのゲームの中というよりは、現実のように思えた。

「お伺いしますが、あなたのお名前は、プレイヤー名、モモンガ様でお間違いはありませんか？」

自動人形の如く、アルベドが同じ質問を繰り返している。モモンガは、内心、五月蠅いな、と思った。いつの間にかＮＰＣが喋る機能を実装したようではあるが、同じ言葉を繰り返すだけなら、マネキンと変わらない。

「そうだ。今、状況を整理したいから邪魔しないでくれ」とモモンガは邪険にアルベドを追い払う。

マネキンがモモンガの言葉を理解できる筈もない。自分が、アインズ・ウール・ゴウンのギルド長であるモモンガその人であるということを、何度もオウムのように尋ねなければ、それが誰だか分からないような程度の低いＡＩ（人工知能）しかまだ実装されていないのであろう。大切な仲間であるタブラ・スマラグディナさんが創ったＮＰＣであるとは言え、この異常事態の中で、お人形さん遊びに興じる気持ちにモモンガはなれなかった。

「モモンガ様の御姿を拝見できて、このアルベド、光栄の至りでございます」と、アルベドは優しげに微笑ながら優雅に一礼をした。

「早速ではありますが……」

いつの間に取り出したのだろうか。アルベドのその手には巨大なバルディッシュが握られていた。彼女の細い腕では持ち上げることなど不可能と思えるほど巨大だ。

「最上位命令に従い……　なっなぜ、至高の御方がたを？　忠誠を尽くすべき御存在を何故？　何故なの!!」とアルベドは叫ぶ。玉座の間に彼女の叫びが響いた。

アルベドが握っていた巨大なバルディッシュがズドンと床に落ちた。そして、アルベドは苦しそうな表情を浮かべながら、自らの頭を抱えている。まるで酷い頭痛に悩まされているようだ。

（え？　おいおい。ＡＩ（人工知能）のバグか？　ログアウトも出来ないし、運営は一体何をしているんだ？）

呻き声を上げていたアルベドが静かになった。そして、スッと立ち上がる。まるで聖女のような微笑みであった。そして全ての生命を愛おしむような慈愛に満ちた目でモモンガを見つめていた。モモンガはアンデッドではあるが……。

「最上位命令に従い、プレイヤーを排除します。ナザリックの全ＮＰＣに連絡。プレイヤーが現れた。場所は玉座の間。繰り返す、玉座の間にプレイヤーが出現。これは訓練ではない。これは訓練ではない」

（は？　何言ってるんだコイツ？　っておいっ!!）

アルベドはバルディッシュを拾い上げる。そして、それが美しい半円を描きながらバルディッシュの刃がモモンガに向かってきた。

慌ててモモンガは玉座から転がるように脱出する。

バルディッシュと玉座がぶつかる。さすがはＷＩ（ワールドアイテム）である玉座である。巨大なバルディッシュでの一撃でも傷一つ付いてはいない。

（コイツ、マジでバグりやがった。フレンドリーファイヤーはどうした！）

「流石は、至高の４１人の御方がたのまとめ役でいらしたモモンガ様……。最後まで残ってくださっていた優しい御方。苦しまないように首を刎ねて殺して差し上げようと思っておりましたのに……」と数段高い玉座のある場所から転がり堕ちたモモンガをアルベドは見下しながら言った。まるで、ナザリックを強襲してくるプレイヤーに対峙するかのように、アルベドは自信と威厳に満ちた、モモンガよりもはるかな上位者であるかのような立ち居振る舞いだった。

モモンガは何がなんだか分からない。ログアウトできないという

状況だけでも意味不明であるのに、それに加えて、いきなり自分のギルドのＮＰＣから攻撃を受けた。
わめきたくなったその瞬間、混乱したモモンガの頭に、ギルドメンバーの言葉が閃く。
――突然敵から襲われた時は、むやみに反撃に出ないこと。まずは、防御に徹し、そしてその場から撤退することを念頭に置くべきだ。敵は闇雲に襲ってきたわけではない。しっかりと対策を立てて襲ってきていると考えるべきだ。戦いは始まる前に終わっている。そして、不意を突かれた時点でもう自分は負けている。
昔から言うだろう？　三十六計、走るを上計と為すと。
その言葉ですっと、モモンガは自分が今何をすべきかが分かった気がした。アインズ・ウール・ゴウンの諸葛亮孔明。そう言われた男――ぷにっと萌えさんにモモンガは感謝の念を送る。
そしてモモンガは走り出した。迷う事無く。
アルベドに向かってではなく、玉座の間の出口に向かって。ここはナザリック十階層。目指すべきは地上だろう。
幸いなことに、今の自分はアンデッドだ。いくら走ったところで、不疲という属性を持っている。
（ぷにっと萌えさん、俺、走り抜けますよ。このナザリックを……）

モモンガは走り続ける。まさか、アインズ・ウール・ゴウンが支配するナザリックという、自らの庭とでも言うべき場所で、妖精女王（ブレス・オブ・ティターニア）の祝福と三足烏（リード・オブ・ヤタガラス）の先導を使うことになる日が来るとはモモンガ自身、考えたこともなかった。

荒野を走り抜ける。モモンガの右手には、ギルドの証であるスタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウンが握られている。そして彼の後ろを、桜花聖域の領域守護者が追いかけてきている。

灼熱地獄の中をモモンガは走り続ける。紅蓮が溶岩の川へとモモンガを引きずり込もうとするのを躱しつつ、右足が沈む前に左足を上げることによりその川を横断していく。

だが、第七階層から第六階層への走り抜けているモモンガは違和感を覚える。ＮＰＣたちの追撃が止んだ。モモンガの背後を突き刺し続けた殺気。それが消えた。

嵐の前の凪のような、そんな不気味さを感じながらもモモンガは走り続ける。第六階層のジャングルを避けてモモンガは走る。そしてたどり着いたのは、円形劇場（アンフィテアトルム）だった。

「モモンガ様!!」とダークエルフの姉の方がモモンガの前に立ちはだかった。そして、アウラは、巨大な狼であるフェンリルの背にまたがっている。追っかけっこなら負けないよ、とでも言いたげな笑顔でモモンガを見ていた。

「お姉ちゃん！　モモンガ様が本当に来ちゃったよ。どうしよう」と不安そうに言うマーレであるが、マーレが騎乗しているのは、レベル９０近いドラゴン。課金アイテムでもレアに分類されるドラゴンだ。そして、もう一匹ドラゴンが後ろに控えている。不安そうに言っている割りに、モモンガが逃げれば即座に追っかけてくる態勢は万全であろうように思える。むしろ、ドラゴンで飛行して追撃してくる分、タチが悪い。

「うん。アルベドから連絡があった通りだね。ここで待っていればモモンガ様は自ら檻の中に入るからって」

檻というのは、この円形劇場の闘技場のことであろうか。
「あ、足止めをしなきゃいけないんだよね。でも、ナザリックの支配者であるモモンガ様だよ」と、マーレは今にもなきそうな顔をしている。だが、マーレがしっかりと手に持っているのは、神器級（ゴッズ）アイテムであるシャドウ・オブ・ユグドラシル。
「マーレ！　最上級命令だよ！　あんたが足止めしたあと、私が攻撃するから！　はやくやりなさいよ」
「うん、わかってるよ、お姉ちゃん。植物の絡みつき（トワイン・プラント）」とマーレが拘束魔法を発する。
　それと同時にモモンガは対抗呪文を発動するが、その間隙を縫うような形で、アウラが動いた。
「影縫いの矢」
「汚ねぇ!!」とモモンガは叫びながら、ぎりぎりでアウラのスキルを防ぐ。マーレが足止めをはかり、アウラが攻撃をするという二人の会話を聞いていたモモンガは思考が操作されていた。
　まさか、アウラまで足止めのスキルを放ってくるとは予想を超えていた。最悪、アウラからの攻撃は防ぐ手立てがないのであれば一発食らう覚悟だった。いま、モモンガにとって危険なのは、動けなくなること、そして退路を絶たれることだ。
　さすが、ぶくぶく茶釜さんが創造したＮＰＣの二人であるとモモンガは舌を巻く。彼女はヘイト管理を得意していた。そのぶくぶく茶釜さんが創造した二人だ。敵の注意を集中させたり、気を反らさせたりする技術は、創造者譲りということなのであろう。
「もう、外しちゃったじゃない。しっかり狙ったのマーレ！」
「ごめん、お姉ちゃん」
「二人とも、よくぞ時間を稼いでくださいました。モモンガ様、このあたりは次元封鎖（ディメンジョナルロック）で転移を封じさせていただきました。もう、指輪（リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン）を使って転移をすることはできませんよ」
　円形劇場の客席の座席に悪魔が立っていた。
「デミウルゴス！　間に合ったみたいだね。へへっ、足止め成功!!」とアウラは、得意げに笑った。

「最初からそれが目的だったのか？」と、モモンガは口を開く。
「もちろんです。この円形劇場（アンフィテアトルム）でモモンガ様を葬り去るための布石。アウラとマーレは、モモンガ様を拘束しようとしていたのではなく、単なる時間稼ぎをしていただけなのですよ。私が次元封鎖（ディメンジョナルロック）をするためのね」
「その作戦に俺はまんまと嵌ってしまったようだな」とモモンガは肩を落とす。
「最初、アルベドから連絡があった際は、モモンガ様は指輪（リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン）を用いて地上へと転移されるとばかり思っておりました。それがまさか、自らの足で脱出を計ろうとされるとは。私の予想を超えた行動です」
「その手があったのか。単にその方法を思い付かなかっただけかも知れないぞ？」とモモンガは答える。
「そんな初歩的なことを気付かないはずがありません。教えてください。どうして、指輪（リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン）で地上まで転移しなかったのですか？　自らの足で逃げるなど、火に入る夏の虫の如しです。かつて、プレイヤー１５００人が攻め入って全滅したナザリック地下大墳墓。逆走とは言え、単騎で駆けるのは無謀というものではありませんか？
　モモンガ様」とデミウルゴスは慇懃な態度でモモンガに向かって一礼をする。
「ナザリック最高峰の頭脳の持ち主であるお前でも分からないのか？
　教えてやろう。これが、三十六計の上計という奴だ」
「三十六計！　なんと！　このナザリックから脱出する術を三十六通りもお考えであったとは……。流石は至高の御方がたをまとめられていたモモンガ様……。３通りしか脱出方法を考え出せない私など、力不足でしたね……。後学のためにその方法を教えていただいても？」
「ソレクライニシロ、デミウルゴス。知恵比べヲシテイル場合デハナイ。カクナル上ハ、刀デ語ルノミダ」と、闘技場の入口から入ってきたコキュートスが言った。
「コキュートスの言う通りでありんす。最上級命令が下った今、もは

や言葉は不要でありんす。あとはモモンガ様の亡骸を私はもらい受けるだけでありんす」と転移門（ゲート）を使って、迎賓席に現れる。
「守護者各位、揃ったようね。モモンガ様、言い残す言葉はございませんか？」と、最後にアルベドが現れた。漆黒の全身甲冑に身を包み、巨大なバルディッシュを持っている。アルベドの完全装備だ。
「そうだな……。最後に聞いておこう。お前達は、アインズ・ウール・ゴウンのＮＰＣなのか？　それとも、もうそうでは無いのか？」
　その問いを発した瞬間、守護者達から殺気が溢れる。
「私達は、至高の御方がたに創造された誇り高き存在。そして、神にも等しき御方がたに絶対の忠誠を誓う階層守護者。生まれてから死ぬまで、ずっと栄光あるアインズ・ウール・ゴウンのギルド拠点、ナザリック地下大墳墓を守護する存在です」とシャルティアが言った。そして、その言葉に間違いが無いと階層守護者達は全員が頷いている。
「そうか。では、この騒動が解決したら、必ずお前達を復活させよう」
「こんな時にご冗談でございますか、モモンガ様。それとも、私達から逃げられるとお思いですか？」
「逆に聞こう。お前達……トレインという言葉を知っているか？」とモモンガは口を開いた。

モモンガの言葉が理解できなかったのであろう。守護者たちは首を傾げている。ナザリックの知恵者であるデミウルゴスも、守護者統括という地位のアルベドも、トレインという言葉を分からなかったようである。

「トレインというのは、自分を攻撃対象とするモンスターを集める行為だ。そして、そのモンスターを他のプレイヤーに擦り付ける行為は、マナー違反となっている。だが、ＰＫ（Ｐｌａｙｅｒ ｋｉｌｌｅｒ）に於いては、標的を弱体化させるという意味で、ＭＰＫ（Ｍｏｎｓｔｅｒ Ｐｌａｙｅｒ Ｋｉｌｌｅｒ）という方法は好んで用いられる。異形種狩りに遭っていた頃は、聖属性の天使を引き連れてやってきて、やっと天使を倒したというところで、ＰＫされたりしたものだ」とモモンガは説明を始めた。

「なにを仰っているのです？　モモンガ様がそのトレインという行為をしていたとして、擦り付ける相手がいませんよ？　次元封鎖（ディメンジョナルロック）で転移で逃げることはできない。見てください、この状況。御方を逃がすまいと、守護者であなたを包囲しています。チェック・メイトです、モモンガ様」とデミウルゴスは両手を広げる。広げられた両手はあたかも、逃げられるものなら逃げてみてください、とモモンガを挑発しているようであった。

「その通りだな。ＰＫ（Ｐｌａｙｅｒ ｋｉｌｌｅｒ）戦においては、囲まれた時点でほぼ死亡が確定するものだ」

「この地を去っていく至高の御方がた。今まで残ってくださっていた慈愛深きモモンガ様を殺すのは、とても悲しいですが……。最上位命令ですのでやむを得ませんね」とデミウルゴスが残念そうにため息を吐いた。

「残念デハアルガ、強者ト戦エルノモマタ喜ビダ」

モモンガは、どうしてこのようなことが起ったのか、何故仲間丹精を込めて作ったＮＰＣと戦わなければならないのかと逡巡する。

そして、決断したかのように自らの切り札を切った。

〝本当の意味で死を極めた死の支配者（オーバーロード）のみがこの職業（クラス）に就き、日食

の如く全ての生命を蝕む〟と説明がなされる職業……〝エクリプス〟。死の支配者（オーバーロード）五レベル、更に死霊系統の魔法職に特化し過ぎた者だけが、総合計レベル九十五に到達したとき、習得できる職業だった。そして、エクリプスの限界レベルである五レベル目に到達したときに得られる、百時間に一度しか使用できない特殊技術（スキル）。
あらゆる生ある者の目指すところは死である（The goal of all life is death）

瞬間、モモンガの背後の十二の時を示す時計が浮かび上がった。そして魔法を発動させる。

「まさか……　全員退避!!」とアルベドが叫ぶ。先ほどまで余裕であったデミウルゴスも、青い顔をしながら闘技場の出口へと向かう。

「魔法効果範囲拡大（ワイデンマジック）・クライ（嘆き）・オブ（の）・ザ（妖精）・バンシー（の絶叫）」

周囲に女の絶叫が波紋の如く響き渡る。それも即死の効果を持った叫び声。

モモンガの様々な特殊技術（スキル）によって強化されたそれは、通常のものよりも強力で抵抗が難しい。シャルティアのように即死効果に対する完全耐性を持つ存在には効果を発揮しない。しかし、逆にいえば、完全耐性を持っていない者には、死神が罪なき人の命を唐突に奪っていくように……息絶える。

だが、

アウラ。

マーレとそのドラゴンの一匹。

コキュートス。

アルベド。

そして、デミウルゴス。

即死効果に対する耐性が無いものでも、生き残っている。レベルが高くなればなるほど、毒や移動阻害などのバッドステータスを、耐性無しでもランダムで回避できる確率が高まる。

守護者全員が生きている。しかし、モモンガは動じない。

「言い忘れていたが、トレイン行為というのは、別にＰＫするためだけに使われるわけではない。ぷにっと萌えが考案した「みんなで楽々レベル上げ術」では、全員がトレイン行為をし、集合地点に集まる。そ

して、集めてきたモンスターを一気に範囲魔法で殲滅させるという方法にも使われる」

カチリ。

音と共に、魔法の発動に合わせる形で、アインズの後ろにあった時計がゆっくりと時間を刻み始める。モモンガは守護者達がなんとか効果範囲の外へ逃げようとしている後ろ姿を見つめる。そして、無駄なことを、と思う。しかし、シャルティアは逃げもせず、ただ獲物を見つめる獣のような目で、モモンガを見つめている。

（シャルティアか……　まさか、蘇生アイテムを所持しているとはな。ペロロンチーノの仕業だな。俺対策の悪戯のつもりであっただろうが、まったく迷惑な話だ）

心の中で、ギルド内でも仲の良かった友人に対する愚痴を吐き捨てる。

十二秒が経過し、時計の針は一周を終え、再び天を指した。

そして、アインズの切り札は発動する。

瞬間――　世界が死ぬ。

シャルティアを除いた守護者たちは、白い靄となって消えていく。堅牢な石造りである円形劇場（アンフィテアトルム）も、砂上の楼閣の如く崩れていく。人造物（コンストラクト）であり、生命が無いにも拘らず即死したのだ。

それだけではない。

生命など無い空気すらも死に、直径二百メートルにわたって呼吸不可の空間と化す。

死しかない世界だった。

単なる砂の山と化してしまった円形劇場（アンフィテアトルム）を悲しげにモモンガは見つめる。

「お見事です、モモンガ様。まさか、逃げ惑う振りをしながら、実は私たちを一か所に集め、一気に片付けることを狙っていらしたとは」とシャルティアが惜しみない称賛をモモンガへと送る。シャルティアには分かっているのであろう。シャルティアとモモンガが、一対一で戦った場合、どちらの方に軍配が上がる可能性が高いのかを。

「なぁに、Ｐ（Player）　Ｋ（killer）は散々されてきたからな。さて、シャルティアよ、お前一人になったが、どうする？」とモモンガは敢えてシャルティアに問うた。
「私と一対一で勝てるとお思いですか？」とシャルティアは不敵に笑う。
「あぁ。果てしなく分が悪い戦いだ。お前とサシで戦うことなど愚かだ。だから、私は逃げるとしよう」
「な、逃げるのですか！　他の至高の御方がたのように、私を置いて行かれるのですか？　行かないでください……いや、そういうことではない。逃がしてはいけない。プレイヤーは殺さねばならない」
　シャルティアは、懇願する少女のような表情となったと思った次の瞬間には、無表情の、仮面のような顔となっていた。
「当然だろう？　今度は転移で逃げるぞ？　追っかけっこの次は、かくれんぼということだな。さぁ、俺は何処に逃げよう。アースガルズにでも行くかな？　それとも、ムスペルヘイムかな？　ユグドラシルの世界は広いぞ？　それに、シャルティアはナザリック地下大墳墓から外に出たことがあるのかな？　ユグドラシルでは、ギルド拠点から出ることが出来ないのではなかったか？」
「に、逃がすか!!」と、シャルティアはスポイトランスをモモンガに向けて突進してくる。
　だが、そのスポイトランスの槍先にすでにモモンガの姿はなかった。

Ｕｐｌｏａｄ　ｔｈｅ　ＷＯＲＬＤ　６

宝物殿へ転移したモモンガの前に、高く聳える山が幾つもあった。その山は、黄金の金貨や宝石を積み重ねてできた山であった。空まで続いていると思えるような天井の高い部屋。その部屋に金貨、宝石。そして垂涎の美術品やアイテム。この世の財宝を一つの部屋に放り込んだと説明されたら納得してしまいそうな部屋だ。

しかし、それはナザリック地下大墳墓に眠る財宝の一部である。高い天井を支える四隅の壁。そこには天井まで聳える巨大な棚がある。そして、そこには、黄金よりも輝く、より高価なマジック・アイテムが棚に鎮座している。

「やはりここにはＮＰＣはいないか……。シャルティアは探索系の能力を持っていないし、俺が既にナザリックの外に脱出したと勘違いしているだろう……が、長居をするのはどのみち危険だな」とモモンガは、飛行（フライ）の魔法を使って、猛毒のブラッド・オブ・ヨルムンガンドの中を進んでいく。

モモンガが宝物殿に来た理由。それは、宝物殿に眠るアイテムや装備を取りに来たのだ。ナザリックから脱出したとしても、ナザリックの外も敵だらけという可能性がある。モモンガの切り札も百時間の冷却時間を必要とするし、今後は連戦も考えられる。場合によっては、Ｗ（ワールド）Ｉ（アイテム）を使用しなければならない局面があるかもしれない。

モモンガは、宝物殿の奥の壁の前に立った。壁には、闇を切り取ってきたような扉の形の闇が揺らめいている。

「武器庫のパスワードはなんだったかな」

モモンガが宝物殿にやってきたのは数年ぶりであった。扉は特定のパスワードに反応して開くタイプの扉だ。

「〝Ｓｉ（汝）　ｖｉｓ（平和）　ｐａｃｅｍ（を），ｐａｒａ（望む）　ｂｅｌｌｕｍ（なら、戦争に備えよ）〟だったか？」

その言葉に反応し、湖面に何かが浮かぶように、漆黒の扉の上に文字が浮かんだ。そこには、

『Ｃｏｎｆｌａｂｕｎｔ　ｇｌａｄｉｏｓ　ｓｕｏｓ　ｉｎ　ｖｏｍ

eres, et lanceas suas in falces. Nec exercebuntur ultra praelium』と文字が浮かび上がり、そして闇が消えその奥へと続く道が現れた。

「彼らは剣を打ち直して鋤(すき)とし、槍を打ち直して鎌とする。もはや戦うことを学ばない、か……。まったく、タブラさんは……。武器を取りに来た人にそりゃないよ」とモモンガは、〝アインズ・ウール・ゴウン〟のギミック考案担当の一人のことを頭に思い浮かべて苦笑した。

モモンガは長い廊下を進んでいく。廊下の左右にはブロードソード、グレートソード、シミターなど数々の武器が陳列されている。魔法詠唱者(マジックキャスター)であるモモンガにはこれらの武器にどんな特殊効果や魔法が付与されているのかまったく検討が付かない。だが、この場所に収納されているということは、伝説(レジェンド)級の武器であるのだろう。

百メートルほど進み、長方形の部屋へと出る。がらんとした部屋に置かれているのはソファーとテーブルのみだ。そして、ソファーの横には、異様な外見の者が立っている。人の体に、歪んだ蛸にも似た生き物に酷似した頭部を持っている。頭部の右半分を覆い尽くすほど、刺青で何らかの文字が崩されながら刻み込まれている。皮膚の色は貝のごとき白に紫色が僅かに混ざり込んでおり、粘液に覆われているような異様な光沢を持つ。指はほっそりとしたものが四本はえており、水かきが指の間についている。モモンガの仲間、タブラ・スマラグディナの姿となっているのであろう。モモンガはそれが誰であるか知っていた。

「ようこそおいでくださいました。私の創造主たるモモンガ様。モモンガ様はかならずここへアイテムを取りに来られると思っておりました」と長方形の部屋に声が響く。

「久しぶりだな、パンドラズ・アクター。まずはお前に問おう。お前も、俺の敵か?」

モモンガは、平然としながらもパンドラズ・アクターに対して警戒を続ける。

「まだ、という言葉を付けねばなりませんが、モモンガ様の敵ではございません。ですが、そろそろ最上位命令を誤魔化すのも難しくなって来ております」と言ってパンドラズ・アクターはその姿を変えた。今度は、たっち・みーさんの姿であった。
「このように、至高の御方がたの姿に次々と変わることによって、つまり、自らがプレイヤーの姿となることによって、最上級指令、プレイヤーを殺せという命令に支配されるのを遅らせております」とパンドラズ・アクターは答える。
「そうか……どれくらい持ちそうなのだ」とモモンガは深いため息と共に言った。自分が創ったＮＰＣに攻撃をされることほど、悲しいことはない。
「あと、３分ほどでしょうか。間に合ってよかったです。どうしてもモモンガ様にお伝えしたいことがあったのです」
「伝えたいこと？」
「はい。私を創造してくださってありがとうございます。私を信頼し、この宝物殿の管理まで任せていただきました。私は幸せでございました」とパンドラズ・アクターは、カーテンコールで俳優が観客に挨拶をするかの如くお辞儀をした。舞台の幕は既に降りていた。
「……」
「お伝え出来て本当によかった」と、パンドラズ・アクターは今度は、ぶくぶく茶釜の姿となった。
「……」
　モモンガは自分の子に何か言ってやらなければならないと分かっていた。しかし、それを言葉にすることができなかった。自分が創造したＮＰＣゆえに、パンドラズ・アクターがやろうとしていることが分かっているからだ。
　長い沈黙の末、パンドラズ・アクターは口を開いた。
「それでは、そろそろですので」
「必ずお前を甦らせると誓おう」
「感謝致します」
　パンドラズ・アクターは、爆撃の翼王ペロロンチーノの姿となり、そ

の翼を広げて宝物殿へと向かっていく。モモンガはそれを見送る。

パンドラズ・アクターは、宝物殿のブラッド・オブ・ヨルムンガンドの濃い霧の中へと飛び込むと同時に、自らが創造された姿へと戻る。彼が被っている制帽の帽章はアインズ・ウール・ゴウンのギルドサイン。二十年ほど前、欧州アーコロジー戦争で話題になったネオナチ親衛隊の制服に非常に酷似した物を着用している。

自らが死ぬのであれば、自らの創造主、モモンガが創った姿でその生命を終えたかった。

猛毒であるブラッド・オブ・ヨルムンガンドをパンドラズ・アクターは、深く吸い込む。自らのＨＰが減っていくのを感じた。だが、これでよいのだ、とパンドラズ・アクターは思う。自分を支配するのは創造主たるモモンガ様のみ。モモンガを害するなど考えられない。それが避けられないことであるなら自害を選ぶ。

ブラッド・オブ・ヨルムンガンドを吸い続けながら、パンドラはモモンガがいる方向に向かって敬礼を続ける。

やがて……敬礼を続けるパンドラズ・アクターの膝が笑い始める。敬礼をしている右手の震えが止まらなくなる。呼吸をするのも辛くなってきた。パンドラズ・アクターは終には立っていることができず、黄金の山へと大の字で倒れる。

ＨＰが加速度的に減っていく。

パンドラズ・アクターは、宝物殿の巨大な棚に並べられているマジック・アイテムを眺める。至高の御方々が集めたマジック・アイテム。死ぬのは恐い。しかし、マジック・アイテムを眺めながら死ぬというのも悪く無いような気がしてきた。自分の周りにも金貨の中に埋まっているマジック・アイテムが顔を出している。好きな物に囲まれて死ぬ。

自らの創造主と自由に会話が出来るようになった。できれば、モモンガ様の供として一緒に冒険なりをしたかった。が、それは欲張りというものであろう。

あぁ、あと少しだ。自分の舞台が終わろうとしている。至高の御

方々が集めたマジック・アイテムという最高の観客達の拍手喝采を浴びながらパンドラは歌う。

『我が神のお望みとあらば
Wenn es meines Gottes Wille
私は望む、私の体が
W･nsch ich, da･ Leibes Last
今日にも土へと返り
Heute noch die Erde f･lle
そして、肉体に宿る魂が、
Und der Geist, des Leibes Gast
不滅の衣をまとうことを
Mit Unsterblichkeit sich kleide
甘美な天の喜びの中で
In der s･en Himmelsfreude
神よ、来りて我を連れ去りたまえ！
Gott, komm und nimm mich fort
それが私の最後の望み。
Dieses sei mein letztes Wort
身体が土の中で
Der Leib zwar in der Erden
虫に食われようとも
Von W･rmen wird verzehrt
私は必ず甦るだろう
Doch auferweckt soll werden
偉大なモモンガ様に美しく変えられ
Durch der gro･e Momonga sch･n verkl･rt
太陽のように輝く
Wird leuchten als die Sonne
もはや苦しみは無し
Und leben ohne Not
天の無上の喜びのなかで
In himml, scher Freud und Wonne
死は、私の何を損なうというのだろう？』
Was schadt mir denn der Tod

パンドラズ・アクターは、息絶えた。

Ｕｐｌｏａｄ　ｔｈｅ　ＷＯＲＬＤ　７

〈ＲＥＡＬ〉

先行販売記念イベントが盛況のうちに終わった。イベント会場の残熱は冷め、握手を求める行列も消えた。設置された道具を片付けているイベント運営会社のスタッフたちに「お疲れさまでした」と挨拶をして、彼女は控え室へと戻った。そして、急いで鞄からスマクロ（Smart Clock）を自分の左腕につける。彼女の静脈を認証し、すぐさまスマクロが起動した。

スマクロが映し出す立体フォログラフィーをエアタッチしてＹＧＧＤＲＡＳＩＬ関連のニュースを探す。被害者がログアウトできなくなって意識が戻らないという事件についてさまざまな憶測や考察が流れている。しかし、被害者がどこの病院に搬送されたかなどの情報は載っていない。

昨日の話では、被害者は病院に搬送されたという。

何処の病院だろうと彼女は思い巡らす。ユーザーが減っていたとはいえ、最終日イベントが行われているだけあって、被害者の数は三千人を超えていた。モモンガさんが住む第三新東京旧市街のユーザー数を考えれば、百人ほどであろうか。

被害者は地域ごとに同じ病院に運ばれた可能性が高いのではないか。彼女は、「第三新東京旧市街」「病院」と検索をする。

正規の病院の検索ヒット数はゼロであった。

「そうだよね……」と彼女はつぶやく。

病院などある訳がない。高額な医療費を払うことができる市民は、第三新東京新市街アーコロジーよりランクの上のアーコロジーに住むことができる人だ。貧しいアーコロジーに住む人は、消費期限が切れ、廃棄された薬を薬局で購入することくらいしかできない。

今度は、「第三新東京旧市街」「病院」「最寄り」と彼女は検索をする。

「え？　この病院って……」

本日のイベント会場が行われた会場の近くの病院であった。病院の規模から考えても被害者たちが搬送されていてもおかしくない病

院だ。不幸中の幸いということであろうか。
「どうしたの？　病院？　どこか悪いの？　大丈夫!!」
　控え室に入ってきたマネージャーが、彼女のスマクロで表示されている映像を見ていった。彼女が具合が悪くて病院を調べていたのだと思ったのだろう。
「えっと……　あ。少し喉に違和感があって」と彼女は言った。もちろん、嘘である。だが、昨日は早く帰りたいと彼に伝えていたのに、ノリノリで三次会に自分を遅くまで引っ張りまわした。昨日、ＹＧＧＤＲＡＳＩＬにログインできなかったのは彼に原因がある。彼が一次会で帰ることに同意していたら、自分もＹＧＧＤＲＡＳＩＬの被害にあっていたかもしれない。そういう意味では彼はファインプレーをしたということだ……。
「それは大変!!　ユウコちゃんが大変よぉ!!」とマネージャーは動揺し始める。マネージャーは、彼女のボディーガードを兼ねているため、体格が良く、黒服を着て真っ黒なサングラスをかけるとかなり怖い。四十を過ぎているというのに、体の衰えはまったく見えない。
「ダイゴロウさん、落ち着いてください。たぶん、気のせいだと思いますから」と彼女は慌てふためいているマネージャーを落ち着かせようとする。
「ユウコちゃんに万が一のことがあったら私……」とマネージャーは半泣きになっている。ちなみに、彼はオカマである。
「大丈夫。そうだ。じゃあ、私は……　念のために病院に行こうかな？」
「そうして頂戴。すぐに車を手配する――「大丈夫です。病院近くですから」と彼女はダイゴロウの言葉をさえぎる。心配性な彼は、病院まで付いてきてしまうかも知れない。彼女が体重管理のために通っているジムにも一緒に通い、隣でエアロビクスを一緒にやってしまうような人だ。
「ダイゴロウさん、明日のイベントの打ち合わせは休んでいいかな？
　今日と同じ流れだったよね？」
「もちろんよ！　その代わり、ちゃんと診断のこと教えてね！　ユウ

コちゃんの体のほうが大事だわ。細かい変更点があるようなら、夜にでも連絡するわ」
おっ、意外と今日はちょろい、と彼女は思う。
・
・
病院は、相変わらず人で溢れていた。特に、呼吸器内科の行列はひどい。お金がなくて人工心肺を買うことができない人たちは、慢性的な呼吸障害を患うのだ。彼女は人工心肺を付けていないが、それは彼女が貧乏だからではない。彼女は、人工多能性幹細胞（iPS）を分化させて肺を定期的に交換している。もちろん、それは人工心肺を買うよりも高額である。
彼女は、病院の案内窓口で「ＹＧＧＤＲＡＳＩＬの事件の患者の入院先はどこですか？」と何食わぬ顔で聞いた。そうすると、意外なことに、地下七階がその事件の被害者専用フロアになっていると、案内係は答えてくれた。ユウコはお礼を言って、そのままエレベーターに向かう。意外とあっさりと答えてくれたと彼女は思った。親族が見舞いに来たと受付係が勝手に勘違いをしてくれたのかも知れないと思う。
タイミング良く来たエレベータに彼女は乗り込む。
「何階ですか？」と先に乗った青年が尋ねてきたので、「地下七階です」と答えた。エレベーターの中は彼女とその青年の二人だけだった。
「あなたもお見舞いですか？」と青年が話しかけてくる。
「はい。あなたもですか？」
「そうです。実は、弟が入院することになって」
「そうだったんですね。早く意識が戻ると良いですよね」
「そうですね」
そんな会話をしているうちに、エレベーターは地下七階に着く。紳士的にその青年は彼女がエレベーターの開きボタンを押してくれていた。軽く会釈して廊下へと出る。
彼女は病室の扉の横に出されているネームプレートを見ながら廊下を歩く。病室から廊下へ長いケーブルが出ている。彼女はこの

ケーブルに見覚えがあった。これは、光ファイバーケーブルであった。彼女は、快適なインターネットを楽しむために、量子回線対応のインターフェイスに切り替えている。だが、いまだに光ケーブルを使っている人は多い。

おそらく、病室にケーブルを接続する端子がなかったので、どこか別の場所からケーブルを引いてきているのであろう。そして、ケーブルを引かなければならない理由。それは、病室でネット環境が必要となるからだと彼女は考える。ログアウトがやはりまだ出来ていないのであろう。

中々目当てのネームプレートが見つからないので、モモンガさんはこの病院じゃないのかな？　と不安を覚えながら歩いていると、彼女の前方の病室から警察官が出てきた。そして、見覚えのある顔だと思ったら、たっち・みーさんであった。

「ぶくぶく茶釜さんじゃないですか！」と、たっち・みーさんも彼女に気付いたようだった。ゲームの中でも久しく会っていない。随分と久しぶりな気がした。

彼女がたっち・みーに促されて病室に入った。病室は個室だった。真ん中に置いて有るベッド。そこに眠っているのは、間違い無く鈴木悟。頭に付けているのはログイン用のコンソールだが、それよりも彼女の目に入ったのは、両腕に何本も刺された点滴だった。

鈴木悟は、彼女が見る限り、眠っているようだった。

「ぶくぶく茶釜さんかい？」と、ベッドを囲むように椅子に座り、両腕を組んでいる男が言った。彼女はその男を見る。見たことのない顔だった。しかし、なんとなく彼が誰であるか分かった。

「武人建御雷さんですか？」

「おうよ」と彼は答える。

「ボクのことは覚えていらっしゃいますか？」と、武人建御雷の隣に座っている女性が言った。当然覚えていた。最後に会ったのは随分と昔のオフ会で、現実世界でもなかなかお互いに多忙で連絡を取ることが稀だが、今でも親友だと自分は思っている。第６階層巨大樹の中で語り合ったことは大切な思い出だ。

「やまいこさん、お久しぶりです」

「ぶくぶく茶釜さんも、お元気そうで。それに……お仕事も順調なようで……。この前、生徒の学習用（ノート）タブレットの抜き打ち検査したら、茶釜さんが出演しているのが沢山、その……職務上、デリートしなければなりませんでしたが」と申し訳なさそうに答えた。教師であるから、生徒が１８歳以下禁止のアダルト作品を持っていたら、対応しなければならないであろう。

「あ、いえ。年齢制限は守ってもらうのが当然です」と答えながら焦る。どのタイトルだろう？　タイトルによっては、友達辞めると言われてもおかしくない作品もある……。

「『陵辱攻めの七将』という作品は素晴らしかったですね。タイトルが示す通り、その元ネタとなっているのは、アイスキュロスのギリシャ悲劇、『テーバイ攻めの七将』でしょうか。ぶくぶく茶釜さんは、見事

にオイディプースとイオカステーとの間に生まれたイスメーネーの役を見事に演じきっていましたね。ただ、題名がアイスキュロスの作品から採用しているのに対し、実際の内容が、ソポクレスの『アンティゴネ』の内容であったのが大変気になりました。オイディプースとイオカステーとの間に生まれたのは、エテオクレース、ポリュネイケース、アンティゴネー、イスメーネー。そして、エテオクレース、ポリュネイケースは兄弟で戦い死ぬという悲劇。アンティゴネーは、同士討ちした兄二人を埋葬するために法を犯し、そして牢獄で自死するという悲劇。そして、ぶくぶく茶釜さんが演じたイスメーネーは、生き続けなければならないという悲劇。辱めを受けながらも生きなければならない、自らの誇りを失わずに陵辱に耐える日々。胸に来るものがありました。しかし、問題はそのイスメーネーの陵辱を担当する七将です。時代考証が少しいい加減でしたね。たとえば、トロイの三角木馬にイスメーネーを乗せて楽しむカパネウスは、オーギュギアイ門を攻める際に、ゼウスから雷撃を受けて死亡したとされています。イスメーネーが陵辱を受けるのがテーバイでの戦闘後の話であるので、カパネウスが生き残っているということが原作と相違しています。また、オンカイダイ門を攻めたヒッポメドーンは、イスマロスによって討たれています。彼が生きているのも違和感がありました……」

「あ、タブラ・スマラグディナさんもお元気そうでなによりです」と彼女は、終わらない彼の蘊蓄を遮った。誰かが止めなければならない。モモンガさんであれば、それを楽しそうに聞くことができるだろうが、他のギルドメンバーにとっては果てしない苦行にしかならない。

それにしても、さすがはタブラさんである。愚弟と同じエロゲーを語っているとは思えない。エロゲーを熱く語っているという点では同じであるが……。

「これだけの人が集まってくれたんだ。モモンガさんも喜んでいるだろうね」とたっち・みーがベッド脇の椅子に座った。そのベッドの反対側には、ウルベルト・アレイン・オードルが先ほどから不機嫌そうに黙って座っている。

「ウルベルトさんもこんにちは」とだけ簡単に挨拶をした。たっち・

みーさんと何かあったのだろうということは簡単に予想することができた。いつもそうだったから。
「それで、モモンガさんの容態はどうなのですか？」と彼女は言った。
「命には別条はないみたいだ。意識はないけれど、生命の維持に対してはこの通り、病院の設備は万全であるし――」
「――現状は、最悪としか言えませんよ」とたっち・みーの発言にウルベルトが割って入る。
「強制的にもログアウトが出来ず、意識も戻らないというのは、今までのバーチャルゲームでは考えられない。これは、Ｇｅｉｓｔ（２１ｇの魂）シンドロームですよ」
　自分以外の人間が、気まずそうに視線を床に向ける。自分以外はもう、ウルベルトさんが言ったＧｅｉｓｔ（２１ｇの魂）シンドロームというものを知っているのであろう。たっちさんも気まずそうにしている。おそらく、私に心配をかけないようにたっちさんは気を使ってくれたということも分かる。
「ぶくぶく茶釜さんは、電脳法でなぜ、五感の内、味覚と嗅覚は仮想世界で完全に削除されているかご存じでしょう？　触覚もかなりの制限がされていますね？」とウルベルトさんが話を続けた。
「それは……」と彼女は答えられない。
『味覚と嗅覚、そして触覚が仮想世界で実装されてしまうと、現実のように弾数などの制限がないし、ずっと快感神経を刺激し続けることが出来てしまい、そうなると人間の精神に変調をきたす恐れがある。肉体的にも、男性で言えば精巣が空であるのに関わらず、射精信号を脳が送り出すことにより、深刻な臓器障害へと陥る可能性があると言われている。また、女性でいえば、想像妊娠によりホルモンバランスが崩れる、また脳の信号により、生殖器が妊娠をしたと誤認識し、実際には妊娠をしていないにも拘らず月経を止めてしまう可能性が指摘されている』というのがエロゲー業界に入る時に受けた講習の内容だ。しかし、それは、エロゲー業界としての知識であり、一般的な常識ではない。彼女が説明をするのにははばかりがあった。
「その理由は、単純です。人間の精神、心、魂とでも表現される２１ｇ

が、本来の肉体に宿るべきか、それとも仮想現実のアバターに宿るのか、それが曖昧になってしまうからです。味覚、嗅覚を遮っていれば、魂は現実の肉体へ宿り続ける。強制的にログアウトされても、それは夢から覚めたということになる。しかし、モモンガさんを始め、今回のユグドラシルの被害者は、運営が強制ログアウトをさせても意識が戻らない。これは、魂が仮想現実の方へ移ってしまったということなのですよ」

その言葉に、彼女は息を飲んだ。そんなことが有り得るのだろうかと。

「モモンガさんはずっと眠ったままになるということですか？」と彼女は尋ねる。ウルベルトが言っていること。あまりにも突飛なことのように思える。

「正確にその答えを返すとすれば、モモンガさんの意識はずっと覚醒している。意識がないという状態ではないんですよ。問題はその『意識』が、ユグドラシルのアバターと結びついてしまっているということです。ただ、この現実世界を基準に考えれば、意識不明の昏睡状態ということになるでしょう」

「意識を戻す方法はないのかな？　この前、授業の実験で残ったアンモニアなら僕の学校にまだあるけど」

「眠っているだけならその方法は有効でしょう。しかし、問題は魂がこの肉体にないということですよ。アンモニア臭によって肉体は反応するでしょうが、肝心の目覚めるべき意識がここにはない」

「運営も動いているぜ、きっと」

「それはどうだろうね。電脳法違反の疑いで、本社は家宅捜索を受けたって話しだし。むしろ、警察様のお相手で、被害者の救出活動に手が回っているかは疑わしいね。警察も、運営を起訴することを優先しているようですしね。ねぇ、たっちさん？」

「ウルベルトさんの言い方だと、警察が人命を蔑ろにしているというように聞こえますが、そんなことはないですよ。この事件が発生してからまだ１２時間です。しかし、すべての被害者が病院に運ばれ、生命維持に必要な処置を受けているという報告が入っています。これは、人命を最優先していたからこそできた対応であるのではないですか？」

「対応が早すぎますね。まるでこのことを予期していたみたいだ。なんですか？　この病院の、被害者専用のフロアって？　まるで予約されていたみたいですよ。こうなるって警察は分かっていたんじゃないんですか？」

「そんなはずないでしょう！」

病室の温度が下がったように感じた。
「あの、病院では静かにしましょう……　廊下は走るなみたいなこと言って恐縮ですけど」と肩を縮めながらやまいこが言う。
「それに、喧嘩はやめようぜ」
「すみません」とたっち・みーが頭を下げた。ウルベルト・アレイン・オードルも不機嫌そうに腕を組んで、組んでいた足を組み替えた。
「肉体のほうは生命維持装置がついているし、ひとまず命に別状はない。それだけでも私は分かったので、一安心ですよ」とタブラがわざと明るい声で言う。
トントン
「失礼します」という声とともに、病室の扉が開かれる。
「あ、姉ちゃんも来てんだ」
病室に入ってきたのは、彼女の弟であった。弟も自分と同じように、モモンガさんの容態を心配しつつ、久しぶりにあった仲間と挨拶を交わしている。どうやら、運営に問い合わせたら入院をしている病院と病室を教えてくれたということであった。自分以外は、そうやってモモンガさんがこの病院に入院していることを知ったらしい。
突如病室に、音が流れた。
「速報が入ったよ。速報が入ったよ」という聞き覚えのあるロリキャラの声だった。彼女の同僚で、共演作品も多い声優の声であった。どうやら愚弟のスマクロから音が発せられているようであった。
「おい、弟。病院で電源切っていないとはどういうことだ？」と彼女は低めの声で弟を睨む。
「いや、病院なんてめったに来ないからすっかり忘れてて……　って、それより大変だよ！　死者が出たようだ！　って、この数やばい」と愚弟が言い、スマクロの映像を病室の全員が見れるように拡大した。
『昨日のＹＧＧＤＲＡＳＩＬの事件の被害者が多数死亡した模様。その数は数百人に上る。原因について公式の発表はまだありません』
「マジかよ……　モモンガさん、大丈夫だよね？」と、弟が心配そうにモモンガを見つめている。心電図には、規則正しくモモンガさんの心臓の鼓動が映し出されている。

「事態は最悪ということですね。Ｇｅｉｓｔ（21gの魂）シンドロームによる肉体と魂の連鎖反応……」
「ウルベルトさん、それはどういうことですか？」とタブラ・スマラグディナが尋ねる。病室にいる全員の注目がウルベルト・アレイン・オードルに集まる。
「魂の死は肉体の死であり、肉体の死は魂の死であるということです。おそらく、仮想現実のアバターが死に、そこに宿っていた魂も死んだ。それに連鎖して現実世界の体も死んだということでしょう。これは、推測ですが」
「でも、それが原因なら、数百人というのは多くないかな？　未知のフィールドに行けば別だけど、そんなに簡単にプレイヤーが死んだりしないと思う」
「それは通常の場合でだろ？　俺がログアウトができなくなった場合にまず考えることは……」
「とりあえず一度死んでみる、ですね」とタブラがそれに続く。
　死んで自動で復活するか、ログアウトできるかは、まず試してみることのひとつであろう。また、死んだとしてもレベルダウンしてもすぐにレベルは上げられる。それに、ユグドラシルのサービス終了は決まっている。いまさらレベルが下がることに抵抗を感じるプレイヤーは少ないように思われた。わざと死んでみる、それはログアウトのための真っ当な手段であり、そしてその分性質（たち）が悪い。
「でも、そんなことって……　モモンガさん」とやまいこさんが両手で顔を覆う。
　居ても立ってもいれなくなり、ベッドで寝ているモモンガの手を取った。そして、強く握り締める。
「モモンガさん、ゲームの中で死んだりしないでください。ゲームの中で死んだりしないでください……」と彼女は何度もモモンガに呼びかけ続ける。モモンガの体にかけてあるシーツに大粒の涙がひとつ、またひとつと落ちていく。
　そんなことをしても無駄だ、と誰もぶくぶく茶釜を止めるものはいなかった。

「速報が入ったよ。速報が入ったよ」と再び、ペロロンチーノのスマクロから音声が流れる。その音声は明るい声であるにもかかわらず、その音声を聞いた全員が、悪い予感を覚えたのであった。

「ユグドラシルの被害者たちが搬送されていた病院二つで爆発だって……」とペペロンチーノは自分のスマクロ（Smart Clock）を見ながら青い顔をしながら言った。

「は？」と他の全員がほぼ同時に声を合わせて言った。

ペロロンチーノは再びスマクロの映像を大きくした。爆発のあったアーコロジーの病院区画の状況が音声付映像で映し出されている。病院の建物からは黒煙が吐き出され続け、病院区画上方のドームを煙が覆い、アーコロジー内は薄暗い。

「病院区画にいる方は速やかに酸素マスクを装着し、各避難所の気密室へと移動してください。七分後に病院区の酸素の強制排出を行います。八分後には、一時的に病院区内が無酸素状態となります。また、病院区画は既に封鎖されております。その他の区画への移動はできません。病院区におられる方は、各避難所の気密室へと速やかに移動してください。高齢や怪我を負われているなど、避難に際して手助けが必要な方の手助けもお願いします」という音声がスマクロを通して流れている。爆発のあった区画で実際に流れている音声のようだ。

「おいおい、消火の為とはいえ、病院区画で酸素排出って無茶苦茶だぜ。逃げ遅れる人とか出るんじゃないか？」

「それに、ユグドラシルの被害者の人達は意識不明だよ。自力で逃げることはできないよ」

「消火システムは自動制御ですから、止めようがないのでしょう。火災が区画で発生してしまうと、どんどん酸素が消費され、一酸化炭素などの有害物質が発生します。気密室へ逃げられなかった方の死亡リスクは同じですよ。それに、別の区画に延焼してしまうと、被害はどんどん大きくなりますからね。ただ、意識がない方たちは、まずいですね。特に、ユグドラシルの被害者たちはコンソールを付けていますからね。無理やり引きはがして体だけ持っていくわけにもいかないでしょうし……」とタブラ・スマラグディナが武人建御雷とやまいこの言葉を補足するように言った。

「ユグドラシルの被害者たちは絶望的ですね。しかし爆発とは……テロか？　だが、爆破テロなど随分と古典的な……。けれど、タイミング的に考えてもユグドラシルの被害者たちを狙っての可能性があるね。けれど、何が狙いでしょう？」とウルベルトが口を開く。
「ん？　すみません。緊急の召集があったみたいです。私はこれで失礼します。またお会いしましょう」とたっち・みーさんは一礼すると、急いで病室から出て行った。
「……緊急招集かよ。事件性があるってことじゃねえかよ」と武人建御雷が天井を眺める。
「モモンガさんは安全なのかな？」とぶくぶく茶釜は、安らかな顔つきで寝ているモモンガさんの顔を眺める。顎や口の部分の髭が少しだけ伸びている。
「ユグドラシルのと今回の爆発が関連があるなら、この病院も警備されるようになると思うけど」とペロロンチーノが言う。
「しかし、テロという線で考えると、ログアウト不可というのも電脳法上では誘拐となる。けれど、誘拐しておいて爆弾で殺す？　アーコロジーに爆発物を持ち込むほうが大変というか、不可能に近いはずだけどね」
　タブラさんの指摘に全員が頷く。二十年前に勃発したアーコロジー戦争の影響で、武器だけでなく爆発物の取り締まりが厳しくなった。狭心症の薬として利用されていた医療用ニトログリセリンですらアーコロジー内で使用することが禁止となったほどだ。
「ユグドラシルのプレイヤーの中に、要人がいたと考えてはどうでしょう？　その人を暗殺したいがために、今回のユグドラシルの事件を引き起こし、意識を奪っておいて、爆発で殺す。爆発で殺せなくても酸欠で死ぬ可能性が高い。……ですが、そのためにユグドラシルのプレイヤーの全員の意識を奪い、病院を爆発するというのは、無差別的で、考えただけでも腹立たしいことですが」
「そうですよ。それで、モモンガさんのようになんの罪もない善良な市民が被害にあったり、命を落としたりしている……ボク、そういう

のは許せない。鉄拳で一発殴りたい」
「テロリストの犯行であるならば、犯行声明などがネットでアップされていませんか？　こういう強硬な手段に出る連中は、自らが酔いしれている崇高な理念ってやつを披露するってのが、古今東西のテロリストの共通行動です」とウルベルト・アレイン・オードルは言う。
　ウルベルト・アレイン・オードルが拘るのは『悪』だ。しかし、その悪とは相対的な悪ではない。相対的な悪は相対的な正義と同じように可変的で流動的だ。戦争で人を殺せばそれは悪ではなく正義の行為となる。そんな中途半端な悪など、ウルベルト・アレイン・オードルはごめんであった。歴史が始まってから、そしてそれが終わるまで一貫して悪であり続けるもの。相対的にではなく絶対的に。誰もがそれを悪だと罵り、軽蔑しながらもその悪が放つ拒否できない魅力に惹かれ続ける。そんな悪を、ウルベルト・アレイン・オードルは求めていた。中途半端な悪は、中身のない正義と一緒だった。
　民主主義など愚かだ。地球が環境破壊によって滅亡する寸前まで有効な手段をなんら講じられなかったではないか。結局、残ったのは、大企業による三権の独占であった。
　個人の人権など、地球全体の生命が滅びに瀕しているという状況下で優先すべき事項ではない、今の時代は誰もが等しく人権を制限される時代だ。結局残ったのは、法の保護の無い危険で命を縮めるような労働環境だけだった。
　義務教育！　そんなものに資源を投下している余裕がない。社会の中で働きながら教え、また学べば良いではないか。蓋を開けてみれば、明確な学歴社会と、高額な学費。貧乏人の子供は低学歴。高額な学費など払うなど不可能だ。抜け出せない蟻地獄であった。
　しかし、ウルベルト・アレイン・オードルはそんなことはもはやどうでも良い。自らが追求するのは、絶対的な悪だ。百年前に正義とされていた民主主義が、人権の尊重が、機会の平等が、それが今では環境保護の名のもとに悪しき人類の遺産とされている。
　そんなことはウルベルト・アレイン・オードルにはどうでも良い。求めるのは、時間軸を超越した、普遍的で絶対的な悪だ。

「犯行声明ですか……えっと……あっ！　リアルタイムで流れ始めた！」と動画サイトを検索していたペロロンチーノがその動画を見つける。

・

「我々は、人類防衛軍である。人間という種の尊厳を守るために行動している存在である。まずは、ＹＧＧＤＲＡＳＩＬのプレイヤーで命を落とした方々。そして、二つのアーコロジーで起こった爆破事件の犠牲者に哀悼を捧げる。ＹＧＧＤＲＡＳＩＬと病院爆破、これらは間違い無く我々が計画し、そして実行したものである。非道で残虐な行為であると非難されるかも知れない。しかし、歴史が我々が起こした行動の正しさを証明してくれるであろう――」

「なんだ？　この覆面野郎は？　言っていることも格好も、厨二病だぜ？　組織名も、今時それはないだろう」とタブラ・スマラグディナが言う。その言葉を聞いて、彼以外の全員が、お前も厨二病だろうと一瞬言いたくなったが、それを言わずに、九代目ＫＡＩＴＯのボカロ音声に似た声色に耳を傾け集中する。

「我々の目的は、この世界を支配している大企業群が密かに計画を進めている『箱船計画（プラン・ノア）』を破壊することだ！　その為にはどんな犠牲も厭わない――」

「あれ？　回線が切れた？」

「この人達許せない」と回線が切れたことに動揺する弟を見ながら彼女は怒りを露わにする。低い声である。

「情報封鎖したのだろうな……。あ、俺のスマクロも圏外だわ。たぶん、全ての通信手段が落とされたわ」と武人建御雷が自らのスマクロの電源を入れた後、両手を挙げる。

　緊急の情報統制が必要な場合は、人体には無害でありながら通信を阻害する素粒金属がアーコロジー内に物理的に放出される仕組みとなっている。

「それでも、支配者層の情報統制をかいくぐって二十秒ほどのリアルタイム動画を流せる技術力って、もの凄いですね。全部の通信手段を

落とすって、逆に言えばそれ以外の方法が無かったってことですよ。運営のサーバーに侵入して、Ｇｅｉｓｔ（21gの魂）が魂の宿り場所を間違えるほどの、現実世界を再現をするほどの膨大な量のプログラムをＹＧＧＤＲＡＳＩＬの中にぶち込むってことが出来たのにも納得ですよ」とウルベルトが言う。

「モモンガさんは大丈夫だよね？　ゲームとのコネクトが外れて、魂っていうのが迷子にならないかな……？」とやまいこさんがぼそりと言った。

「これは、見たところ有線接続だから大丈夫じゃないかな。それにコンソールのライトがグリーンになっているし、正常に接続されているってことだと思いますよ」と弟が言う。たしかに、弟が言う通りだった。コンソールが緑色に光っていれば通信環境に問題はない。赤色であればサーバーとの接続不良という表示である。

「流石は病院ってことだな。量子回線による無線接続が普及した時代に、光ファイバーケーブルをこの病院は使っているのはどんだけ時代が遅れているんだと思ったが、非常事態の時には有線はやはり強いな。最新の導入より人命最優先ってことだな」と武人建御雷さんは言う。

「いずれにせよ、とんだ事件にモモンガさんは巻き込まれてしまったということですね」とタブラさんが大きなため息と共にそう言った。そしてそれに全員が頷いた。

Naturarum Divisus
Naturarum Divisus 1

モモンガは、完全不可知化（パーフェクト・アンノウアブル）の魔法で自らの姿を隠しつつ、ナザリック地下大墳墓を後にした。

地面すれすれの高さを飛行（フライ）し、発見されにくいように移動をする。

ナザリック地下大墳墓は沼地であったはずだ。しかし、現在は草原である。自分の知っているユグドラシルと似て非なる世界のように思える。

この世界は本当にユグドラシルなのか？　それがモモンガの疑問だった。

まず第一に疑問に思ったのは、自分が行ったことのある街などに転移ができないということだ。指輪（リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン）でナザリックの表層部には転移が出来た。転移自体が出来ないということではない。

それならば考えられるのは、『自分が行ったことがないから』である。転移魔法は、通常であれば、自分が一度行ったことがある場所にしか行けない。

だが、この世界は自分の姿やナザリックの状況から、ユグドラシルの中である可能性が高い。

まずは一旦東へとひたすら飛び続け、そしてナザリックから十分離れた地点から北へ向かう。そして、今度はまた西へ。時折、岩陰などを見つけたらそこに隠れ、尾行がいないかどうかなども確認をする。

ん？　祭りか？　モモンガが向かっている方向に集落が見える。だが、様子がおかしい。

あれは村に火がつけられて燃えているのだ。

俺と同じように、ＮＰＣに襲われているプレイヤーがいるのか？

助太刀に入るか？

モモンガは飛行を一度中断し、草原に立つ。そして一瞬考えるが、

助けに行くという考えを一蹴した。

まずは、百時間の経過を待つべきだ。

「あらゆる生ある者の目指すところは死である（The goal of all life is death）」が使用できるようになるまでは戦闘行為は避けるべきであろう。

それに……。この世界は危険だ。死の支配者（オーバーロード）という種族であるからか、それとも、鈴木悟という人間の本能が警鐘をならしているのか、この世界でＨＰがゼロになるということに対して只ならぬ危険を感じる。死の支配者（オーバーロード）という種族である自分が既に失ったはずの生命。それが、心よりももっと深い場所で光り輝いているように思える。アンデッドという身体の常闇の中に、一本の蝋燭の炎が揺らめきながらアンデッドの体を燃やしているような奇妙な感覚だった。

リスクを冒すべきではない。まずは状況を把握することだ。ここがユグドラシルの中であれば、運営の対応を大人しく待てばよい。

仮想世界が現実となったという馬鹿げたことが起っているとしたら、もっと事態は深刻だ。ＨＰがゼロとなったら死ぬ可能性がある。

他のプレイヤーのことなど知ったことか……

――誰かが困っていたら助けるのは当たり前――

「たっちさん……」

ふぅとモモンガは息を吐き出す。そして先ほどの自らの決定を覆す。先ほど思い出した言葉は、Ｐｌａｙｅｒ Ｋｉｌｌｅｒに遭い続け、ユグドラシルを辞めようとしていたモモンガを救ってくれた言葉だ。この言葉を思い出してしまったからには、助けに行かないわけにはいかない。

異形種だろうとも、お互い同じプレイヤーだ。ＧＭコールやコンソールが発動しない、ＮＰＣが襲ってくるというような状況であるなら、協力体制が築ける可能性が高い。

モモンガは再び飛行（フライ）を使って、その集落へと向かう。

モモンガがまず見つけたのは、村と森林への間。二人の少女と全身甲冑（フルプレイト）に身を包んだ騎士。どうやら、少女たちは、村から森林へと逃げようとしたが、追いつかれてしまったのであろう。

可能性として考えられるのは、四つ。

騎士がＮＰＣで、少女たちがプレイヤーである可能性。騎士と少女たち、どちらもプレイヤーである可能性。騎士がプレイヤーで少女たちがＮＰＣであるという可能性。そしてどちらもＮＰＣである可能性。

モモンガにとってデメリットとなるのは、騎士がプレイヤーで少女たちがＮＰＣであった場合だ。その場合はプレイヤーと敵対することになる。最悪、プレイヤーを襲ってくるＮＰＣを助けるという愚かな行為となってしまう。

どちらもプレイヤーである場合は、少女たちと友好的な関係を築ける可能性がある。両者ともＮＰＣであった場合は、助け損というものであろうか。

いや……そういうのではないんだ。

――誰かが困っていたら助けるのは当たり前――

それは、メリットとデメリットで成り立つものではない。

モモンガは、両者の間に割って入る。騎士は、突然二人の少女と自分との間に割って入ったモモンガに動揺しているのだろう。剣を振ることを忘れ、モモンガに視線を送るばかりだ。

モモンガは暴力とは無縁な生活をしてきた。さらにはこの世界が仮想ではなく、より現実に近いと実感している。にも関わらず、剣を持つ相手と対峙しても恐怖心は一切生まれない。

その冷静さが冷徹な判断を下す。

心臓掌握（グラスプ・ハート）

騎士はあっさりとその心臓が握り潰されて絶命し地面に倒れる。モモンガは大地に転がる事切れた騎士を冷たく見下ろす。あぁ、俺は人間を辞めてアンデッドになったのだと実感をした。鼓動する心臓を握りしめたとき、躊躇いを感じることなどなかった。紙風船の如く、握り潰したい衝動さえあったほどだ。

ははは、とモモンガは笑う。ユグドラシルのサービス終了を迎え、アインズ・ウール・ゴーンの仲間たちを失い、そして仲間達が造りあげた守護者たちを殺した。自らの想像した我が子とも言えるパンドラズ・アクターを見殺しにした。そして、ギルドの拠点、ホームであ

るナザリックから逃げ出す。
今の自分は、血も涙も、肉体も、そして皮すら失った骨だ。俺には何も残っちゃいない。鼓動していた心臓は、たしかに脈打っていた。強く、生きようと。それを自分は躊躇いもなく握り潰した。人間としての一線も越えてしまった。
ははは。モモンガは自嘲気味に笑う。
少女二人は、モモンガの姿を見てガチガチと震えている。人の命を奪いながらも笑っているアンデッドに恐怖をしたのであろう。
モモンガは、年上と思える少女の背中から血が流れていることを発見した。先ほど死んだ騎士から斬られたのであろうか。モモンガは無限の背負い袋（インフィニティ・ハヴァザック）からポーションを取り出す。
「大丈夫でしたか？　怪我をしているじゃないですか。飲んでください。……つまらない下級治療薬（マイナーヒーリング・ポーション）で恐縮ですが」
敵ではないことをまずアピールし友好な関係を構築する。笑顔で名刺交換をするというような、極めて打算的な社会人としてのスキルだ。
だが、二人の少女は名刺を笑顔で受け取るような雰囲気ではなかった。
その二人の引きつった顔を見て、モモンガは自らの失敗を悟る。たしかに、下級治療薬（マイナーヒーリング・ポーション）はつまらない物過ぎるな……。
ユグドラシルを始めた初心者であれば、ＨＰが全快近くなるであろうが、レベルが三十を超えたら下級治療薬（マイナーヒーリング・ポーション）など、ドロップしてもアイテムボックスを埋めるだけのゴミでしかない。ラガービール系列の会社に、ウルトラドライなビールをお土産として持参していくようなものだ。
失態だ……とモモンガは思った。焦ったモモンガは、「御社の課題を解決できるソリューションをご用意できると思います。何か御社でお困りのことはございませんか？」と、提案能力のない営業マンの定型句をモモンガは反射的に発してしまっていたのであった……。

Naturarum Divisus 2

モモンガの言葉に脅えるだけの二人の少女。
姉妹か？　顔立ちが似ているな、などモモンガが考えていると、姉らしき少女の股間が濡れていく。それに合わせて妹も――。そして周囲に立ちこめるアンモニアの臭い。
社会人としてモモンガのスルー能力は鍛えられている。スルーしようとも考える。だが、困っている人を助けるのは当たり前、そうですよね、たっちさん。
モモンガは黙って下級治療薬（マイナーヒーリング・ポーション）の蓋を開けた。
姉らしき少女はモモンガが何をするのかを察したのであろう。モモンガの方に背中を向ける。まるで自らの妹を庇おうと抱きしめるようだった。
なんだ、やっぱり傷を癒やして欲しいんじゃないか、とモモンガは安心しながら背中に下級治療薬（マイナーヒーリング・ポーション）をかけていく。もちろん、手元が狂った振りをして彼女の股間あたりにもワザとポーションをかけるという心遣いも忘れない。アンモニア臭も少しは緩和するであろう。
「妹にはどうか――」
「皆まで言わなくても大丈夫です」とモモンガは姉の言葉を遮る。もちろん、妹の股間あたりにも下級治療薬（マイナーヒーリング・ポーション）をかけるつもりだ。
「うそ……」と姉が言った。そして、姉は自らの背中を触る。信じられないのか、何度か体をひねったり背中を触ったりしている。飲む方が効果は高いと言われているが、あの程度の傷であれば下級治療薬（マイナーヒーリング・ポーション）でも十分であるらしい。消臭効果もあるとはモモンガも知らなかった。嗅覚が実装されて初めて分かるポーションの効能であろう。
「痛みは無くなりましたか？」
「は、はい」
ぽかーんという擬音が表現として最も近い顔で頭を振る姉。
「それはよかった。それに、いろいろと手元が狂って服を濡らしてしまいましたね。すみません」と、モモンガは自ら謝り相手へのアフターフォローも忘れない。いや、そもそも、両者の間でお漏らしなど

という事実はないように振る舞う。社会人として求められる三つの素振(そぶ)り、言ってない振り、見てない振り、聞いてない振り。基本である。

「た、助けていただき感謝します」

「それよりお前たちはプレイヤーで間違いないですよね？」とモモンガは早速用件を切り出す。姉妹で仲良くユグドラシルでプレイするというのは何も珍しいことではない。やまいこさんとあけみさんもそうであった。珍しいことではない。また、現実世界で本当の姉妹でなくても、ユグドラシルで姉と妹の関係をロールプレイングしている人間だっているであろう。

しかし、問題は下級治療薬(マイナーヒーリング・ポーション)で傷があれほど完治するということだ。つまり、彼女のレベルは低い。姉妹プレイを優先させて、レベル上げをあまりしていなかったのであろう。着ている服も、魔法が付加されているとは思えない。まるで本当の村娘のような格好をしている。

「はうぃ？」

モモンガは自らの予想があたったことに大いに満足した。

「やはりそうでしたか……。それで、今の状況は？」

「いえ……。突然村を騎士が襲ってきて……」

自分と同じ状況だった。やはりプレイヤーは突然の状況に混乱しているのであろう。

「あ、あと、図々しいとは思います！　で、でもあなた様しか頼れる方がいないんです！　どうか！　お母さんとお父さんを助けてください！」

……どうやら、姉妹プレイではなく、家族プレイであったようだ。ユグドラシルで家族をロールプレイングしているプレイヤーを聞いたことはなかったが……。

いや、この二人が現実世界でも本当の姉妹で、実年齢がこの外見どおりであるなら、現実世界で本当に親を失っているかも知れない。二人の子供を小学校に行かせようと思ったら、両親は過労死している可能性が高い。

父親と母親をロールプレイしている人だって、高額な医療費が払えず子供を失っている哀しみの慰めとしてユグドラシルでプレイしていたのかも知れない。家族の温もりを求めてユグドラシルに求めていたのであろう。そして、自分も同じだ。アインズ・ウール・ゴウンのメンバーはモモンガにとって大切な仲間であり家族同然であった。いや、だった……。彼女たちの家族プレイを馬鹿にする気にはなれなかった。

「村を襲ったのは、この騎士達と同じですか？」

「はい」

モモンガは考える。第9位階の心臓掌握（グラスプ・ハート）で、なんら抵抗らしき抵抗をせず倒せる相手。もちろん、先ほど倒した騎士のレベルが偶然低かった可能性もあるが。だが、危険度は低い。

「分かりました。助けるように鋭意努力します」

モモンガが約束をすると、姉が大きく目を見開く。助けるという言葉が信じられないような驚きであった。

「あ、ありがとうございます！　ありがとうございます！」と立ち上がり、地面に頭がついてしまうのではないかと思うくらい深く頭を下げる。

「……気にしないでください。困っている人を助けるのは当たり前ですから」

「お、お名前は？」

「ふっ。名乗るほどの者じゃないさ」とモモンガはキメた。

「はい？」

「あ、いや……。今のは忘れてください」

モモンガは急に恥ずかしくなる。

「いえ、助けてもらったご恩を忘れるなんて……」

「記憶操作（コントロール・アムネジア）！」とモモンガは問答無用で姉妹の記憶を消去した。

・

モモンガは、嫉妬する者たちのマスク、通称、嫉妬マスクを装着し、村を飛び回り、騎士たちを殺して回る。それは、モモンガがたっち・みーの言葉を思い出したからである。

「モモンガさん、どうして正義のヒーローは、変身をするのか知っていますか？」
「詳しくは知りませんが、強くなるためですか？」
「それが違うのですよ。その正体が誰であるか分からないようにするためです。その正体が、実は身近な人であるかも知れない。そんな匿名性を得るために正義のヒーローは変身をするのです！　そして、匿名性を得ることにより、正義は普遍的なものであると暗に示しているのです！」
「……もしかして……たっちさんがいつも全身甲冑（フルプレート）を装備して顔を見せないのはその為ですか？　「正義降臨」ってエフェクトは、魔物と遭遇する度に使っているようですけど……」
「さすがモモンガさんですよ。そこに気付いてくれるとは！　そうなのです。私は正義を普遍たらしめるために敢えて兜を脱がないのですよ！」

・

・

「魔法の矢（マジック・アロー）」
モモンガが魔法を放つと十本の矢が自動追尾し、騎士たちを貫き絶命させていく。
弱いな……とモモンガは安堵する。第一位階の魔法で倒せてしまう。だが、気になるのは、そんな雑魚とでも言えるＮＰＣに殺されてしまっている村人たちだ。死体があちこちに転がっている。
あの二人の少女といい、弱すぎる。もしかしたら、姉妹プレイ、家族プレイだけでなく、村人プレイをして遊んでいたプレイヤーなのかも知れない。
騎士たちを全滅させ、モモンガは村を歩く。
焼け落ちた納屋の横で、お互いにきつく手を握り、絶命している男女の死体をモモンガは見つめる。きっと、この二人が先ほどの少女たちの両親であろう。どうやら、少女たちは母親似であるようだ……。
アバターも家族で似せるように作るとは、家族プレイも徹底しているとモモンガは感心はするが、死体が目の前に転がっているという考

えられない状況でもモモンガの感情は動かない。現実世界で同じような状況であれば、気が気でないであろう。
やっぱり俺、人間辞めちゃったのかな？　それに、この状況は一体なんなんだ？　とモモンガは考え込む。
・
「あの……助けていただきありがとうございました」
村の何処かに隠れていたのであろう。生き残った村人たちが騎士たちの全滅を知って家屋の外に出始めていた。そして、村の代表者らしき人物がモモンガに恐る恐る近づき、声をかけた。

「この村が襲われているのを偶然見つけたので。もう少し早く私が駆けつけていれば……」とモモンガはふっと転がっている村人の死体の方へと視線を向けた。

自分がもっと早く駆けつけていれば助かった命もあったかも知れない、とモモンガは悔いているように振る舞う。

「いえ、あなた様が助けに来て下さらなかったら、村人は全員殺されていたでしょう。本当に感謝します」と村長らしき男は頭をまた深々と下げた。

「ところで……私はアインズ・ウール・ゴウンのモモンガです。失礼ですがあなたは……？」

アインズ・ウール・ゴウン。ユグドラシルでは悪名が轟いていた。だが、それだけ知名度があるということだ。印象は良くないかも知れないが、村を助けたという恩義がある。それに、どこのギルドだろうが、プレイヤーが一丸となって協力するべきであろう。

「名乗るのが遅くなって申し訳ございません。私は、このカルネ村の村長を務めております、マルナゲスと申します」

徹底した村人プレイだな、とモモンガは思う。カルネというのがギルド名であろうが、その拠点であると思われるこの村は、はっきり言って貧相だ。課金アイテムを全く使っていないような木造の荒ら屋。モモンガが上位創造魔法で作った方が百倍は良い拠点が出来るであろう。モモンガにとっては何が面白いのかさっぱり分からない村人プレイであるが、それだけユグドラシルが自由度が高かったゲームであったということだ。それに異形種を狙ってＰＫを繰り返すような集団よりは好感が持てる。

レベルを上げて強くなることだけがユグドラシルの遊び方ではない。それぞれの遊び方があった。それは尊重されるべきだ。

「ん？　話の途中で申し訳ございませんが、新手が来たようです」とモモンガは言った。敵感知（センス・エネミー）が新たな敵意を感知したのだ。走っているにしては早いが、飛行（フライ）などの移動魔法を使っているにしては遅い。

「真っ直ぐにこの村へ向かっているようですね。先ほどの騎士たちは先陣であったということでしょう」
「モモンガ様！」とマルナゲスは懇願している。
「もちろんです。乗りかかった船です。村長さんは、念の為に村人たちを集めてください」
モモンガは、飛行（フライ）の魔法を唱えて、敵意のある方角へと向かう。
村から見える草原の丘の先を馬に乗って走ってくる集団。敵意はそこから向けられている。
「〝魔法二重化（ツインマジック）〟〝魔法三重化（トリプレットマジック）〟魔法の矢（マジック・アロー）」
魔法の矢が向かってくる騎士たちに向かって飛ぶ。目指す先は彼等の心臓部分。急所である場所を守っている彼等の装備品もモモンガの魔法の前では意味を成さない。正確無比のその矢は寸分違わず心臓を貫き破壊する。
「む？　一人だけ生き残ったか……」
先頭を駆ける男。後ろの騎士たちが次々と落馬していくのを振り返ること無くただモモンガに向かって馬を走らせている。
「なるほど……。魔術詠唱者（マジック・キャスター）と距離を取って戦うことの愚かしさを知っているのだな？　だが、死の支配者（オーバーロード）相手に距離を詰めるということは、それだけ死に近づくということを教えてやる。魔法効果範囲拡大（ワイデンマジック）」
馬に乗っている人物は腰から剣を抜く。
「俺は王国戦士長のガゼフ・ストロノーフ！　王国の民を害する輩は俺が許さない――――――、とガゼフが言うよりも早く世界が止まった。
「……時間対策は必須なんだがな」
魔法即効無詠唱時間停止の発動によって、モモンガの前で馬から降りようとする格好のままガゼフは止まっていた。
時間停止中における全ての攻撃は意味をなさない。ここで攻撃魔法をガゼフにぶつけてもダメージを与えられないのだ。だからこそ、モモンガ時間を数えながら、魔法を使う。
「魔法遅延（ディレイマジック）・真なる死（トゥルーデス）」第九位階の魔法を。

時間停止中に相手への効果を発揮しないのであれば、魔法が切れた瞬間に発動するように魔法を使えばよいだけだ。基本的なコンボだが、タイミングを取るのが非常に難しいため、使いこなせるのは全魔法職の中でも五パーセントぐらいだろうか。

「……さよならだ。どこの誰かはしらないがな……」

魔法が解け、世界に時間が戻ってくる。そして何よりも魔法が効果を発揮した。

男は、そのまま落馬して地面に落ちた。

「これで全部か？　いや、まだいるな……」

魔法効果範囲拡大（ワイデンマジック）で範囲を拡大したことにより感知した敵意。そして、その敵意はモモンガに対して明確に向かっている。

モモンガが敵意のする方向へ向かうと、そこにいたのは先ほどとは打って変わって、魔術詠唱者（マジック・キャスター）と思われる集団であった。

「逃げずに戦おうとはな！　愚か者め！　ガゼフ・ストロノーフを倒す力量は認めよう。だが、それまでだ。最高位天使を召喚する！」

その言葉を聞いてモモンガは焦る。至高天の熾天使（セラフ・ジ・エンピリアン）であればモモンガ一人で戦うにしても本気を出す必要がある。

「失墜する天空《フォールンダウン》」

そして迷わず発動準備時間をゼロにする課金アイテムを使う。戦闘は、やっかいなのが召喚される前に召喚者を殺せ、が鉄則である。

その瞬間、太陽が地球に降りてきたような熱気が地上へと降り注ぐ。

Naturarum Divisus 4

村が襲われてから数週間が過ぎた。

エンリの両親は殺された。哀しみに沈んでいる暇などエンリには無かった。村人の数は減ってしまったが、村の仕事が減ることはない。むしろ、増えた。それに、熟練した大人とエンリとでは同じ作業をするにしても、エンリの方が時間がかかるうえに精度が低い。焚き火の薪も、エンリが割ると不揃いである。手も血豆だらけだ。痛い。

しかし、泣き言などエンリは言うことが出来ない。自分には、大事な妹がいるのだ。

村は基本的に相互扶助が基本だ。みんなで働き皆で収穫を分ける。井戸を新たに掘るなど共有物は当然、共同で作業をするが、それ以外にも、家を建てるなど個人の利益に資することも村全体で協力をして行う。Ｇｉｖｅ ａｎｄ Ｇｉｖｅの世界だ。村の話し合いで決められたことは、村人が総出で協力をする。

貧しい村であるからこその団結力であった。平穏な日々であれば、貧しいながらもお互いがお互いを助ける美しい村である。しかし、村が危機となれば別だ。飢饉などが発生すれば、まず優先されるのは共同体の維持である。共同体の維持の為には、村は団結力をもって、苦渋の決断をする。

それは、Ｇｉｖｅが少ない者を切るという決断だ。そして、襲撃という憂き目にあった村が切るとしたら、両親を失った自分たち姉妹であるということはエンリは分かっている。切られる順番として、まずは妹のネム。そして次が自分だ。

村は、働き手を増やすために移民を募集することに決めた。移民を受け入れるためには、村に彼等が住む家屋を作らねばならない。力のある男たちは、トブの大森林へと木材の伐採へ毎日出かけている。技術がある人は木材を加工し、家屋の支柱、梁、壁や屋根などへと木材を加工している。男手が、大工仕事に向かう分、女手で農作業をしなければならなくなる。エンリは必死に農作業をするが、ネムは残念ながら村に貢献しているとは言えない。

あれは、エンリがネムと同じ年齢の時だった。
村を飢饉が襲った。長く病気を患っていた人や、老人の幾人かがトブの大森林に食料を探しに行く、と言ったっきり戻ってこなかった。そして村に残った人達は誰もそれを探しに行こうとは言い出さない。
「そのうちひょっこり帰ってくるのではないかしら」と母親は言ったが、数週間経っても彼等が戻ってくることは無かった。
そして、珍しく商人がカルネ村に立ち寄った次の日だった。村の子供が一人いなくなった。エンリよりも一歳年下の女の子だった。エンリとその子は仲が良かった。
エンリはその子がいなくなった理由を両親に尋ねても、要領を得ない回答しかなかった。
「よその家の人達にそんな質問をしてはダメよ。早くあの子のことは忘れるの。この村にそんな子は最初からいなかったのよ」
ネムは、現在、いなくなったその子と同じ年齢となった。だが、人並みに働けるようになるにはあと五年は必要だろう。それは、ネムをエンリと村が養わなければならないということだ。
しかし、いま村が求めているのは、村を復興させることができる即戦力だ。
その当時はエンリは分からなかったが、今ならなんとなく分かる。あの日、いなくなった子は商人に売られていったのだ。
食料を備蓄していた倉庫の一つが焼き払われた。村の食料は十分とは言えない。移民を呼ぶためのお金も必要だ。だが、村にそんなお金があるのだろうか？
エンリは不安だった。最愛の両親を失い、そして妹まで自分は失ってしまうのではないか。そんな不安を拭いきれない。だから、悩む暇も無いほど仕事に没頭した。エモット家に残された姉妹は、両親が無くなっても村にＧｉｖｅ出来る。それを示す必要があった。
・
マルナゲス村長の家にエンリとネムは招かれた。村長の奥さんが、エンリとネムのために奮発して野菜がたっぷりと入った煮込みスー

プを作ってくれていた。エモット家は食料が十分とは言えなかったので、いつもエンリはネムに多く食べさせ、自分はいつもお腹を空かせていた。

ネムも大喜びであった。村長が、この村を開拓したリーダー、トーマス・カルネの逸話を食卓の場で話しながら夕食は進む。

トーマス・カルネの人生は波瀾万丈であった。今のカルネ村の場所は、魔物が少ない安全な場所であるが、この場所を探し当てるまでに開拓の仲間たちと長い旅をした。現在のカルネ村の場所を開拓地に定めてからも、いろいろな問題が噴出した。食料が足りないときはトブの大森林に入り、勇敢に戦った。開拓途中の村を襲うのは魔物だけではない。病も襲った。悲しい出来事もたくさんあった……。

食事は終わり、ネムはお腹いっぱいとなり眠ってしまった。村長夫人がネムを今のベッドに寝かせ、優しくシーツを掛けた。そして、温かい白湯をエンリのテーブルの前に置く。

夕食が終わった。これからが本題なのだろうとエンリは悟る。

「両親のことは本当に残念だ。私の大切な友人であった」と村長が言う。村長の隣に座った婦人も黙祷するように目を閉じ、頷く。

「はい。とても悲しいです」

「気持ちは痛いほどわかる。だが、俺達は生きなければならない……」

村長の言葉には強い決意をエンリは感じた。エンリはごくりと唾を飲み込む。願わくば、妹が幸せに暮らせますように……とエンリは心の中で祈る。

「それで……村を助けてくれたモモンガさんだが、お前はどう思っている？」

「モモンガさんですか……？」

エンリは、モモンガと名乗った怪しい男のことを思い出す。村を救ってくれた英雄。モモンガは旅の途中であると言ったが、村長の強い引き留めによって、村に今でも滞在している。エンリが見たこともない黒髪。

村長がモモンガが暫く村に滞在するということを広場で発表した後、妹と一緒に助けてくれたことをお礼を言ったが、接触はそれっき

りであった。エンリは日々の労働で精一杯で、新たに村に来たモモンガに気を配る余裕さえなかった。
「私と妹を助けてくださったことに感謝しています」とエンリは沈黙の後に言った。
「そうか、そうか。村人の男衆からは評判でな。口数は少ない寡黙な男だが、話しかければ物腰は丁寧。一緒に仕事をしても、疲れ知らずという言葉が文字通り当てはまるような男。力も強く、村の力持ちが三人で持ち上げるような木材を一人でひょういと持ち上げる」
「村人の女性たちからも評判よ。トブの大森林から大きな木材を運んできたばっかりで疲れているはずなのに、井戸の水汲みをしている人を見かけたら代わりに水を汲んでくれたり。それに騎士から村を守れる力を持っている。それなのに威張ったりせず、親切に接してくれる。このあたりでは見かけない黒髪で、ミステリアスな感じも魅力なのですって」と村長夫人も口を開く。
「そうなんですね……」とエンリは適当に相づちを打った。刺激の少ない村だ。新しく来た人に対して好奇の目が向くのは自然なことであるとエンリは思った。
「できれば、ずっと村に滞在してほしいのだがな。また、村がいつ襲われるか分からんし……」
　村長は深刻な顔で言う。確かにそうだと思う。
「強いモモンガさんがこの村にずっと留まる……率直に言えば、カルネ村の一員になってくれたら村がどんなに安心か」
「そうですね……」とエンリはそれに素直に同意する。
　騎士がこんな貧しい村を襲う。カルネ村の外で一体なにが起こっているのか想像がつかない。けれど、悪いことが起こっているということはエンリにも分かる。
「それに、お前たちもいつまでも姉妹で生活するという訳にはいかんだろう。ネムはまだ小さい。お前一人でネムを養うには限界があるだろう？」
「はい……。村には負担をかけてしまうと思いますが、私がその分、一生懸命働きます！　だから今まで通りネムと一緒にこのカルネ村で

生活させてください!!」
　エンリは椅子から立ち上がり、村長に向かって深々と頭を下げる。
「あなた……」と村長夫人が村長を叱責するような口調であった。
「エンリ。すまない。そういう意味で言ったんじゃない。座ってくれ」
「はい……」
「実はな……。今日の村の話し合いで、村に防柵と物見櫓を作ろうという提案が出た。そして、モモンガさんはその作業をすることを快諾してくれたのだ。モモンガさんは一人で十分だと言っていたのだが……モモンガさん一人にやらせる訳にも行くまい。だから明日から、エンリ。モモンガさんと一緒にその作業にあたってくれ。そのお願いをしたかったのだ」
「防柵や物見櫓ですか？　私に出来るかどうか……」
「なぁに。心配するな。力仕事などはモモンガさんに任せておけばよい。エンリは、防柵や物見櫓を作る作業をするというよりは……。モモンガさんに……そうだな……気に入られるということだな！」
「え？　それって――」
「――おい。あれを持ってきてくれ」とエンリの言葉を遮り、村長が夫人に言うと、婦人は奥の部屋から服を一着持ってきた。
「その着ている服、襲った兵士に背中が切られた服でしょ？　縫い方がまだ雑だし、女の子なのだから良い服を着なさいな。これはプレゼントよ」と夫人が服を差し出す。
「ありがとうございます」と差し出された服をエンリは恭しく受け取る。
「そういうことだから、頼んだぞ！　村のためだ！」と村長は言う。
「はい。村を襲われても持ち堪えられるような立派な防柵を作るように頑張ります！」とエンリは答えた。
　そのエンリの返事を聞いて、なぜか村長夫妻は苦笑いをしていたのであった。

Naturarum Divisus 5

村長との夕食の次の日、エンリはトブの大森林へと向かうモモンガの後ろを歩いていた。まずは防柵を作る。その材料は木で、それを集めに行く。

「モモンガさんをお手伝いするように村長から言われました。よろしくお願いします」

「そうか。まずは材料を集めに行くぞ」という会話があっただけだ。

「このあたりであれば問題ないだろう。エンリと言ったな。すこし目を閉じていろ」とモモンガが言った。トブの大森林でも、村から離れた場所で、村人なども滅多に近づかない。

「現断（リアリティ・スラッシュ）」というモモンガの声の後、バキバキバキという木々が倒れる音が響く。エンリは目を開けて状況を把握したくなるが、我慢して目を強く閉じる。

「もう良いぞ……」

エンリが目を開けるとそこには信じられない光景が広がっていた。幅二十メートルほどであろうか。エンリの視界が届くずっと先まで直線上に木々が倒れている。まるで、地平線から太陽が昇った瞬間に朝日が、直線上に暗い草原を照らし出したかのようであった。

「凄い……」

「失態だ……。直線上に森林を伐採してしまうと、木材を拾い上げに行くのが面倒だな。運ぶ距離がどんどん長くなってしまう……ブループラネットさんに確実に叱られてしまうな……」

「そんなことはないです。これだけの木を伐採するのにどれだけの時間がかかるか！」

エンリは未だに目の前に広がっている光景が信じられない。

「まぁ、こうなってしまっては有効活用するのが礼儀だ。私が木々を運んでくる。枝を落として丸太にしていってくれ。余裕があれば、丸太の長さを一定に切りそろえるまでしてもらって良い」

モモンガの指示通り、エンリは枝を幹から落としていく。モモンガが運んでくる木はどれも大きく、枝も太い立派な木であった。その枝

を一本一本ノコギリで切り落とすのに時間がかかる。エンリが一本の木の枝を全て切り落とすまでにモモンガはもっと沢山の木を運んでくる。木々は溜まっていくばかりであった。
「なるほど……。草原の近くから木を運ぶと、枝を切り落とす作業が追いつかないな。出来るだけ遠くから木を運んでこよう」
「す、すみません」とエンリはもう泣きそうであった。村長からは、カルネ村で自分たち姉妹が生活を続けていくチャンスをもらった。だが、結局はモモンガさんの足を自分は引っ張っている。モモンガさんが村長に、「あの娘は役に立たない。手伝ってもらうだけ迷惑だ」などということを言ったとしたら、それだけで……少なくとも妹の運命は確実に決まってしまう。
エンリは必死にノコギリを引く。汗なのか涙なのか、自分でもよく分からない物がノコギリを引くごとに粒となって落ちていく。どうして村が襲われたのか……　どうして父と母は死んだのか……　どうしてこんなにも自分は無力なのか……。悲しく、悔しい。だが、エンリの必死の想いとは裏腹に年輪を重ねた太い枝はなかなか切り落とすことが出来ない。

・

やっとのことで一本の木の枝を全て切り落とした。だが、モモンガさんは戻ってこない。モモンガさんは、地平線の彼方まで木を切り倒していた。遠くまで木を取りに行ったのであろう。モモンガさんが戻ってくるまでに、たくさん枝を切り落とさねば。既に握力があるのかないのか分からない右手。腕も肩も痛い。しかし、一休みするという選択肢など自分には既に無い。
次の木に取りかかろうとしたとき、背中に寒気が走る。何かがいる……。時折現れるゴブリンなどではない。もっと強大で危険な存在だ。
「それがしの縄張りを侵したのは、お前でござるか？」
トブの大森林と草原の境界線近く。森林の暗闇の中から凶悪な二つの瞳が自分を見つめている。そして蛇のような鱗に覆われた以上に長い尻尾が、森林の中から顔を出してゆらゆらと揺れている。まる

で、獲物を狙っているかのような動きだった。
恐怖でエンリは立っていられない。腰から力が抜け、その場に尻餅を着く。逃げようにも体が震える。自分はこれで死ぬのだ……。
「答えぬでござるか……。まぁ良いでござる。いま逃走するのであれば、先の見事な魔法に免じ、それがしは追わないでおくが……どうするでござるか？」
逃げたい……。生きたい。死にたくない。だが、恐怖で動くことができない。下半身から生暖かい感触が太ももから伝わってくる。
「ふふふ。その服の下から驚愕と、失禁が伝わってくるでござるよ」
森林から顔を出した獣の顔に歪んだようなような笑みが浮かぶ。そして長い尻尾がくねった。白銀の体毛に包まれた体には奇怪な文字にも似た模様が浮かび上がっている。体は大きく、馬ほどの大きさはあるだろう。しかし、体高は低い。横に広く、うすべったいという形状だ。
「重力渦（グラビティメイルシュトローム）」
その声が轟いた瞬間、その獣の体は渦巻きを描きながら小さくなっていく。そして、自分の握り拳程度の大きさとなり、ストンと地面に落ちた。

「すまないな。どうやら、遠くまで行きすぎたようだ」
マントに仮面を付けているという姿。しかし、その声は間違いなくモモンガさんの声であった。
「モ、モ、モモンしゃん……」
「怪我はないようだな……だが……とりあえず、ポーションを浴びておけ」とモモンガさんは自分の体にポーションをかけ始める。なんとなく嗅いだことがある香りだ。この臭いはなんだろう。分からない……。
自分の意識が遠くなっていった。
・
目を覚ますと、空には満月と、そして無数の星の海が広がっていた。
「気付いたか？」

「あっ。モモンガさん……。私……」と身を起こす。自分は半日以上寝ていたのだろうか……。
「気を失っていたようだ。覚えているか？」
　エンリは、記憶を手繰り寄せる。たしか恐ろしい獣に襲われて……モモンガさんに助けられた……。
「助けてくださってありがとうございます」
「気にするな……離れすぎてしまった私のミスだ」とモモンガはエンリを見ることなくずっと空を眺めている。
　自分もモモンガさんの見ている方向を見る。美しい星空が輝いている。星を見たのは何時振りであろうか。
「なぁ、夜空を見る気分というのはどんな気分だ？」
　モモンガさんからの唐突な質問であった。
「え？　夜空ですか？　き、綺麗だと思いますが……」
「そうだよな。綺麗だよな。俺は間違ってないよな」とモモンガさんは呟いた。
「間違ってません。だって、私も綺麗だと思いますから……」
　明日をも知れない自分と妹。役に立たない自分。そんな自分でも、光り輝く満月と星空は美しく見える。悔しいくらいに輝いている。悲しさと、悔しさを、自分の心から満月と星空が食べてしまっているようだった。ただ、その美しさに自分の心は染まっていく。
「あ、流れ星！」
　ふっと流れた流れ星。エンリは願う。ずっとネムと暮らせますようにと願った……が、間に合わなかった。
「流れ星（シューティングスター）に願うか……。何を願ったのだ？」とモモンガが笑いながら尋ねる。
「え？　願った内容を他の人に言うとダメだって聞いたことがありますけど？」
「そうなのか？　俺は、何度も流れ星（シューティングスター）の指輪に願った。その願いは誰にも言ってはいないが、俺の本当の願いは叶うことなど無かった……」
　エンリには、モモンガさんが付けている仮面が、何故か、泣いてい

るように見えた。
「モモンガさんはどんな願いがあるのですか？」
　自分の想像を絶するような力を持っているモモンガさん。そのモモンガさんが届かない願いとは何であろうか。おとぎ話で誰もが求める不老不死であろうか……。
「なんだ？　願った内容を他の人に言うとダメなのではないのか？」とモモンガが冗談っぽく笑う。
「ええ？　まぁそうですけど……」
「まぁいいさ。どうせ叶うことなどもう無い。俺がずっと願っていたのは、仲間とずっと楽しく過ごせますようにだ。月並みだろ？」
「え？　私の願いと少し似ているかも……」
「そうなのか？　奇遇だな」「奇遇ですね」とモモンガとエンリはお互いに笑い合う。
　お互いに笑い合った後、「さて、そろそろ帰るか。村では心配をしているだろうよ」とモモンガは立ち上がる。
「はい！」
　満天の月と星が照らす草原は少しも暗くはなかった。夜露を宿した草が、宝石のように輝いている。エンリは、モモンガの横を歩く。カルネ村は近い。
「モモンガさん」
「ん？　なんだ？」
「仲間とずっと楽しく過ごせますように。素敵な願いだと思います。私は、妹とだけでなく、村の仲間ともずっと楽しく過ごしたい。モモンガさん、明日もよろしくお願いします。明日も、楽しく過ごせますように！　おやすみなさい」
　エンリはそう言って、自分の家へと走る。
「そうか……。おやすみ」というモモンガの声をエンリは背中で聞いた。

Naturarum Divisus 6

防柵の支柱となる丸太は先端を削る。そして、穴を掘ってその丸太を差し込む。その単純とも言える作業を村を一周するように等間隔で行っていく。

気の遠くなるような作業ではあるが、エンリは自分はこれで良いのかと思ってしまう。この作業で一番大変なのは、支柱を埋める為の穴を掘っていくことだ。掘れば石も出てくるし、支柱が倒れないように深く埋めなければならない。だが、その大変な部分は全てモモンガさんがやっていた。自分は、支柱を穴に差し込んでいる間に、穴と支柱の隙間を埋めるように土を入れて踏み固めていくだけだ。土を流し込んで、踏むだけ。

「随分と出来上がってますね。あとは横棒を左右の支柱に縛り付けていく作業ですか。こんな短期間でこれだけ形になってくるとは、さすがはモモンガさんです」とマルナゲス村長がどこからともなく現れた。

「エンリさんにも手伝ってもらっていますからね。一人で作業するよりも早いです。随分と助かっていますよ」

モモンガさんがそう村長に答えたが、それを聞いてエンリは恥ずかしくなる。全然役にやっていないような気がする。モモンガさんを困らせているだけではないかとすら思う。

ひょっとしたらモモンガさんは私と妹の状況を知っていて、ワザと村長にそう言ってくれているのかも知れない。優しい人だ。

それを聞いた村長さんも満足そうだ。そして、あまり上品とは言えない笑顔でエンリを見てからウインクをした。村長のウインクは少し気持ち悪かった。年齢を考えてからそういうことはして欲しいとエンリは思った。

「では、私は防柵という、愛の結晶を楽しみにしていますぞ。では、私も仕事があるので」

「ちょっと村長、何へんなこと言っているんですか！」とエンリは言った。村長はエンリの声を無視して逃げるように畑の方へと小走りで

去っていく。
「村長……何しに来たんですかね？」とエンリは土を何度も踏み固めながら言う。
「村全体を管理するのも村長の仕事だ。作業の進捗を見に来たか、労(ねぎら)いに来たのだろう」
「そうかも知れませんが、愛の結晶とか……。旅の吟遊詩人みたいなことを言って……」
「そうか？　だが、村長の言っていることもあながち間違っていないと思うぞ？」
「え?!　愛の結晶がですか？」
「そうだ。ギリシャ神話では、「愛」を一つの単語ではなく、いろいろな単語によって区別していたのだぞ？　友愛(フィロス)と情愛(エロース)というようにな。友愛は、家族や友達との間の愛のことだ。情愛は、まぁ、男女間の愛、恋人との愛ということだな……。そう考えると、この防柵というのはエンリ。お前が大切に思っている妹を守るためのものだろう？」
「友愛(フィロス)と情愛(エロース)ですか……？」と暫く考えたあと、「そうですね。私は、この防柵でネムや村のみんなが安全に生活できたら嬉しいです」と答える。
「そうであるなら、村長の言っていることは間違ってはいない」
「そうですね！　モモンガさんは、強いだけでなくいろいろなことを知っているんですね」
「なぁに、友人が言っていたことの受け売りだ」
「そうなんですね！　モモンガさんも凄いけど、モモンガさんの友達の方も凄いですね」
　率直な感想であった。
「はっははは！　そうか。そう言ってくれるか」
　モモンガさんが笑った。ずっと一緒に作業をしていたエンリだが、モモンガさんが笑った。初めて笑い声を聞いた気がする。なんだか、モモンガさんの笑い声を聞いて、自分も嬉しくなる。
「支柱はこれで終わりですね！　次は、支柱に横向きに丸太を固定するだけですね！　今日は、藁紐を作りましょう！　沢山必要ですよ！

それに、丈夫なのを！」
なんだか疲れがどこかへ消えていったみたいだった。
・
「この藁から紐を作るのか？　随分と短いようだが？　締め縄ということだろうが……」とモモンガさんは不安そうに言う。乾燥して保管してある藁の倉庫で、モモンガさんは、藁を一本手に取ってそして、それを引っ張った。すると、簡単に藁はプツリと千切れた。
「沢山の藁を束ねればとっても強いんですよ！　もしかして、モモンガさんは作り方をご存じないですか？」
「あぁ……。すまないが作り方を教えてくれないか？」
エンリは、締め縄の作り方をモモンガさんに教えた……が、どうやらモモンガさんは締め縄を作るという作業に向いていないということが分かっただけであった。
「上手くいかないものだな……」とモモンガさんは困ったような声で言った。エンリは、それが何故だか可笑しかった。そして、嬉しかった。
「モモンガさんにも苦手なことがあるんですね」とエンリは笑う。
「そんなに可笑しいか？　まぁ、誰だって苦手なものはあるだろう……。そっ、そうか。その締め縄、何かに似ているなと思っていたが、そういうことか」と、モモンガさんは自分がいま編んでいる締め縄を見ながら合点がいったように言う。
そして言う。「この締め縄は、エンリ、お前の髪の三つ編みと似ている。編み方が同じなのではないか？　髪の色も、同じ黄金色だ」
自分は、長い髪が邪魔にならないように三つ編みで一つに纏めていた。長い髪だと、作業の邪魔になるからだ。
だが……「結び方としてはやり方が似ていますけど……締め縄と似ているってちょっと……モモンガさん、酷くないですか？」と頬を膨らませて不満を言う。
「そんなことは無い。その三つ編みも似合っているぞ？　それに、その黄金色の髪は、まるで、黒き豊穣の母神への贈り物が、仔羊たちという返礼を持って帰ってきたみたいじゃないか。可愛らしい仔羊達

を持ってな。さて、締め縄を作るのはエンリに任せたほうが良さそうだ。私は、トブの大森林から木材を運ぶことに専念しよう。それで良いか？」

――可愛らしい――

「は、はい……」

エンリは、耳まで真っ赤になった顔を下に向けて締め縄の作業に集中している振りをしている。もう、耳まで真っ赤になっているかも知れない。可愛いなんて、家族以外からは言われたことなんて無かった。なんでこんなに心臓の鼓動が早くなっているのだろうか。

トブの大森林へ向かうモモンガさんの背中を見つめる。そして、モモンガさんの言葉を思い出した。

『友愛（フィロス）と情愛（エロース）というようにな。友愛は、家族や友達との間の愛のことだ。情愛は、まぁ、男女間の愛、恋人との愛ということだな……』

自分の友愛（フィロス）とは一体誰であるのだろう。妹であるネムや、この村の人達は、友愛（フィロス）であろう。間違い無い。家族同然で大切だと思っているからだ。また、友達で大切というなら、エ・ランテルで薬師をしている幼なじみのンフィーレアが友愛（フィロス）に当てはまるかも知れない。

だが逆に、自分の情愛（エロース）は、誰に対して向けられるものであろうか。

ふっと、モモンガさんのことが頭を過ぎる。いやいやいや……。自分なんかが相手にされる訳なんてない。だが……カルネ村の綺麗で独身だった人は騎士たちに真っ先に狙われ、酷いことをされてからみんな殺されている……。

自分が嫌いになってしまうような考えであるが、カルネ村でいま、若くて結婚適齢期なのは自分だけだ。いや、そんな考えは最低だ。

いやいやいや。そんなことはあり得ない。

だけど……私のことを『可愛らしい』って……。

いやいやいや……。

エンリの頭の中で堂々巡りが続く。もう、夕暮れ時であった。そして、締め縄の作業はまったく進まなかった。心にモヤモヤが残り続け、作業に集中することができなかった。

明日は作業の遅れを挽回させないとな。よし、いつもより早く起き

よう。きっと、寝て、起きれば頭もすっきりするだろう。
沈んでいく夕陽を見つめる。一日が終わる。なんだか良く分からないけど、心が温かい一日だった。こんな平和な日々がずっと続けばいいなぁ、と夕陽を見ながら思う。そんななか、夕陽の中を飛んでいる鳥を見つけた。
あ、鳥じゃない。蝙蝠だとエンリは思い直す。だけど、このあたりでは見たことが無い珍しい蝙蝠であった。
・
シャルティアは、ナザリックで自身に与えられた浴槽で唄う。自らを創造したペロロンチーノ様に与えられた自室だ。
「誰もいない　舞踏会場
私は踊る　一人で踊る
くるくる回る　ドレスは揺れる
月日は巡り　私は一人
置いてきぼりの　私の物語
愛する人は、私をただ過ぎ去るばかり
小さかった　あなたは　大きくなった
私がどんなに　背伸びをしても、
あなたの唇　届かない
散ることの無い桜
遠い太陽を見つめる向日葵
私はシャルティア
見上げるばかりのあなたの顔に
また一つ　皺が増える
不吉な予感を私は感じる
誰もいない　舞踏会場
私は踊る　一人で踊る
くるくる回る　ドレスは揺れる
月日は巡り　私は一人
色の無いコスモス
寒さで凍えて誇る冬薔薇

私はシャルティア
誰もいない　舞踏会場
私は踊る　一人で踊る
くるくる回る　ドレスは揺れる
月日は巡り　　私は一人
置いてきぼりの　私の物語
愛する人は、私をただ過ぎ去るばかり」
浴室にノックの音が響く。
「入るでありんす」
眷属が手短にシャルティアに報告をすると、シャルティアは血液で満たされた浴槽から出る。乳白色の肌が眷属に見えているが、そんなことなど気にしない。
「……そう。やっと探し出した。すぐに殺しに行きますよ。モモンガ様！」
シャルティアの瞳からは血のような真っ赤な液体が流れ落ちる。浴槽に満たされた血が飛び散っただけのものであるのか、それとも彼女の涙腺から溢れでたものなのか。

Naturarum Divisus 7

【REAL】

世界というのは変るものだと、彼女は実感していた。

テロによる厳戒態勢。

ユグドラシルに関する情報が一切、ネット上から消えている。それに、「ユグドラシル」などに関する情報がすでにNGワードに登録されているらしく、ユグドラシル関連の情報をアップしようとしても、強制的にネット接続が一旦切られる。

それだけではない。どこに行くにも、ナノマシン情報による本人確認（Identification）ではなく、遺伝子採取によるDNAレベルでの個体認証が実施されるようになった。体内のナノマシンには、個別の識別コードがあり、それによって個人を特定することができるが、偽装も技術的に不可能ではない。

もっとも偽装が困難なのは、物理的にDNAを採取して個人を特定するということだ。外見を幾ら変えても、体の中にいるナノマシンの情報を書き換えても、生身の人間である限り、DNAは誤魔化しようがない。

「確認しました。どうぞ」という言葉にしたがって彼女は病院の入口を通過する。モモンガが入院している病院の入口は、特に警戒が厳重だ。テロの標的となっていることが明確であるからだろう。

持ち物から全身まで、オールスキャンされている。だが、彼女にとってはもう慣れたものだった。彼女は、そのまま病院のエレベーターに乗り、鈴木悟の病室へと向かう。

地下のエレベーターが開く。だが、そこにも警察が待機している。

「あっ。こんにちは」

「こんにちは。今日も来たのですね。ですが……一応規則なので」と申し訳なさそうに警察は彼女のチェックを始める。病院の入口で行われた検査と同じことがまた行われる。それに、この警察とはすでに顔なじみとなった。もう数度顔を合わせている。

「はい。問題無いです。お通りください。彼氏さん、喜びますよ」

「いつもご苦労様です」と彼女は営業スマイルで彼に微笑みかけて病室へと入った。
どうやらこの警察は、自分がモモンガさんの彼女か何かであると思っているのであろう。自分が指輪を付けていない。また、鞄などにも入れてはいない。
持ち物検査で指輪を所持していないということで、夫婦ではないと推理をしたのかも知れない。もっとも、自分もモモンガさんの彼女だと言われて、それを否定していない。沈黙を警察は肯定と受け取ったのだろう。
「こんにちは。モモンガさん」
返事は帰ってこない。彼女は、殺風景な病室を彩るために買ってきた、水仙（ナルキッスス）の花を一輪、病室に置いてある棚に飾った。生花は、驚くべきほどに高級品となっている。
彼女は、そのままモモンガの寝ているベッドの脇の椅子に座る。
四日ぶりのモモンガさんの顔だ。特に変わった様子はなく、モモンガさんは寝ているようだった。いや……。変わったことはある。今日は、少しだけモモンガさんの髭が伸びていた。今日は、彼女はここへ来たのは面会時間の早い時間だ。看護師がまだモモンガさんの髭を剃っていないのだろう。
モモンガさんの頤（あご）へと手を伸ばす。そして指で優しく頤（あご）を撫でた。チクリとした感覚を指先で感じる。モモンガさんは生きている。そう彼女は感じる。
本当は毎日でも見舞いに来たかった。モモンガさんが目覚めたとき、誰かの笑顔があった方が良いと思うからだ。誰かがおはようって、言ってあげたほうが良いに決まってる。
けれど、中々、ユグドラシルの仲間たちも見舞いに来られない。理由は、面会時間が著しく制限されたことだ。午前十時から十二時の間。普通に会社務めをしていたら、来られる時間帯ではない。
今日は、午後から新作ゲームの収録が行われる。午前中は予定が入っていなかった。それに、収録スタジオは別のアーコロジーで移動時間も考えると、あと二十分程度しかこの病室にいることは出来な

い。
「モモンガさん……」と語りかけるように呟く。
「今回のゲームの主題歌は、私が歌ってるんですよ？　聞きたいですか？」
　モモンガからの返事はない。
「でも、歌ってあげないですよ？　弟から聞きましたよ。モモンガさん、私の出演している作品を一度もやってみたことがないそうじゃないですか……。酷いじゃないですか……。同じギルメンの出演作品なんだから、売上に貢献するくらいしてくれてもいいのに。それに、ホワイトブリムさんの連載している月刊誌は毎月買って読んでたということも聞いてますよ？　つれないなぁモモンガさん……」
　彼女は少しだけ頬をワザと膨らませる。そしてまた笑顔に戻る。
「だけど、そんなモモンガさんに朗報です。今回は、実は私は、ヒロインにしてメイドなんですよ？　そして、なんと、メイド衣装のデザインは何を隠そう、ホワイトブリムさんです！　びっくりしました？　私もびっくりですよ。キャラクターのメイド服を見て、あれ？　これどっかで似たのを見たことあるな、なんて思ったら……。まさかの本人！　あまりの驚きと偶然に、そしてモモンガさんのことを考えて、今度オフ会することになりました。モモンガさん、寝ている場合じゃないですよ？」
　部屋には、心電図の規則正しい音だけが響く。
「それに、今回のはコアなファンを狙いつつの、純愛系の物語なんですよ。舞台は中世のような世界。とある帝国、両親を失った女の子がヒロイン。その娘は、村で妹と生活をしていたのだけれど、ある日貴族の妾となる。そして、地獄の日々の始まり始まり……。貴族が彼女に飽きたら彼女は娼館に売られる。そこで、無理矢理客を取らされた挙げ句、病気になったらもっと酷いことをされる娼館に売られて、最後は路地裏にポイされます……。結構ハードな内容なんですけど、そこはコアなファン向けで、路地裏に捨てられるまでの顛末は、苦手な方はスキップできます。モモンガさんもきっとそこはスキップですね。それで、路地裏で、とある金持ちの執事に拾われて、そしてそのまま

メイドで働くことになっていうストーリーです。そこからは純愛なんですよ？　そのヒロインのメイド姿も可愛いですよ？　どうですか？　私の出演作を買わないで、ホワイトブリムさんの月刊誌を買っていたメイド好きなモモンガさんが好きそうな話ですよね？」
「予定の時間が経過したよ――」と彼女自作の時計が鳴った。
「あっ、もう行かなきゃ。また来ますね！　そうだ、最後に……その声の中の人として、演じてみた感想です。私は、今回のヒロイン、凄い共感できます。だって、その優しそうな執事の主人がもの凄い人外な人でも、そのヒロインは最愛の執事を信じて恐れず前に進むんです。同僚の先輩メイドからも、冷たい視線を浴びせられても挫けないんです……。私も、挫けませんから……。もう、二度と目が覚めることがないだろうなんて言われてても、私も挫けませんから……」

Naturarum Divisus 8

「あなたは、外の世界で幸せになりなさい。そして、生きなさい。私のことなど早く忘れて。私のことなど覚えていてもいいことはないでしょうから」
「いいことってなんですか？」
　言葉に含まれた強い意志。共演している声優たちがぐっと息を飲む。キャラクターが身に纏う切実さがスタジオ内に空気となって滞留しているようだ。
　収録スタジオの外で録音状況をチェックしている監督や音響なども、思わずその声で一瞬手を止めてしまう。彼女のマネージャーであるダイゴロウなど、両手を祈るようにしてガラスの向こうの彼女を見つめている。
　『いいことってなんですか？』。たった11文字の言葉。だがそこには言い尽くせないような多くの感情が混在し、その言葉の中で脈打っているのを感じていた。
　執事役の声優も、思わず一瞬、次は自分の台詞であるということを忘れてしまうところであった。
「……外の世界で幸せになれと言っています」
「私の幸せは、あなたと一緒のところにあります。ですから……早く目を覚まして下さい……」
　彼女が言った台詞。台本とは違う台詞だ。台本の台詞では、最後は『ですから連れて行ってください』だ。だが、彼女の台詞に全員が飲み込まれている。監督でさえ、完全なNGだと分かりきっているのに、NGを出せないでいる。
「……ちょっとした出来事に幸せを感じているようですが、地獄で心が麻痺してしまっただけです」
　共演者も、台詞が繋がらないことは理解している。だが、NGが出ない以上、続けざるをえない。
「……あ？　私、台詞間違えました？　ごめんなさい」
　ふっと彼女が身に纏う気配が柔らかくなる。スタジオの中の緊張

感が解れた。スタジオの中にいた共演者も、隣の部屋で作業をしていたスタッフ全員が大きく深呼吸をして肺に酸素を入れる。暗い海の中からやっと顔を出したような、今まで呼吸が出来なかった人達のようだ。息をすることを忘れるほど、彼女の演技に飲み込まれていたのだ。

「珍しいね、ＮＧ出すの」と共演者が明るい声で彼女に話しかける。

「うん。ごめん……。なんでだろう……全然台詞違うし……」

「まぁ、ドンマイ、ドンマイ」

収録は再開し、恙なく予定を消化した。

・

・

第四東京アーコロジー某所。アインズ・ウール・ゴウンのオフ会が開かれていた。普段は忙しくて集まれないメンバーたちであったが、テロによる厳戒態勢により逆に時間ができるという皮肉な結果であった。

彼女であれば、不特定多数の人間が集まるイベントは一律に集会許可が取り消され、実施できなくなった。

ホワイトブリムは、連載している月刊誌の検閲が厳しくなり、発行許可がなかなか下りなくなってしまったので、しばらくは隔月刊とならざるを得ない状況だ。

ブループラネットは、豊かな緑を取り戻すためのＮＰＯ法人が、反体制の恐れありということで活動禁止されてしまった。

やまいこも、放課後の部活動などが禁止されて、学生は即刻帰宅ということになったため、部活の顧問で拘束される時間がなくなり、次の日の授業の準備などを深夜にやる必要がなくなった。

人と物と情報。これに大幅な制限が加わった結果、経済活動が急速に縮小。ブラック企業に勤めていたヘロヘロは、奇跡の定時退社をするほどであった。

オフ会に集まったアインズ・ウール・ゴウンのメンバー。

そんな中で、当然話題になるのは、モモンガのこと。そして、この

事件を引き起こした人類防衛軍というテロリストたちについてだ。
「モモンガさん、早く目覚めるといいですね」とペロロンチーノがアラビアータを食べながら言う。
「そうだな」と誰もがペロロンチーノの発言に同意するなか、悲観的な発言をする人物がいた。それは、死獣天朱雀であった。
「ほぼ間違い無く、このままだとモモンガさんは目覚めることはないじゃろうな」
　集まった全員がその言葉を聞いて沈黙する。ギルドの最年長者としての威厳もある。また、現実で大学教授をやっており、学者肌であることも知っている。論理的な裏付けが存在しないことを決して発言したりはしない。
　死獣天朱雀は、全員の顔を見回してから言葉を紡ぐ。量子物理学という九十九パーセントの学生が理解不能で、寝てしまう授業で、長年教鞭も取ってきただけあって、学生を眠らせない、興味を引く話の間を心得ている。学級崩壊をしばしば発生させてしまうやまいことは年季が違っていた。
「ヨーロッパのアーコロジーに学会発表に行ってきた時なのだがな、研究仲間から手渡しされた映像データがあっての。奇妙な映像データであったが、ユグドラシルの事件でこの映像の正体がわかったのだ」と言って、自分のスマクロを机の上に置き、その映像を全員が見れるようにフォログラフィー化させた。
　その映像は、トウモロコシのような建物が幾つも映っている映像であった。まず、死獣天朱雀は映像を拡大した。トウモロコシの粒であるように見えたが、それを拡大させると、それは透明なカプセル状になっており、人が寝るように入っていた。遠くから撮影しているので、トウモロコシに見えるが、実はそのトウモロコシの一粒一粒が全てカプセル状で、その中に人が入っている。ヨーロッパで撮影された映像であるのは間違いがないようで、ブロンドの髪の人間が多い。
　それにしても、この建物は巨大だ。しかもそれが映像に映し出されているだけも数十基はある。
「なんだこの建物？　一本の支柱に棺桶がくっついているみたいだ

な。趣味の悪いデザインだぜ」と武人建御雷が焼酎お湯割りを飲みながら言う。
「ちょっと待て。このカプセル全部、コンソールではないですかね？
ヘルメット型のデータロガーを付けていないところが違和感がありますが」
「その通りじゃ」
「ということは、これは超大型のネット・カフェってこと？」
「弟、黙れ……」
確かに、ネット・カフェである可能性はある。コンソールを購入できない所得層も多く存在する。そんな人達は、ネット・カフェで娯楽を楽しむ。だが、話の流れからそれはないだろう弟よ、と思わず彼女は突っ込んでしまった。
「それは、映像の続きを見れば分かることじゃ」
死獣天朱雀はコニャックのオンザロックをグイッと飲み干す。
映像は流れ続ける……。だが、まったく代わり映えしない映像が続いている。恐らく固定カメラか何かで撮影をされたものなのであろう。映像の動きが全くない。動きがあるのは、映像の右下に表示されている数字だけだ。その数字は、録画時間を示しているものだった。
二分ほど全員がその映像に注視したところであろうか。
「この映像……つまらぬ」と弐式炎雷が、部屋の隅っこの机の下から言う。どうやら死獣天朱雀の映像を見るためにわざわざ、自作の光学迷彩を脱いで、机の下に潜伏先を変更したのであろう。
「私も、この映像を見たときはそう思った。渡すデータを間違ったのだと思った。いままでこのデータを消去しなかったのが奇跡じゃ。では、これから一日を一秒で見れるように超高速再生するぞ？」
映像の右下の数字が瞬きのように動き出す。だが、それ以外の部分では画像のブレなどはない。映像の明るさが一定であることを考えると、どこかの地下なのであろう。
だが、この映像を見せられたら、誰だって分かる。
「ねぇ、このカプセルにいる人、ログアウトしてるのかな？」
「していない」と死獣天朱雀は言い切る。

「それは、電脳法で誘拐罪に当たりますよ」と、ぷにっと萌えが指摘する。ぷにっと萌えの指摘通りだ。電脳法の規制で、連続ログイン時間の制限が加えられている。

だが、この映像では右下の数値が正しいのであれば、九十日以上ログインを続けていることになる。完全に違法だ。

「だが、この行為は罰せられることはない。なぜならこれは政府が行っている実験だからだ。箱舟計画（プラン・ノア）の第一ステップじゃ」

Naturarum Divisus 9

箱舟計画（プラン・ノア）。

集まったメンバーが聞きなれた言葉であった。それは、人類防衛軍と名乗ったテロリストが言っていたことだ。政府を牛耳っている大企業群。彼らが密かに計画を進めていたもの。

集まったメンバーは、自然と居酒屋の椅子を、死獣天朱雀の座っているソファーの近くに集めて座る。ゼミの講義のような形式となる。

「前世紀の量子物理学の発展は目覚ましいものであった。あると予言されていたヒッグス粒子が、２０１２年に、人類は観測に成功した。重力波も、２０１６年には観測に成功している。めざましい発展だ。しかし、神話の時代からあるとされているモノが未だに量子物理学で観測されてはおらんのじゃ。それがなんだか分かるか？」

「魂だろ？」とウルベルト・アレイン・オードルが言う。

「その通りじゃ。心のことをハートと呼ぶように、昔は心臓にその魂があると考えられていた。だが、脳科学の進歩に伴って、人間の魂は、脳に宿ると考えられた。魂とは存在せず、単なる脳の電気信号であるということさえ言われた。だが、それでは２１ｇ（魂）が説明できんのじゃ。そして、それは未だに人類は魂を観測できてはいない。魂は自然的肉体に依存しながらも、決して見ることも触れることもできない存在。そして、その魂は、肉体に宿ろうが、アバター―に宿ろうが、魂であり続けるのじゃ」

「申し訳ないが……結論だけを言ってもらえないでしょうか？」

「黙れ、弟。少しは辛抱というものを学べ。すみません、死獣天朱雀さん続けてください」

ゴホン、と死獣天朱雀は咳払いをして話を続ける。

「我々量子学者は、魂の観測は不可能であるという結論に達した。魂に単する学問的な探究は終わった。しかし、どうやら魂というものは存在はしているらしい。『らしい』などという曖昧なものでも、政治利用はされるものじゃ。そして、Ｇｅｉｓｔ（２１ｇの魂）シンドロームという現象が、仮想世界の発達に伴って発見された。本来、自然的身体から分離

するはずがないとされていた魂が、仮想世界で人間の五感を再現すれば、仮想世界のアバターにも宿る。”ｏｒａｎｄｕｍ　ｅｓｔ，ｕｔ　ｓｉｔ　ｍｅｎｓ　ｓａｎａ　ｉｎ　ｃｏｒｐｏｒｅ　ｓａｎｏ”は、もはや過去のこととなったというわけじゃ」

「え？　いま、なんて言ったの？」

「黙れ、弟」

「姉ちゃんは分かったのかよ？」

「とりあえず黙れ」と彼女は有無を言わせない。もちろん彼女にも分からなかった。というか、もう既に話についていけていない。ただ、椅子に座っているだけ感が否めない。

『健全なる精神は健全なる身体に宿る』とよく訳されますね。そして、身体が健全であれば、精神もそれに伴って健全となるという意味でよく使われるのですが、本来はそれは誤用です。ユウェナリスがこれを書いた趣旨と言うのはですね……」とタブラ・スマラグディナが補足する。

「……あの、タブラさん……」と彼女は、タブラさんの薀蓄を早めにストップした。死獣天朱雀さんも、ギルド最年長者の貫録というか、とりあえず話が長い。それにタブラさんの薀蓄も加わってしまったら収拾が付かなくなってしまう。

やまいこさんが、彼女に向かって親指を立てて「Ｇｏｏｄ　Ｊｏｂ」と小声で褒めてくれた。

死獣天朱雀さんは説明を続ける。

「つまり、魂は、アバターにも宿りえる。そして、箱舟計画（プラン・ノア）の第二ステップじゃ。アバターに魂をそのまま定着させる。そして、生身の肉体は処分する」

「生身の体を殺したら、Ｇｅｉｓｔ（21gの魂）シンドロームの連鎖反応が起こり、魂まで死ぬはずだ。魂と肉体の分離は不可能だ」とウルベルト・アレイン・オードルは反論する。

「今までは不可能とされていた。しかし、それを可能とする展望が開いたのか……もしくは既に開発されたのか……。これは状況証拠でしかないが、人類防衛軍なる者たちが強硬手段に出始めたのは、

箱舟計画(プラン・ノア)が実現可能になったからと儂は読んでおる。それに、先ほどの映像だ。ヨーロッパではあれほどの規模での実験が進められている。なんらかの進捗があってもおかしくはない」
「それとユグドラシルがなんの関係があるのですか?」
「それは、日本でも、先ほどの映像のような実験を進めるということが決まったということだろうな。サービス終了のユグドラシルの仮想現実。それに、味覚、嗅覚、そして制限されていた触覚のデータを補完してやれば、実験できる環境は整う。長く遊ばれてきたタイトルであるという実績もあり、また自由度が高いゲームであるから、実験に適していたのじゃろうな」
「その実験にモモンガさんは巻き込まれたということか。そして、実験が続けられる限りモモンガさんは目覚めることはない。むしろ、モモンガさんの肉体が消される可能性がある……と」
「おい、たっち・みー。前に俺は聞いたよな。『対応が早すぎる。まるでこのことを予期していたみたいだ』って。もしかして、本当にこのこと知ってたのか?」とウルベルト・アレイン・オードルは立ち上がり、たっち・みーを睨みつける。
「そんなはずないでしょ。ウルベルトさん。酔っぱらって人に絡むのは良くないですよ」
「酔ってねぇよ」
「じゃあ、一体なんなんですか? 死獣天朱雀さんがおっしゃっているような実験が日本で行われていたとしたら、それは犯罪です。誘拐罪に、殺人未遂です。むしろ、立件して、実験の止めに入っていますよ!」
「じゃあ、実験止めてみせろよ、警察官」
「おいおい。とりあえず、お前ら座れ」と、睨みあうウルベルトとたっち・みーを武人建御雷は無理やり椅子に座らせる。
「とりあえずお前ら、これでも食って仲直りしろ」と、冷めきったマルゲリータにハバスコ(ハバネロ・タバスコ)をタップリかけて、一切れずつ二人の前に差し出す。
「殺人か……。人を殺して、殺人じゃ。しかし、肝心の人間とはなん

じゃろうな。２０世紀の歴史学者であるカントーロヴィチは、その著書『王の二つの身体』によって、自然的身体とは独立して存在するように見える王の政治的身体を論じ、そして王とはいかなる存在であったのかを論じた。我々もまた、今、再度問わねばならない。魂を失った生身の体が、果たして人間であるのか。そしてまた、魂を得たアバター―は、人間であるのかと」

「ちょ、ちょっと待ってください。話が飛躍し過ぎではありませんか？　死獣天朱雀さん。私たちは哲学的な議論を交わしたいわけではありませんよ」とぷにっと萌えが口を開く。

　ぷにっと萌えさんの言うとおりであると彼女は思った。心配なのはモモンガさんの事である。

「ぷにっと萌え君。これは哲学の話ではないのじゃよ。極めて差し迫った決断の時なのだよ。この世界の、現実の肉体で生き続けたいかという話になるのじゃ。アバター―に魂が定着するのであれば、定期的にログアウトする必要もなくなる。こんな汚れきった世界で、働く必要もない。好きなアバター―で生活し、美男美女どころか、鳥にも魚にも、そして異形種になることも可能。人間ではできないようなことだってできる。老いて死ぬ心配もない。それが技術的に可能になったら、お主らどうする？」と死獣天朱雀は全員の顔を見回し、そして尋ねる。

「いやぁ、私は仮想現実の世界で生きたいですね。そんな理想郷があるのなら、ブラック企業の社畜なんて、さっさと辞めたいですよ。仕事十九時間、通勤二時間、睡眠三時間、休みの日は数ヶ月に一度。そんな生活なんて、体が壊れますよ。もう、所々にガタが来てますし」とヘロヘロが言った。

　確かに、ヘロヘロさんの頭髪は真っ白だった。それに、年齢から考えれば老けている。もう初老に差し掛かったような外見である。実年齢より二十歳は歳を取っているように見えた。

「肉体から解放されて、仮想現実への世界へ移住する希望者は多いじゃろうな。箱舟計画（プラン・ノア）が公表されたら、移住希望者が殺到するじゃろう。人工心肺無しでは生きられない世界。厳しい労働環境。まぁ、儂

等年寄りの責任が大きいのだがな」
「なるほど……。ですが、仮想現実に移住したとしたら……単なるデータとしての存在になるということですよね？　魂を有したアバターであるから、人権を有するなんて説明があったとしても、それが守られる保障なんてありませんよね？　そして、それが守られなかった時に、抵抗する術がすでに無い。狡猾ですね」とぷにっと萌えが、考え込むように言った。
「あの……ボク、話がよく見えないのだけど……」
「つまりじゃ。この箱舟計画（プラン・ノア）は、為政者側に大きなメリットがあるということだ。まず、基本だが、支配しやすい人間を作るにはどうしたら良い？　っと、だがそれをやまいこさんに問うのは、少しばかり残酷だのぉ……」
「教育の場を奪う」とウルベルトが言う。
「その通り。だが、それだけでは不十分であると、欧州アーコロジー戦争で悟ったのじゃろう。さて、教育の場を奪う。その次の手は？」と問いかけるように死獣天朱雀は言う。
「分かった。次の手かはどうかは知らないが、究極の手段は、反逆しそうな奴らを皆殺しにすること。その一歩手前の手段、それは、被支配者層の肉体を奪うことだ。武器を持つことも、肉体が無きゃできっこない。デモをしようが、反乱を起こそうが、それは仮想空間上でのこととなる。銃弾が飛び交う中を、刀を握りしめて敵へと突進してく侍よりも無情だ」と武人建御雷が言った。
「なるほど……。魂を失った生身の体が、果たして人間であるのか。そしてまた、魂を得たアバター―は、人間であるのか。その問いの意味が分かりました。学問的な根拠など不要。魂を有しているアバターこそに人権がある、と定義してしまえば、魂のない肉体はただの肉塊。極めて民主的にそれを処分できるということですね。理想の仮想現実への移住というスローガンのもとに」とぷにっと萌えが口を開く。
「環境問題、食料問題の観点からも政府の政策は説明できる。この地球で、今の人類の人口を養うのは環境負荷が大きすぎる。食料を生産するのだって、いつまで持続できるか分からない状況だ。そのような

中で、多くの人間を仮想空間へと移住させれば、必要になるのは電力だけ。人間一人が生きるエネルギー量が格段に減る。悪魔の所業だがな」とブループラネットさんが腕を組みながら言う。
「ですが、それは悪にしてはあまりに陳腐ですね」とウルベルトが口を開いた。
重苦しい雰囲気が立ちこめていた。

Diligit anima mea
Diligit anima mea l

〝あまのまひとつ〟が生産に使うアイテムを集めるために、九人の自殺点（ナインズ・オウン・ゴール）はシシリック・アイランドに訪れていた。
三か月に一度、島に生えている水仙（ナルキッスス）が開花し島全体が花畑となる。その時期は、普段は緑色の島が、雪が降ったように白く変わる。そして、所々に咲いている黄色い花。それが、霊薬の材料となる〝ペルセホネの水仙（ナルキッスス）〟だ。現実時間で、三か月に一度というタイミングでしか咲かない花だ。希少性は高い。
「たっちさん、あそこで〝ペルセホネの水仙（ナルキッスス）〟を集めている方、異形種ですね」と、モモンガは言った。
白い花で覆われた小高い丘の上で、てらてらした光沢のピンク色の肉の塊が、くねくねと花畑の中を動き回っていた。

「そうですね。お一人のようですね。ちょっと勧誘してみますね」とたっち・みーさんは言って、その方向へと歩き出す。
「なんだか、激しく景観を損なっている異形種だな……」とフラット・フットは、丘の上から太陽の光を乱反射させながらぐにょんぐにょんと動くピンク色の肉感豊かな肉棒を見て呟いた。
「それを言ったら、私たちだってお花畑は似合いませんよ」と自らのモモンガは手で、ナルキッススを一本摘んだ。モモンガの手は白骨だ。花を持っても似合わない。むしろホラーだ。
「武人に花は要らぬ。散らすのは己の命のみ」
「いや、武人建御雷さん、そんなこと言ってないで、ちゃんとみんなで採取しましょうね？　次は、武人建御雷が必要としている鉱物を取りに行くって、たっちさんが言ってたじゃないですか」と、モモンガが言う。武人建御雷は、最後までペルセホネの水仙（ナルキッスス）を採取しに行くという提案に反対をしていた。曰く、武人らしくない。
「あの、モモンガさん、よろしければ、ここでちょっと仰向けになって

もらえませんかね？」
「別に良いですが……」とモモンガは、エンシエント・ワンの言葉どおり花畑に転がる。
「うん。イメージ通りです。野ざらしにされた亡骸。それが美しい花に囲まれて静かに眠っているの図、ですね」とエンシエント・ワンは満足そうに言う。
「おいおい、それなら髑髏の目のところからも花が顔を出ている方がリアルなんじゃないか？」と一本の花をモモンガの眼窩に活けようとした。
「ウィッシュさん！　それは勘弁してください。シュール過ぎますよ」とモモンガは慌てて起き上がる。
「冗談だよ、冗談」
「まったく、エンシエント・ワンさんも、ウィッシュさんも、人のアバターで遊ばないでくださいよ」とモモンガは冗談口調で抗議した。
「あっ、たっちさん帰ってきた……勧誘は失敗かな？」と、一人で丘から降りてくるたっち・みーを見ながら、あまのまひとつが言う。
「いやぁ、ナンパはお断りです、執拗だとＧＭコールしますよ、と言われてしまいましたよ」と、困ったように右手を頭の後ろに回していた。
「既婚者でリアルで警察官の人が、花畑でピンクのマラを勧誘したらナンパと勘違いされて、通報されそうになるって、どんだけ面白いんですか。それ。腹筋崩壊モノですよ」とウィッシュさんが言うと、全員が笑い出す。
「いやぁ、まさか女性だったとは迂闊でした」とたっち・みーが反省めいたことを言う。
「いや、あの外見で中味が女性って……ちょっとそれは無いんじゃないですかね。しっかし、女性で異形種ソロプレイって、すごいですね」と、あまのまひとつが感心したように言った。
　異形種であるがゆえに、異形種狩りの被害に遭ってしまう。まずそれにめげない気持ち。たっちさんと出会っていなければとっくの昔にユグドラシルを辞めていたであろう。
　それに、このシシリック・アイランドに来るにも相応の実力が求め

られる。モモンガも一人でこの場所に到達できる自信は無い。あのピンクの肉棒は実力者であることは間違いがない。
「まぁ、気を取り直して、採取を始めましょう。強いモンスターはいないでしょうが、希に、エリアボスである冥府王アイドーネウスが出現するという情報もあります。隠密系のモンスターらしいです。十分に注意してください。弐式炎雷さんとフラットフットさんは、定期的に索敵をして、冥府王アイドーネウスが周囲にいないかどうかチェックをお願いします。では、今から三時間ほど、みんなで力を合わせて頑張りましょう！」とたっち・みーが指示を出す。
「了解！」

・

〝ペルセホネの水仙（ナルキッスス）〟は、黄色い花。通常のナルキッススは白色の花だ。白色の花にポツンと黄色い花が一輪咲いている。半径十メートルの範囲に一輪ある程度だ。白の中に黄色があり、見つけるのは簡単であるが、一輪一輪採取していくとなると時間がかかる。シロツメクサが生い茂った草原で、四葉のクローバーを探すよりは簡単ではある。
モモンガは、〝ペルセホネの水仙（ナルキッスス）〟を摘んでは、無限の背負い袋（インフィニティ・ハヴァザック）に入れていくという作業を繰り返す。
現実でこんなことをしたら絶対腰がやばいことになるよな、とモモンガは思う。花を見つけては腰を曲げて花を摘むということを二時間は繰り返していた。時刻の経過とともに、太陽が傾き夕方近くとなった。夕日が白い花を夕日色に染め上げたせいで、黄色い花が見つけにくくなった。
そろそろ採取も限界かなぁ。みんなはどこにいるのだろうとアインズはあたりを見渡す。そして、目に入ったのはくねくねと動くスライムだった。
あっ。さっきのソロの人だ。
〝ペルセホネの水仙（ナルキッスス）〟を探すために地面ばかり見ていたモモンガであった。うっかり近くに来てしまっていたのであろう。
あちらも、何かの作業に夢中なようで、モモンガには気付いていな

いようだった。
夕陽を浴びて、ピンク色だった肉の塊は、紫色の肉棒のように見える。そして、おそらく手だと思われる部分には、白い花で作られた王冠があった。ナルキッススの花を結んで花の冠を作っているのであろう。
モモンガは、花の冠を作っている姿を見て、本当に中の人は女性かも知れないと思う。男性のアレを連想してしまうようなツヤツヤの光沢がある肉感的なピンク色の外見で、しかもネカマであると考えるよりは精神的に健全な気がする。
それにしても、どうやって作っているんだろう？　あれって手なのかな？　見たところスライム種のようだけど、スライム種って手があったけ。いや、スライム種だと触手なのかな、とモモンガが見つめていると、相手も気付いたようで、頭をあげて、ぐにゃっと体を捻った。モモンガの方を見ているような気がした。
あっ、この距離は近すぎるかな、とモモンガは焦る。距離にして二十メートルほど。攻撃魔法の範囲内だ。こっそり近づいたと勘違いされたら、必然的にＰＫ（プレイヤー・キラー）を狙っていると誤解される。
「ごめんなさい。アイテム採取に夢中で……敵意はありません」とモモンガは両手をあげる。
頭部と思われる先端部分が上から下ににゅよんと動いた。どうやら、「わかった」とか「そうですか」と同意してくれたようだとモモンガは判断し、一安心だ。
そしてモモンガは、「あ、あの。何を作っているんですか？」と続いて尋ねる。同じ異形種同士。ナンパではなくクランへの勧誘だと分かれば、安心するかもしれない。
それに、いつもたっち・みーさんが勧誘する際に使う効果エフェクト。「正義降臨」は、人によってはドン引きものだ。モモンガはカッコいいと思ったが……。
相手は、モモンガの言葉を聞いて、慌てた様子で素早く花の冠を自分の身体の後ろに隠した。
黄色い花である〝ペルセホネの水仙（ナルキッスス）〟が霊薬の調合の材料にな

るだけでなく、普通の白い水仙（ナルキッスス）も、たくさん集めてあのように花の冠にすると、何か特殊効果を得られるのであろうかとモモンガは考える。

ユグドラシルでは、情報こそがもっとも価値がある。見られまいとする相手の行動も当然であろう。しかし、モモンガも、盗み見るつもりはなかったが、見ちゃったものは仕方がない。あまのまひとつさんに参考情報として、このことは伝えておこうと思った。

Diligit animam mea 2

『ごめんなさい。音声通信で話している分には楽しいんだけど、付き合うってなるとね……。声と外見のギャップありすぎ？　みたいな？』

じゃあ、デブで、声もデブ声だったら、ギャップ解消できますが……？

『声は可愛いよね～』と友達からも言われる。だけど、『声は』の『は』に棘を感じる。

一世一代の大告白。あえなく撃沈。傷心旅行に出かけます。旅先は、ユグドラシル。半分は、自暴自棄でこれでもかっていうアバターを作った。そして、残りの半分は、下半身でしか考えてないくせに、その下半身が醜いんだよ、っていう嫌味のつもりだ。

ステータスも、防御力に全振りして、攻撃力をトコトン抑えた。自分も攻撃力が低いけど、相手からのダメージも少ない。徹底的に、モンスターと殴り合って、体力を削り合うという、お互いがサンドバッグになるという誰も得をしないプレースタイル。ヘイト値高め、バッチ来いや～!!

だけど、やってみたら意外と面白かったユグドラシル。

今日は、シシリック・アイランドで、冥府王アイドーネウス狩りをし、レアドロを狙う予定だ。

冥府王アイドーネウス。別名、ハーデス。種族、アンデッド。

冥府王アイドーネウスは、ギリシャ神話が元ネタで、水仙（ナルキッスス）を摘んでいた美しいペルセホネに一目惚れをして、冥界へと強引に連れ去った人物だ。冥界に連れ去られたペルセホネも、何だかんだでハーデスの嫁となる。ただし、ペルセホネは四か月だけ冥界で過ごし、残りを神々の世界と地上で過ごす。ペルセホネが冥界で過ごす期間が地上では冬となり、それ以外が春・夏・秋となりました、こうして季節が出来ましたというギリシャ神話だ。

ネットに転がっていた情報だと、その冥府王アイドーネウスの出現条件は、その神話にちなんで、女性キャラが、〝ペルセホネの水仙（ナルキッスス）

〝の咲いている時期に水仙（ナルキッスス）を採取するということだと考察されていた。

よくこんなマニアックな出現条件を発見したのだと彼女は感心する。

自分の人生に、春いらね（ペッ。もうずっと冬でいいからさ。今日、冥府王アイドーネウスを狩りに行こうと思ったのも、なんとなくネットで流れていた設定がムカついたからだ。とことん、冥府王アイドーネウスと殴り合ってやろうじゃないか。バッチ来いや～!!

だが、冥府王アイドーネウスは待てども出現しない。

ネットの情報がガセネタであったのか。それとも、〝人間種〟の女性キャラという条件なのであろうか？　もしかして、外装が〝美しい〟とか、そういう条件か？　おい、くそ運営！　どういう基準だ！

場所を変えて水仙（ナルキッスス）を採取するも、〝ペルセホネの水仙（ナルキッスス）〟を採取してみるも、冥府王アイドーネウスは出現しない。

他のプレイヤーが先に倒してしまって、再出現の冷却期間中なのかな？

とりあえず、彼女は待ってみることにした。しかし、待つのは良いが、やることがない。〝ペルセホネの水仙（ナルキッスス）〟は生産職ではない自分には必要ない。

辺りは、花畑で、なぐり合うモンスターもいない。平和な世界だ。

そして、花の冠でも作ろうかな。

現実ではこんな広大な花畑など、アーコロジーでは存在しないであろう。花の冠。一度は作って見たかった。おとぎ話の少女のように。

花の冠は、いざやってみると、楽しかった。一輪一輪、茎を丁寧に編み込んで輪を作っていく。

時間を忘れて、夢中になっていた。

そして、ふっと気配を感じて顔を挙げる。すぐ近くにアンデッドが立っていた。やっと現われたか、冥府王アイドーネウス。

「ごめんなさい。アイテム採取に夢中で……敵意はありません」とアンデッドは、両手を挙げていった。

（アンデッド違いかぁ……）

一瞬、やっと来た!!　と思ったのに、がっかりだった。
「あ、あの。何を作っているんですか？」とそのアンデッドはさらに話しかけてくる。
ぶくぶく茶釜は、アンデッドの質問に沈黙で返すことにした。
（花が綺麗だったので、花の冠を作ってました）
そんなことを言っても、笑われるだけだ。馬鹿にされるだけだ。
『ピンクの肉棒で、それ似合わない。ギャップありすぎ』と嘲笑されるだけだ。というか、話しかけずらい外装にわざわざしているのだから、空気を読んで話しかけてこないでよ、と彼女は思う。
実際、異形種でありながら彼女を襲ってくる異形種狩りＰ（プレイヤー・キラー）Ｋはほとんどいない。ピンク色の、どう考えても男性根としか思えない相手に襲いかかるというのは、Ｒ―１８の規制に抵触するのではないか？　と躊躇うプレイヤーが多いからだ。また、逆もしかりで、彼女に話しかけてくる友好的なプレイヤーなど皆無だ。むしろ、話しかけてくる方が怪しい。
「ごめんなさい。他人に軽々しく言えないですよね。聞いてごめんなさい」とアンデッドは一礼してこの場を去っていく。
彼女は、また花の冠を作りを再開する。
それにしても、一日に二度も、話しかけられるなんて、珍しい日だなぁ……。一か月に一度話しかけられるかどうかであるのに、一日に二度など、ユグドラシルを初めて以来、最高記録だ。まぁ、話しかけてきたのは、どっちも異形種だったけど。うわぁ、類は友を呼ぶってやつかな。だけど、なんかそれ嫌だなぁ……。
だが、ふと思う。
一日に二度も、自分が話しかけられる。奇跡のような確率であると言っても良い。ゲームを始めてから随分と経過したが、フレンド数がゼロから動いた試しがない。
（もしかして、さっきのアンデッドは、冥府王アイドーネウス？　）
彼女はその可能性に気づく。冥府王アイドーネウスがエリアボス扱いであるなら、ＡＩ搭載で、簡単な会話が出来てもおかしくはない。
ギリシャ神話によれば、冥府王アイドーネウスは、一目ぼれをした

ペルセホネを冥界へと強引に連れ去った人物。強引に連れ去る行動力。つまり、肉食系男子ということであろう。
だが、肉食系男子が激減して、絶滅してしまったのではないかとさえ言われている現代だ。運営もそのあたりを組んで、冥府王アイドーネウスを草食系男子に設定変更している可能性がある。
草食系であればどうするか。いきなり襲いかかってくるようなことをしないで、軽くジャブを打つのではないだろうか？　いや、むしろ、こっちから襲い掛かるくらいしなければならないのではないだろうか。
いや、でも私、肉食系女子じゃないし……って、そんなことも言ってられないか……。冥府王アイドーネウスのレアドロップアイテムはかなり使い勝手が良いし、今日を逃すと〝ペルセホネの水仙（ナルキッスス）〟が次に咲くのは、リアル時間で三か月後だ。
よし。彼女は決意した。先ほどのアンデッドを追いかける。頭部をぐにょんぐにょん揺らしながら走る。
「す、すみません。ちょっと待ってください」とアンデッドに呼びかける。
「え？　あ、あぁ。さっきの」とアンデッドは振り向く。
彼女は、立ち止まったアンデッドを見る。冥府王と言う名前の割には、装備は貧相だが……。
「もしかして、あなたは、冥府王アイドーネウスですか？」
・
・
・
「いえ、違いますが。というか、私はプレイヤーなんですが……」
「で、ですよねぇ～。あはははは」と、彼女は笑って誤魔化すことにした。

Ｄｉｌｉｇｉｔ　ａｎｉｍａ　ｍｅａ　３

彼女は、誤魔化し笑いをした後、「失礼しました。冥府王アイドーネウスがアンデッドという情報しか持っていなくて」と頭部をさげようと、身体をふにゃっと中折れさせ、モンスターと勘違いしてしまったことを詫びた。

「いえ、気にしないでください。こんな恰好なので、よくエルダーリッチと間違われてますから。まぁ、異形種狩りでＰＫを狙ってくる人たちの方が多いですけどね。そうだ、申し遅れました。モモンガと申します」

――名乗られてしまった――

こちらも名乗るのが礼儀。いきなり一方的に話しかけて来たのであれば無視しても良い。だが、こちらが勘違いをしてしまったという負い目がある。

「ぶくぶく茶釜です……」

彼女は小声で名乗る。自らのコンプレックスを体現したようなハンドル名。人に名乗るくらいなら、もっとマシな名前にしておけば良かった。もしくは、思いっきり『Ｔｈｅ☆逸物』とか、ネタに走ればよかった。現実の自分の体格を表現しているようで、そして心に残っている傷が疼く。

「え？　……あぁ、分福茶釜さんですか。あ、あの民話、私も好きですよ。化けて元の姿に戻れない狸が、古道具屋と出会って、幸せに暮らす。めでたし、めでたし」とモモンガと名乗った骸骨は言う。

だが、それを聞いて彼女はさらに気持ちが沈む。

ダイエットには、リバウンドという恐ろしい魔物が巣くっている。食事制限と腹筋により、ウエストが細くなって、きつかったジーンズを履けるようになる。しかし、突如リバウンドが起こる。ユグドラシルをログアウトした後、無性に夜食が食べたくなる。スナック菓子が食べたくなる。少しだけと思っても、気付いたら袋が空になっている。そして、今日だけ今日だけ、と思っていたが、気付いたらスナック菓子が手元にあるのが当たり前の日常に戻っている。

せっかく履けるようになったジーンズが、またボタンが飛んでしまいそうなほどきつい。そして、ぷにっと乗っかってくるお腹の脂肪が悲しい。

そして、リバウンド後に気付く。前より、ウエストを引き締めるのが難しくなった。リバウンド後にまたお腹回りに付いてしまった脂肪は、なかなか落ちない。絞れない。

まるで、茶釜に化けて、もとの姿に戻れなくなった狸のよう。ダイエットしても、ずっとブクブク太った女。森の中に帰れず、一人さまよい歩く独りぼっちの哀れな狸。

――この人には、悪気はないんだろうけど……無自覚に踏み込んでくるな……。もう、ログアウトしようかな――

自分の名前は、ぶくぶく茶釜だ。小声で言った自分も悪かったが、訂正するのもめんどくさい。人と関わると碌な事が無い。彼女はコンソールを出そうと操作する。

「え？　フレンドになってくれるんですか？」

何を勘違いしているのか。私がコンソールを開く動作をしたのは、ログアウトするためだ。

「分福茶釜さんか……。福を分ける……。縁起がいい名前だな。分福茶釜さんとフレンドになったら、御利益ありそう。ドロップ率が上がるような気がしますね」と、なんだか嬉しそうな骸骨。

――めっちゃ期待している感じだし。ログアウトし辛いんですけど――

『ログアウト』という選択肢をタッチしようと思うが、会話の最中にログアウトするのは失礼だ。『ログアウト』をタッチしようか迷い続ける。

「あ……。もしかして、違いました？　ごめんなさい……。そうですよね。こんなアンデッドな外見の人と、フレンド登録したりするのは嫌ですよね……」

――いや、そういうつもりじゃないんですけど――

『ごめんなさい。音声通信で話している分には楽しいんだけど、付き合うってなるとね……。声と外見のギャップありすぎ？　みたいな

？』

その言葉が思い出される。外見でアウト。それが、随分ときついことであるということは自分が痛いほど分かっている。

「いえ。そういうわけではないんです。人間は中身ですから……」

そんなはずはないと自分で分かっている。人は見た目が全てだ。『人間は中身』。なんでそんな嘘を自分が言わなきゃいけないんだ。

「ははは……」とアンデッドは渇いた声で笑う。

「無理しなくていいですよ。もしそうだったら、異形種狩りなんてのは存在しないですよ。お互い外見で苦労することはあるけれど、お互い楽しいユグドライフを送りましょう。では、そろそろ仲間との集合時間なので」と、一礼をする。

――なんだ、仲間いるんじゃん――

別に羨ましくないし（ペッ。

「楽しいユグドライフを……」と彼女はそれに答える。

モンスターと殴り合うだけが、ユグドラシルの楽しみ方ではないことは分かっている。だが……。

「あと、私の名前は、分福茶釜ではなくて、ぶくぶく茶釜ですから」

笑いたければ笑え。

「えっ？　失礼しました」と慌てるアンデッド。

「えっと……。アンデッドだから、耳もなければ、鼓膜も無いんで、耳が遠くって……」

「ぷッ」と彼女は噴き出して笑う。なんだよ、もう。その言い訳とそのセンス。その言い訳が通じるなら、肉棒がどうやって言葉を発しているというのだろうか。というか、アンデッドは声帯も無いから話もできないだろうに……。

「言い訳ですが……」

その言葉を聞いて彼女は更に笑う。

――言い訳なのは知ってますから――

この人……。面白い……。

そして、彼女はひとしきり笑い出す。泣いているように笑う。声を出して。

『アンデッドだから、耳もなければ、鼓膜も無いんで、耳が遠くって……』

本当は自分は分かってた。分かっていました。

『ごめんなさい。音声通信で話している分には楽しいんだけど、付き合うってなるとね……。声と外見のギャップありすぎ？　みたいな？』

外見とのギャップ。私はデブだけど……。振られたのはそれだけが原因じゃない。それを気付いていながら私は何もしなかった。酷い言葉のように聞こえるけど、本当は彼の優しさが詰まってる。

『ごめんなさい。音声通信で話している分には楽しいんだけど、付き合うってなるとね……。声と外見のギャップありすぎ？　みたいな？　それを気にして、俺と会うの避けてたよね。いつも音声通信だけで済ませようとするし。それに……声が可愛いってだけで、会うのを避けられて、付き合いたいと言われても……。俺は音声を恋人にする気はないよ』

太っている。違う。私のコンプレックス。自分を好きになれない自分の問題。外見が原因で振られたというのは、単なる自分への言い訳だ。

ユグドラシルでも、醜い姿になった。本当は、誰にも話しかけほしくないからそんな姿になった訳じゃない。そのつもりなら、自分のリアルの声ではなくて、他の疑似音声に変えている。でも、自分は変えなかった。

こんなピンクの肉棒の可笑しな外見でも、きっと、素敵な仲間が見つかるかもしれない。

もしそうだったら、きっと現実でも……きっといいことあると思った……。

Diligit anima mea 4

防御力が高く、攻撃力が低い。そしてヘイト値が高く、モンスターが群がって攻撃してくる。ぶくぶく茶釜。防御力に特化したステータスだけに、プレースタイルは限定される。

しかし……。

そこに、物理防御力が低いアンデッド。モモンガ。ソロでモンスターと戦うには、弱い。特に、魔法防御力が高い近接戦闘タイプのモンスターなど、相性最悪。

そんな彼が加われば、どうなるか？

その答えは、プレースタイルが、大幅に広がる。今まで手が出せなかったモンスター、ダンジョン。ユグドラシルの世界が一気に広がった。最強のツーマンセル、理想の組み合わせなのではないかとさえ思う。

「あっ、レアドロしたみたいです！」とモモンガが嬉しそうにデータクリスタルを拾っている。

「良かったですね！　この調子で集められたら、もう少しで種族レベル上げられそうですね」

「本当にありがとうございます。ぶくぶく茶釜さん。できれば、あと何周かしたいんですが……」

「あっ……でも……。まぁ、いいっか！　やりましょう！」と彼女はモモンガの提案に快諾する。だって、楽しいんだもん。

・

「たっちさん、ごめんなさい。遅れてしまいました」とモモンガは申し訳なさそうに言う。

「ほんとですよ。一時間の遅刻ですｗ　みんな待っていましたよ」とクランのリーダーであるたっち・みーさんが、冗談混じりに言う。

「申し訳ないです」

「私も申し訳ないです」と彼女も謝罪する。

だけど、このまま周回プレーを何度もしたら、約束の時間を過ぎる

ことを彼女は実は気付いていた。約束の時間に遅れることは悪いことだとは分かっていたけど、彼女はモモンガの提案を快諾した。
モモンガさん。
いつも冷静沈着な感じだけど、夢中になると時間を忘れてしまう人。
モモンガさん。
エンシエント・ワンさんや、ウィッシュさんからは、弄られキャラ。それを見てるの、割と好き。
モモンガさん。
親身に話を聞いている人。
モモンガさん。
モンスターを倒す最後の一撃は、派手なエフェクトの魔法を選ぶ、ちょっと可愛い人。
モモンガさん。
独身。周りの人たちの話では、恋人いない人。
・
・
・
「モモンガさん……実はちょっと相談があるんですが……」
「え？　もちろん大丈夫ですよ」とモモンガさんは不安そうに答えた。
それはそうだと思う。ギルド、アインズ・ウール・ゴウン。そのリーダーとなったモモンガさん。モモンガさんがリーダーとなり、順調にギルドは発展し、ギルド順位が九位にまでなった。
だけど、最近はメンバーのリアルが忙しくなった。急に仕事の拘束時間が増えたり、仕事の量が格段に多くなったり。社会全体のスローガンが、『ゆとりある余暇を仮想現実で』から、『人類全体で難局を乗り切ろう』へと変わってしまった。
必然的に、ユグドラシル引退を余儀なくされたメンバーも多い。
今から切り出すのは悪い話だ。
「実は……。仕事が順調というか、増えてきて、頻繁にログインすることができなくなるかも知れません」

「そうですか……。ぶくぶく茶釜さんって、声優さんでしたよね。仕事が増えるって、良いことじゃないですか」
　モモンガさん、寂しそうだ。
「なんだか、男女問わず、リアルでは疲れていて、互いにＤｏする余裕が無くなってしまったようで、逆に私が出演しているようなゲームの需要が高まったみたいで……仕事のオファーも多くって……」
「そうですか……。でも、仕事のオファーが多くなるって、ぶくぶく茶釜さんの実力が認められてきたということですよね。それは私も嬉しいですよ！」
　無理しなくていいですよ、モモンガさん。
「実力ですか……。実は、声優の間では、恋をしていると演技力が伸びるって……。そう言われているんですよね……」（チラッ
「ペロロンチーノさんが、恋はバッドステータスだ、って言ってました。仕事に手が付かなくなるって。だけど、声優さんでは、良い方向へと動くんですね。種族によって、属性が変わるみたいで面白いですね」
　――弟、何、余計なことをモモンガさんに吹き込んでんだ？　実家に帰ったらとっちめてやる――
「……えっと、それで、実はモモンガさんにプレゼントがあるんです」と、彼女はモモンガにそれを差し出す。
「腕時計ですか！　ありがとうございます。大切に使います」と嬉しそうに腕にモモンガは嵌めた。
「ゲームに夢中になると、時間を忘れてしまうモモンガさんにはぴったりかな、と思って。あと、隠しコマンドがいくつかあるので、是非探してみてください」
「ありがとうございます。タイマーまで付いている！　実は、時間停止中に魔法を掛けるのはなんとか習得できたのですが、どうも、超位魔法の冷却時間は長すぎて、数えながら戦闘することができなかったんですよ」と、モモンガは嬉しそうに時計を操作する。
　――作って良かった。モモンガさんは、あの隠しコマンドを探し出してくれるだろうか――

『予定したお時間が経過したよーモモンガお兄ちゃん！』
　モモンガが操作したタイマーの音声が鳴った。
「音声も、ぶくぶく茶釜さんなんですね。ありがとうございます。大切にしますね。それにしても、『モモンガお兄ちゃん』は照れますね」
「あっ、いえ。私は弟しかいないし、モモンガさんのようなお兄さんがいたら良かったなぁなんて……まぁ、ネタです、ネタ！」
　――自分、何言ってんだろう――
「大切に使わせていただきます」
「そういって戴けると嬉しいです！　では、モモンガさん！　時間を見つけて、ログインしますので！」
「えぇ、待っています！」
　……結局、ユグドラシル最終日まで、ログインすることができなかった……。

Diligit anima mea 5

【REAL】

死獣天朱雀の説明で、オフ会の雰囲気は一気に暗くなってしまった。箱舟計画（プラン・ノア）。肉体を捨てて、仮想世界へ移住する計画。

「政府の行っている実験は分かった。だが、その人類防衛軍ってのは何がしたいんだ？」

「それは簡単なことですよ、武人建御雷さん。実験の進行を妨げたいのでしょう。病院の件で明白です。魂が、まだアバターに定着しておらず、肉体と繋がっている状態であれば、肉体を破壊すれば、Ｇｅｉｓｔ（２１ｇの魂）シンドロームの連鎖反応が起こり、仮想空間上の魂も消失する」

「それは分かるがよ、ぷにっと萌えの旦那。ただ、人類防衛軍の奴ら、ＹＧＧＤＲＡＳＩＬでも何かやったって犯行声明で言っていただろ？　ＹＧＧＤＲＡＳＩＬの中で一体何をしたんだ？　事件が発生した後、プレイヤーが多数死亡。それに、アンダーグラウンドな情報だと、現在もプレイヤーが死亡しているって話だぜ」

「いくつか考えられますが、一つが、政府の実験を公（おおやけ）にしたかったのではないでしょうか。サービス終了時に最後までログインしていた人が、全員意識不明になるというのは、秘密裏に実験を行うには目立ちすぎです。政府としては、サービスが終了し、プレイヤーが強制ログアウトされ、誰もいなくなった状態で、実験場を確保する。そして徐々に被験者をその仮想世界にログインさせていく。これが自然でしょう」

「そう考えると、味覚、嗅覚、触覚などが再現されるプログラムをサービス終了時前にユグドラシルのサーバーにアップロードしたのは、人類防衛軍の奴らってことになるな」

「それに加えて、ログアウト出来ないようにシステムを弄った」

あれ？　そういえば、最終日にログインしようとしたら……と彼女は思い出す。

「あの、私も最終日にモモンガさんの呼びかけに応えて、サービス終了

時ギリギリにログインしようとしたら、『Ｎｏｗ　Ｕｐｌｏａｄｉｎｇ，Ｗａｉｔ　ａ　ｍｉｎｕｔｅ……』とずっと出ててログインできなかったんですが……」と彼女は最終日のことを思い出す。そのせいで、ログインすることが間に合わず、モモンガさんに会えなかった。

「そいつは変ですね。コンソール側は端末なので、ダウンロード（ｄｏｗｎｌｏａｄ）と表示される筈です。コンソール側からサーバーへアップロード（ｕｐｌｏａｄ）することは無いと思いますが……。見間違いでは？」

「いえ……。時間がギリギリで焦ってましたけど……まだ、アップロードしてるの！　って何度もイライラした記憶がありますから……。いま、冷静に考えるとアップロードは変ですよね……」

通常は、パッチをコンソール側がダウンロードして、そのパッチを開いてアップデートする。コンソール側からサーバーへアップロードすることなど、サーバーのウイルス対策などの面から、あまり想定されないことだ。

「ユグドラシルのサーバーに、何処からかデーターが送信されていたということでしょう。そして、味覚、嗅覚、触覚などが再現されるプログラムが送信されていたと考えるのが状況的に自然ですね」

「それ以外にも人類防衛軍の奴ら、何かやっていますね。プレイヤーの死亡数が多すぎる」

「プレイヤーは、ログアウト不可能になったから、自分で死んでみたんじゃないのか？」

「それを試そうとしたプレイヤーも多いでしょう。しかし、問題は『ＨＯＷ』です。自分で死んでみようと思って、攻撃を受ける。しかし、それ相応の『痛み』がある。五感が再現されている世界ですからね。痛みが存在する、そうなれば……本能的に躊躇うのが普通ですよ。大抵のプレイヤーは、何かが変だと途中で気付くはずです。それにも拘らず、死者数が膨大な数になっている……」

「ゲームの中で、誰かがプレイヤーを殺している？」

「おそらくは……。ログアウトできないという混乱状況で襲われた、それが最初に死亡者が膨大になった理由と考えるべきでしょう。そして、今もプレイヤーの死亡があるということは、何者かが襲ってい

るということでしょう」
「モモンガさん、大丈夫かな？　ソロだとモモンガさん、あんまり強くなかったよね……」とやまいこが呟く。かつて行ったギルド内の最強決定トーナメントでは、「女教師怒りの鉄拳」でボコるだけで勝ててしまった。「女教師怒りの鉄拳」の追加効果、吹き飛ばしによって、モモンガさんの唱詠中の魔法を全て強制キャンセル。魔法無詠唱化（サイレントマジック）で無唱詠化している魔法も、発動までのタイムラグ中に殴ってしまえば発動できない。後は、円形闘技場の壁際にまで押し込んで、非破壊対象の壁に当たって跳ね返ってきたモモンガさんのアバターを、スカッシュのボールの如くひたすら鉄拳で殴って体力を削るだけで勝ててしまった。
「プレイヤーの中では、上の下。いえ……中の上でしょうね。一対一の状況で、モモンガさんに事前準備の時間があれば、『誰でも楽々ＰＫ術』でモモンガさんの勝算は高いでしょうが……。モモンガさん、覚えていてくれているかな」
『誰でも楽々ＰＫ術』。ぷにっと萌えが考案し、それをモモンガに伝授したのは随分と昔のことである。敵の探知阻害の無効化から始まり、数十種類の魔法を用いる。手順も複雑だ。考案した自分自身でも、正しく実行できるか今や自信が無い。
「モモンガさんを助ける手段……何か無いでしょうか？　私は、モモンガさんに死んでほしくありません」と彼女は言う。
「前門の虎、後門の狼。箱舟計画（プラン・ノア）の実験を進行させたい政府は、眠っているプレイヤーを目覚めさせるという選択肢は取らないでしょうね。そして、実験を中断させたい人類防衛軍は、仮想現実でプレイヤーを殺そうとし、現実の肉体も狙ってきている。現状維持という選択は、遅かれ早かれ死ぬということと同義ですね」と、タブラ・スマラグディナが残酷ともいうべき事実を言う。
「あの、まだ何とも言えませんが、ぶくぶく茶釜さんのデータロガーをお借りできませんか？　残っているデータを解析したいです」とヘロヘロが呟く。
「えっと……」と彼女は一瞬ためらう。

ヘルメット型のデータロガーには、一か月間の彼女の仮想現実での行動が赤裸々に記録されている。ユグドラシルの最終日以来、使っていないので、ユグドラシルのデータは自動消去されずに残っているはずだ。もしかしたら、むらっとして眠れない夜に遊んだ成人女性向けのゲームデータまで残っている可能性もあるが……相手をしてくれるアバター―。割と精巧に誰かさんに似せて作ったし……いや、恥ずかしがっている場合じゃない。「良いですよ」と彼女は決断する。

「ありがとうございます。『Ｎｏｗ　Ｕｐｌｏａｄｉｎｇ』という表示が出ていたということは、もしかしたらどんなプログラムが流されたのかロガーに残っている可能性があると思いまして……。会社の設備で解析してみます。どうせ、この不景気で、突然のホワイト企業化で、時間はありますし」とヘロヘロが言う。

ヘロヘロは、ナザリックのＮＰＣのＡＩ（人工知能）を担当したメンバーの一人だ。仕事の関連でも、プログラムに関してはかなり専門性が高い。アインズ・ウール・ゴウンのメンバー随一だろう。

「じゃあ、私、今から取りに戻ります！　ヘロヘロさん、待っていてください！」と彼女は、居酒屋から飛び出した。

データロガーをヘロヘロに預けてから三日。
「どうでしたか？」と、彼女のデータロガーの解析結果を尋ねるメールを送ると、『通信では差し障りが。みんなでまた集まりましょう。大丈夫です』とヘロヘロからの返信があった。
そしてまた、オフ会の連絡をアインズ・ウール・ゴウンのメンバーに行う。頻繁なオフ会にも拘らず、都合が付くメンバーは多く集まってくれた。
そして、開催予定時間になると、ヘロヘロは、持参したＰＱＣ（携帯型量子コンピュータ）を自分のスマクロに接続する。その場には、乾杯などという空気は無かった。
「幸運なことに、ぶくぶく茶釜さんのデータロガーにプログラムの大枠が残っていました。これが人類防衛軍がユグドラシルの中身を書き換えたプログラム概要です」と映像言語化したプログラムを投射する。ヘロヘロが使ったのは、プログラムを文字列やコードではなく、視覚化して、その働きを映像として映し出す技術だ。たとえば、コンピューター内に侵入したウイルスを駆除する働きを持つプログラムは、二世紀前に流行したゲームの〝パッククン〟と呼ばれるキャラクターで表示され、ウイルスをパクパク食べる様子が映像化される。そして、〝パッククン〟が、ばい菌ではなく、ネジなどを食べていたら、プログラムにバグがあるということが直ぐに分かるという仕組みの技術だ。
そして、そこに映し出されるアイテムの数々。それには、アインズ・ウール・ゴウンのメンバーにとって、馴染みのあるアイテムもいくつか存在した。
「おいおい……これって、聖者殺し（ロンギヌス）の槍じゃねえか。それにこっちは、〝山河社稷図〟と〝傾城傾国〟。なんでユグドラシルのワールド・アイテムをプログラムとして人類防衛軍の奴らが使ってるんだよ？」
「この蛇を模った造形……永劫の蛇（ウロボロス）の腕輪かな？　僕、初めてみた」
「あっ、支えし神（アトラス）だ。ちくしょう！　思い出したらムカついてきた！」

「どうして、人類防衛軍がワールド・アイテムを使ってるんだ？」
　その映像を見て、集まったメンバーがそれぞれ口を開く。
「今回、ユグドラシルが狙われた理由だと思います。ワールド・アイテムが強力過ぎたのです」とヘロヘロは言う。
「それはどういうことだ？　確かに、ワールド・アイテムはチートだったが。でも、それはユグドラシルのゲームの中だけだろ？」
「それが、同じなんです。たとえば、運営側、つまりＧＭ（ゲーム・マネージャー）は、Ｒ－１８行為などに抵触したユーザーに対して、ＧＭ権限を発動させて、プレイヤーデータを消去することが可能です。しかし、そのようなＧＭが使うコードは、運営側の極秘中の極秘のコードです。このコードが流出したら、悪意あるプレイヤーは、ＧＭ権限を使って自由に他のプレイヤーのデータを消せてしまいますからね」とヘロヘロが解説をする。
「もしかして、ワールド・アイテムって、ＧＭ権限の一部を限定的に組み込んだアイテムだった？」
「そのようです。ちょっと信じがたいことですが……」
「相変わらずのくそ運営だな、そりゃ……。聖者殺し（ロンギヌス）の槍を解析すれば、プレイヤーデータの消去コードが分かるって話かよ。〝傾城傾国〟があれば、洗脳し放題。さすがに五感を有するプレイヤーを洗脳するってのは無理くさいけど、ＮＰＣなら行けそうだな……。それに、永劫（ウロボロス）の蛇（ウロボロス）の腕輪（ウロボロス）なんか乱発された日には、ゲームバランスどころではないぞ？」
「その通りです。しかも、ワールドアイテムとしてではなく、ワールド・アイテムから逆算したＧＭ（ゲーム・マネージャー）権限として使用している可能性があります。ワールド・アイテムを保有している相手には効かないという制約も、無効化している可能性が高いでしょうね。ワールドアイテムを保有していても、違反行為の場合、容赦なくプレイヤーデータは消せますからね……」とヘロヘロは、ため息を吐きながら言った。
「ワールドに思い入れがあることは分かっていたが、これほどまでとはのぉ。セキュリティが甘すぎじゃ」
「だが、こいつはやばいな。絶対ヤバイ。そんなやつらがプレイヤー

を殺しに来るって、勝負になんないぞ」
「あの、その、それで、どうやってモモンガさんを助けるのかな？」
「問題はそこですね。実は、人類防衛軍の流したプログラム。やはり味覚、嗅覚、そして触覚を再現するプログラムが流れた形跡を見つけました。これは、容量が膨大で、ログーに入っていませんでした……」
「じゃあ……モモンガさんを助けられないってこと？」
「いえ。ただ、味覚、嗅覚、触覚を遮断する方法は分かりました。感覚を遮断したあと、無理やりモモンガさんのコンソールの電源を落とせば……魂はモモンガさんの、いえ、鈴木悟さんの肉体に戻ってきているはずですから、意識は回復するはずです。理論上はですが……」
「だが、試してみる価値はある」
「その前に、このリスクを説明させてください」とヘロヘロは浮き立つメンバーに対して言う。「誰かが、ユグドラシルにログインをしなければなりません。直接、モモンガさんのアバターに触れて、感覚遮断のプログラムを流し込む必要があります。どうも、プレイヤーとＧＭとの接続が切れているようで、外から感覚遮断のプログラムを流し込むことはできないようです」
　一瞬、全員が呼吸を忘れたように静かになった。
「誰かがユグドラシルにログインしなければならないってこと？　そして、モモンガさんを探し出して、感覚遮断のプログラムを流し込む」と彼女は口を開いた。
「そうなります」
「私が行きます」と彼女はそのまま答えた。
「ですが……。あくまで理論上で……成功の保証は実はないです……」とヘロヘロは正直に答える。
「それでも、助かる見込みがあるなら、私はやってみたいです」
　だれも、その彼女の決意に応えない。しばしの沈黙が場を包んだ。
「ミイラ取りがミイラになる。その可能性もあるのじゃろう？」と死獣天朱雀が年長者として、静かに口を開く。
「その通りです。失敗したら、ぶくぶく茶釜さんも……。モモンガさんと同じ状態になります。残念ながら、その可能性は高くて泣けてく

るほどです」
「そうかも知れませんが……。ごめんなさい。ヘロヘロさんのそれを試してみたいです」
「姉ちゃん……俺も……」
「黙れ、弟」
「いや、俺も行くから。直接、モモンガさんの体にプログラムを流し込むってのが重要なら、機動性ではアインズ・ウール・ゴウンでナンバーワンの爆撃の翼王。つまり、俺だろ？」
「それなら、俺も行くぜ！」
「僕も行くよ」
「日時は、明日決行でよろしいですか？　早ければ早いほうが良いので……」
「おう！」「大丈夫です！」と有志たちから決意ある声が聞こえる。
「明日、１０時にモモンガさんの入院している病院の前で集合しましょう。みなさんは、明日はヘルメット型のデータロガーを各自持ってきてくだされば大丈夫です。注入用ナノマシーンは人数分私が用意しておきます」とヘロヘロさんが言う。
　アインズ・ウール・ゴウンのメンバーが再び結束をした。そう思われた瞬間、一人の男が口を開いた。
「ちょっと待ってくれ！　みんな、モモンガさんのことは分かるが、みんながやろうとしていることは、立派な犯罪だ。私は警察官としてそれを看過することはできない！　仮に、理論通りモモンガさんの意識が戻らなかったらどうする？　コンソールには生命維持装置が連動している。それの電源を抜いた時点で、殺人未遂だ！」
　口を開いたのは、たっち・みーだった。
「また、そうやって自分だけの正義を振りかざすのか？　法律に違反する？　エリートなお前も分かってるだろ？　このまま現状維持を続けても、政府の箱舟計画（プラン・ノア）の実験体だ。それに、実験体であり続ける限り、モモンガさんは箱舟計画（プラン・ノア）を阻止しようとするテロリストに命を狙われ続けることになるんだぞ？　現状に身を任せることはモモンガさんを見殺しにすることに等しい。それが、お前の正義なのか？

あいつが、お前と揉めて、ナインズ・オウン・ゴールから抜けたときもそうだ。自分だけの正義を振りかざしやがって。胸糞悪いやつだ」と、ウルベルト・アレイン・オードルは手酌しながら言った。
「たっちさん……。たっちさんに迷惑はかけません。ですから……明日だけでいいんです。明日だけ、見逃してください。モモンガさんを助けたら、大人しく捕まりますから……」
　彼女は、たっち・みーに向かって深々と頭を下げる。
「ぶくぶく茶釜さん。そんなことは止めてください……」
「俺からもお願いします」とペロロンチーノも姉の横に並ぶ。
「僕からも……お願いします」とやまいこも立ち上がって頭を下げる。
「たっちさん、あんた、なんだか弱くなったな。ユグドラシルの時は、もっと強かったぜ？　憧れるくらいに」と武人建御雷は呟く。
「ＹＧＧＤＲＡＳＩＬとＲＥＡＬは違うんだ！」とたっち・みーは叫ぶ。
「今のモモンガさんにとってはどちらも同じではござらぬか？」
「くっ……。しかし……」長い沈黙。そしてその後、「わかった……。私は知らなかった。それでいいんだな！」
　たっち・みーさんは、そういうとそのまま居酒屋から出ていってしまった。
　それを黙ってみんな見つめていた。
「『私は知らなかった』か……。捨て台詞まで胸糞悪いやつだ」とウルベルト・アレイン・オードルは言って、お猪口（ちょこ）を一気に傾けた。

・

・

　富裕層向けアーコロジーの中でも、本物の植物が植えられている高級住宅街。そこにたっち・みーの自宅はあった。その住宅の中。キッチンカウンターで、たっち・みーはワインを飲んでいた。
「あなた。まだ、飲んでいらっしゃるの？」とベッドから起きた妻が声をかける。そして、「私も少し戴こうかしら」と、自分のグラスをキッチンから取り出す。
　キッチンに置かれたワイングラスにたっち・みーはワインを注いで

いく。
　カチン。お互いのグラスを重ねあわせた。
「それで……今日は懇親会で遅いと思っていたのに、早く帰ってきて。だけどこんな遅くまで一人でお酒？」と優しく語りかける。
「たまには遅くまで飲みたいときもあるさ」
「そう。なんだか背中が寂しそうだったけど。懇親会で何か嫌な事でもあった？」
「いや、特にはないよ」
「そう……。あなたが『特には』って使うってことは、とっても嫌なことがあったのね。そしてそれが、ゲーム絡みなのね？」
　その言葉を聞いてたっち・みーはワイングラスから顔を上げ、妻の顔を見つめる。
「何驚いた顔しているのよ。何十年もあなたの傍にいるのだから、分かって当然よ。それにさっきから何度クローゼットを開けたり閉めたりしているのよ。五月蠅くて眠れないわ」
　クローゼットの中。そこは、ヘルメット型のデータロガーなど、ユグドラシルで遊ぶための機材がしまってある場所だ。たっち・みーは、クローゼットの中に仕舞っているヘルメット型のデータロガーを手にとっては、また、元の場所に戻すという行為を先ほどから繰り返していた。
　敵わないなぁ、とたっち・みーは思う。
「なぁ、人類の幸せってなんだと思う？」
「随分と大きな話ね。そんなこと突然言われても分からないわ。だけど……私の幸せなら即答できるわ。あなたと一緒に娘の成長を見守ること。それが私の幸せ。娘が大きくなって誰かと恋をして、純白のウエディングドレスを着ているのをあなたと一緒に見るのが楽しみよ」
　娘の成長……。たっち・みーは考え込む。政府は、生身の体つまり自然的身体を箱舟計画（プラン・ノア）によって放棄する方向へと進んでいる。娘の成長……。それが今後の人類には存在するのであろうか。
「とても大切なことなのでしょう？　そしてあなたは、それが正しい

と思っている。ゲーム、してもいいわよ」
「だ、だけど……娘が生まれたらゲームは一切しないって約束を反故にすることになる」
「私はあなたを信頼しているわ。それに、結婚ということから逃げる口実に、ゲームにのめり込んだのは、もう昔のことでしょ。あなたはもう、立派な私の旦那で、そして娘の父親なのだから」と妻が言う。
たっち・みーは、敵わないなぁと再び思った。

Diligit animam mea 7

決行の時。
病院前に集合したメンバーが目指すのは、鈴木悟の病室。
ぶくぶく茶釜は、病院の地下へ降りるエレベーターに一人乗っているかのように見える。だが、そこには、エレベーター内で、弐式炎雷自作の光学迷彩を着た、他のメンバーが息を潜めている。
エレベータが地下七階に辿り付く前に、彼女は大きく深呼吸をする。
病院に入る前のチェックは全員無事に通過することができた。データロガーを病院に持ち込むことは怪しいことではない。心療内科などでは、仮想現実の森林浴などを用いたリラクゼーションの効果を測定するため、データロガーを持参することはよくあることだ。それに、アインズ・ウール・ゴウンのメンバーで、犯罪歴などを持っている者もいない、社会で働いている者たちだ。ＤＮＡチェックも問題なく通過することができた。
しかし、地下七階の警備はそうはいかない。ユグドラシルの昏睡した患者しかいない専用病棟。お見舞いに来たメンバーがヘルメット型データロガーを持っていたら、それは限りなく怪しい。良からぬことを企んでいるということは一目瞭然だ。
エレベーターが開く。だが、今日も警察が待機している。
しかし、その警察官の顔を見て彼女は安堵する。いつもの、顔なじみの警察官。彼女が鈴木悟の見舞いに来るときにいつも持ち物チェックをする人だった。
「あっ。こんにちは。今日もご苦労様です」と笑顔一杯に声をかける。笑顔が頬の当たりで引きつっているかも知れないが……。
「こんにちは。今日もいらしたのですね」と警察は彼女の持ち物チェックを始める。すでにお互いにとって、慣れた行動だった。
「はい。問題無いです。お通りください。こんなに頻繁に見舞いに来て貰えて、正直彼氏さんが羨ましいですよ」と警察官は笑いかける。愛想のよい対応ではあるが、持ち物などチェックすべきことは抜かり

なくしっかりとやっている。
「ありがとうございます」と彼女はそれを流しながら、恥ずかしくなる。
――光学迷彩で隠れてる仲間も聞いてるんですが……。彼氏って……。前に否定しておくんだった――
そして、彼女は鈴木悟の病室に向かって数歩ほど歩いて、ふっと思い出したように警察官に話しかける。
「そうだ……。さっき、エレベーターに乗る前に、病院の一階でなんだか怪しい人を見かけました……上の階に上がっていきましたけど……。最近、なんだか物騒じゃないですか……」と不安げに彼女は話す。
「どんな人でしたか?」と真剣な顔つきで警察は尋ねる。先ほどの和やかなムードが一転した。
「えっと……。フードを被って顔を隠していたので分かりませんでしたが、体格は男性でした。でも、病院でフードを被るってちょっと変だなって思って……」
「情報ありがとうございます。念の為様子を見てきます」
「あっ、私の気のせいかも知れないですが……」
「いえ、念には念を入れておいた方が良いので」と警察はエレベーターのボタンを押す。職務に忠実な人のようだった。
「そうですか……。あ、私は病室に行っていて大丈夫ですか?」
「もうチェックは済んでおりますから大丈夫ですよ。ただ、面会時間は守ってくださいね」と言って、エレベーターに乗り込んだ。
「ほっ」と彼女は安堵のため息を吐いた。
そして、他のメンバーを光学迷彩を抜いて姿を現す。
「上手くいきましたね」
「光学迷彩で潜入成功。ふふふ。囁きますね。私のＧｅｉｓｔ（ガイスト）が……」とタブラ・スマラグディナもなんだか楽しそうである。
「隠れ身の術……」と、弐式炎雷も、伸ばした左手の人差し指を、同じように人差し指を伸ばした右手で握り何かのポーズをしていた。
「モモンガさん、彼氏さん、だったんだ。僕知らなかったなぁ……」と

やまいこさんは笑っている。
「否定するのがめんどくさかっただけ……。それより、病室はこっちです」とメンバーを病室へと誘導する。
病室。先日、彼女が棚に飾っておいた水仙（ナルキッスス）の花は、少しだけ萎れていた。
ヘロヘロは早速、ＰＱＣ（携帯型量子コンピュータ）を開いて、ユグドラシルへの準備を始めた。ここからは時間との勝負だ。
「モモンガさん！　いま、助けに行きますからね」と、ペロロンチーノは呼びかける。
それぞれがモモンガの眠るベッドを囲むように椅子を配置し、各々のデータロガーを被り、接続用の回線を自らの体のコネクターに接続していく。
「僕、久しぶりにダイブ用ナノマシーンを体内に入れたよ。ナノ酔い、久しぶりだなぁ」とやまいこさんは、少しだけ顔をしかめている。ナノマシーンがコンソールとの神経接続をしやすくする働きにより、一時的にほろ酔いのような感覚になる。
「ウルベルトさん、準備は終わりました。いつでも行けますよ」とヘロヘロは、腕を組みながらイライラしているようすのウルベルトに声を掛ける。彼は、ヘロヘロと同じく、現実世界で留守番をし、現実世界での不測の事態に備える役割だ。
「すみません。あと、五分待って貰えないですかね。遅刻した馬鹿がいるようで……」とウルベルトは答える。
「そうですか……では、先に説明をします。制限時間は二時間です。それまでにモモンガさんを探し出し、二時間経過したとき、どなたかがモモンガさんの体に接触をしていてください。皆さんのアバターに組み込んである感覚遮断のプログラムが動きだし、モモンガさんにも流れ込みます。チャンスは一度。二時間後、何が何でも誰かがモモンガさんに触れていてください。そして、一番大事なことですが、ログインしたら皆さんにも五感があります。つまり、皆さんのＧｅｉｓｔ（２１ｇの魂）は、アバターの中に有ります。ユグドラシルの中で死ねば、Ｇｅｉｓｔ（２１ｇの魂）シンドロームの連鎖反応で、本当に死にます。それだ

けは注意してください。最悪の場合は、二時間、ＨＰをゼロにしないことだけを考えてください。おそらく、復活アイテムも効果ない可能性が高いです」
　ヘロヘロの説明で全員が息を飲む。すでにそのことは承知している。ユグドラシルの状況も分からない。最悪の場合、ワールド・エネミーが暴れまくっている可能性だってあるのだ。

コン・コン
突然、病室にノックの音と共に、病室の扉が開かれる。

「元ワールドチャンピオンの力、必要ではありませんか？」
　現われたのは、たっち・みーであった。その右手には、ヘルメット型のデータロガーを持っている。何をしに来たのかは明白であった。
「たっちさん！」
「ちっ。ヒーローみたいに遅れて登場しやがって……。胸糞悪い奴だ。遅刻だ、遅刻！」とウルベルト・アレイン・オードルは呆れ顔だ。
「ウルベルトさん……。私の掲げる正義は、確かに中途半端かも知れません。法律（Compliance with low）という威光を借りた正義かも知れない。けれど……友達を見殺しにする、これは絶対に私の正義ではない」
「友達を見殺しにする……それは「悪」にしても、あまりに陳腐だ。お前もさっさとデータロガーを被れ。ログイン時間は二時間。その間は、この病室に誰も一歩も踏み入らせない。悪のバリケードってのがどんなものか、教えてやるよ」と、ウルベルトは室内にある棚やテーブルなどを病室の扉の前へと移動させていく作業に取り掛かった。
「珍しく意見が一致しましたね、ウルベルトさん」とたっち・みーは、棚を動かしているウルベルトに握手を求める。
「勘違いするなよ。俺は、悪を論じているだけだ。正義を振りかざすお前とは、ずっと平行線だ」と悪態を吐きながらも差し出された手をしっかりと握る。
「そうですね。撤回します。あなたとは永遠に平行線です」とたっち・みーも言う。そして固い握手を交わしたまま互いに笑っている。

「ねぇ、二人の言っている『正義』とか『悪』とか、僕には同じに聞こえるんだけど？」とやまいこが小声で囁く。
「限りなく近い平行線は、直線ってこと？　うん……私にもよく分からないや」とやまいことぶくぶく茶釜は、互いに首を傾げて笑い合う。男ってよく分からないよね。
　二人の時間が、ユグドラシルの第六階層巨大樹の中で、餡ころもっちもちさんを交えて、三人でおしゃべりを楽しんでいたときに戻ったかのようだった。
「ヘロヘロさん、私の接続もお願いできますか？」とたっち・みーはヘロヘロさんに尋ねる。
「もちろんです。というか、ウルベルトさんに言われて、既にたっちさんの分も準備が終わっていますよ」とヘロヘロさんは笑いながら言う。
「みんなでたっちさんのことを待ってたんです。ウルベルトさんが、あいつは絶対に来るはずだって言うから」とペロロンチーノが言う。
「ウルベルトさん……」
「早くいけ。必ずモモンガさんを助け出せよ。あと、お前！　昨日自分の飲んだ分の会計しないで帰りやがっただろうが！　俺が立て替えて置いた。正義らしく借りは返せよ？」
「ええ。もちろんです！　モモンガさんの救出祝賀会では、ウルベルトさんの分は私が持ちます。美味いワインを飲みましょう！」
「馬鹿を言うな。俺は日本酒派だ」とウルベルトさんが言うと、全員が笑った。
「準備できました。繰り返しますが、きっちり二時間です。それまでにモモンガさんを探し出し、二時間経過したとき、どなたかがモモンガさんの体に接触をしていてください。そして、誰も二時間の間、死なないでくださいね！　では、準備は良いですか？」とヘロヘロがユグドラシルにログインするメンバーに問いかける。
「はい！」「おう！」
　ログインメンバー全員が一斉に返事をした。

Diligit animam mea 8

カルネ村に朝日が昇る。草花に残っている朝露が、まるで宝石のように美しく世界を彩っている。そして、春の野花の上を、蝶がひらひらと舞い飛ぶように、どす黒い血の色をした蝙蝠の群れが、まっすぐにカルネ村へと向かっていく。

シャルティアは、カルネ村の空を、天使のように白い翼を羽ばたかせて、ゆっくりと旋回する。その光景に最初に気づいたのはネムだった。

「お姉ちゃん、天使がお空を飛んでいるよ」

エンリは目を細め、空を見上げる。そして、直感する。あれは天使なんかじゃない。まるで、地上の獲物を狙って空を飛ぶ鷹だ。

決しておとぎ話に出てくるような、幸せを運んできてくれるようば存在ではない。死神のようだ。ゆっくりだが、その死に神は高度を落としてきているような気がする。エンリは、妹に、家から決して出ないようにと言い聞かせ、そして、モモンガの姿を探す。

モモンガは、直ぐに見つかった。村の広場の真ん中に立っていた。今日は、素顔ではなく、仮面にフードという格好だ。

「モモンガさん！」

「エンリ……。これを渡しておこう」

モモンガが差し出したのは、二つの革袋だった。

「これは、無限の背負い袋（インフィニティ・ハヴァザック）と言って、物を運ぶ際に便利な魔法道具（マジックアイテム）だ。この袋には、ポーションを入れられるだけ入れておいた。もう一つの方には金貨が入っている。手を入れてみろ」

恐る恐るエンリが革袋の中に手を入れる。すると、あり得ないほどのコインの手触りを感じる。試しに一枚だけそれを取り出してみる。エンリは金貨など見たことはなかったが、太陽の光を浴びて光り輝いているし、黄金色なので、きっと金貨なのだろうと思う。コインに彫られた細工も細かい。

だが、ふとエンリは、疑問に思う。どうしてこれを？

「世話になったな……。アイツの目的は私だろう……。この村に被害

が及ばないところまでアイツを誘導する」
「モモンガさん……倒して、また戻ってきて下さい」
「いや、この村にはもう戻らない。たとえ……勝てたとしてもな……」
　ふっとエンリは思い出す。それは、父と母を思い出す。自分と妹を助けるために、父はナイフ一つで騎士に襲いかかった。母は、自分が囮となり、自分と妹に逃げるべき方角を示した。
　そんな父と母と、モモンガさんは同じ事をしようとしているのではないか。そんなのは嫌だ。エンリの心に鋭利な痛みが走る。激しい哀しみの痛み。父と母を失った、鈍く重い痛みではない。父と母を失った悲しみとは違う哀しみ。
『友愛（フィロス）と情愛（エロース）というようにな。友愛は、家族や友達との間の愛のことだ。情愛は、まぁ、男女間の愛、恋人との愛ということだな……』
　あぁ、そうか。友愛（フィロス）。失うのは、悲しいんだ。そして、情愛（エロース）。失うのは、堪らなく哀しいんだ。
「モモンガ様。誰とおしゃべりをしているでありんすか？」
　シャルティアは急降下し、広場に降り立つ。そして、モモンガとエンリと対峙する。
　血のように赤い鎧。そして傘を思わせるような槍。そして、エンリよりも身長は小さいのに拘らず、エンリを見下しているような冷たい真紅の瞳。
「急に降りてきてどうした？　嫉妬でもしたのか？　シャルティア？」
「嫉妬？　ええ。大いに嫉妬致しているでありんす。私の下を離れ、こんな薄汚い村で滞在されているなど。至高の御方がたに相応しい場所ではありんせん。ずっと私の傍にいてください」
「それは、俺を殺してというのが前提か？」
「もちろんでありんす」
「そうか……。まだ、最上級命令というやつは効果があるようだな」
　エンリには詳細は分からないが、物騒なことをシャルティアと呼ばれた少女は言っている。少なくとも、モモンガさんは悲しそうだ。
「さて、では戦おう。場所を移すぞ、シャルティア。構わないな？」

「場所を移す？　その必要がありますか？　まさか……この下等生物たちを庇うおつもりですか？　死の支配者たるモモンガ様が、このような者たちに慈悲をかけるなど……。許せない……。なぜ、その慈悲を私に向けて下さらないのですか？　全員……殺す」

その瞬間、エンリの全身の毛が逆立つ。恐怖、死、憎悪。考え得る醜い感情の全てが、重い空気の固まりとなって、自分にぶつかってきたようだった。

「ふっ、馬鹿を言うな。お前が手に持っているのは、スポイトランスだろう？　せっかくお前にダメージを与えても、回復されてもつまらないからな。付いてこいシャルティア、『飛行（フライ）』！　早く付いてこないと、上位転移（グレーター・テレポーテーション）で何処かへ行ってしまうぞ？　また地道に眷属を使って俺を探すか？」とモモンガは遠くに飛び去る。

「ちっ」という舌打ちと共に、シャルティアもその後を追う。

・

「この辺で良いだろう……。手間をかけさせたな、シャルティア」とモモンガは、草原へと降り立つ。

「いえ、やっとモモンガ様を殺せるのですから……」

ふと、シャルティアは、スポイトランスを構えながら思う。なぜ私は、モモンガ様と戦おうとしているのか。考えてもよく分からない。ただ、殺す、それが最善の行動であると脳が囁く。殺す、それが絶対的に正しい。至高の御方がたのまとめ役であられたモモンガ様の言葉よりも、遙かに正しい。シャルティアは心で違和感を覚えつつも、その声に従う。

シャルティアは、冷静にモモンガを見つめる。魔力系魔法詠唱者（マジック・キャスター）であるモモンガ。一方の自分は信仰系魔法詠唱者（マジック・キャスター）だ。魔力系魔法詠唱者（マジック・キャスター）はＭＰが尽きれば戦闘力は皆無となる。一方の自分は、ＭＰが切れても、肉体的な戦闘力を有しており、ＨＰがゼロになるまで戦える。そして、致命的なのが、魔力系魔法詠唱者（マジック・キャスター）であるモモンガは効果的な回復手段が皆無ということだ。

確実な手段は、モモンガのＭＰをまずはゼロにすること。そうすれば、ほぼ自分にダメージを与える手段は限られる。選ぶべきはＭＰを

消耗させる持久戦だ。しかし、モモンガ様は何か奥の手を有しているのではないか？　そんな気味の悪さをシャルティアは覚える。選ぶべきは……、物量戦と見せかけた短期決戦。

「〝眷属招来〟　〝第１０位階怪物召喚（サモン・モンスター・１０th）〟」

まずは、物量戦だ。

（最初のうちは、範囲魔法で一気に殲滅されるでしょうが……）

「魔法効果範囲拡大（ワイデンマジック）・クライ（嘆き）・オブ（の）・ザ（妖精）・バンシー（の絶叫）」

周囲に女の絶叫が波紋の如く響き渡る。それも即死の効果を持った叫び声。

シャルティアは、即死効果に対する完全耐性を持ち、当然その効果はない。しかし、召喚した眷属、召喚した魔物は一瞬にて灰となる。

（やはり、物量戦を嫌がりますか……。多勢に紛れて、距離を詰め、スポイトランスで滅多刺しにしたいのですが。予想通りですね、モモンガ様）

「〝エインヘリヤル〟」

シャルティアの前に、白き光が集約し、人間大の大きさへとなる。そして、その白色の光は、完全に人の形を象る。その姿は鎧が白く染まり、肌が白い光をボンヤリと放っている事を除けば、使役者（シャルティア）に非常に酷似している。そして、似ているのは外見だけではない。魔法行使能力や特殊技術の一部などは損なわれ、所有アイテムも無いものの、その武装や能力値などは、自分とまったく同等である。単純な直接戦闘しかできないもう一人の自分。そして……なにより素晴らしいのが、人造物（コントラクト）であるが故に、クライ（嘆き）・オブ（の）・ザ（妖精）・バンシー（の絶叫）は効かない。

エインヘリヤルを即死させたいのであれば、あらゆる生ある者の目指すところは死（The goal of all life is death）であるを使うしかない。

使われても、自分はペロロンチーノ様から戴いた復活系アイテムをまだ持っている。

エインヘリヤルがモモンガを襲う。だが、モモンガを最初に襲ったのは、神聖属性を持つ３ｍもの長大な戦神槍であった。戦神槍がモモンガの胸に突き刺さる。そして、その衝撃を受けている間に、エインヘルヤルが距離を詰め、モモンガの右肩を貫く。

そして、最後にシャルティア本体が、スポイトランスでモモンガを貫こうとするが……

「――上位転移（グレーター・テレポーテーション）」

シャルティアのスポイトランスは空を突き刺す。探知系の能力を持たないシャルティアは自分の目でモモンガを探す必要があるが……今はそんなことは不要だ。

「清浄投擲槍」

自動的に長大な戦神槍が浮かび上がり、そして空を疾走する。

「そっちか！」とシャルティアは清浄投擲槍の飛んでいく方向へと体を前進させる。再びシャルティアがモモンガを視界に捉えたときには、二本目の戦神槍がモモンガの左脇腹に刺さっているところであった。

エインヘルヤルとシャルティアはモモンガに再び槍を突き刺そうとする。

「――上位転移（グレーター・テレポーテーション）」

再びモモンガの姿が消える。

「逃げ回っているだけですか？　モモンガ様！　あははは」とシャルティアは高笑いをする。

「あらゆる生ある者の目指すところは死である、クライ・オブ・ザ・バンシー（The goal of all life is death　嘆きの妖精の絶叫）」

モモンガの切り札。

エインヘリヤルは消滅していくが、自分は大丈夫。出来ることなら、エインヘリヤルと、自分との同時攻撃により、短期で決着を付けたかった。だが、モモンガ様に切り札を切らせた。結果は上々だろう……。

（後は、ＭＰの削り合い。ＨＰの削り合い。だけど、私は、大致死（グレーターリーサル）が使えるけど、モモンガ様は使えない。ふふふぅ。勝った。これでモモンガ様は、ずっと私の側に……）

魔法と魔法。お互いのＭＰを削りながら、お互いの同時にＨＰも削っていく消耗戦。

「あはっ！　魔法と魔法の撃ち合い。これで終わりですか？　モモン

ガ様のＨＰはほとんどゼロに近いのではありませんか？　大致死（グレーターリーサル）」

自分のＨＰは回復した。自分のＭＰはゼロに近い。だが、ＭＰがゼロに近いのはモモンガ様も同じはず。

あとは、近接戦闘によって、スポイトランスによって、自らのＨＰを回復させながら、モモンガのＨＰを奪うだけだ。自分のＨＰに不安はない。超位魔法を使われようとも、なんの心配も無い。

あとは、スポイトランスでめった刺しにするのみ。

これで終わりにする、とスポイトランスを突きだすが――
硬質な音が響き渡る。
シャルティアは思わず己の目を疑う。それはまさにあり得ないことだった。スポイトランスが純白の塊に、弾き返されたのだ。その純白の輝きは魔法によるものではない。
――鎧だった。
それは、純白の鎧。胸の中心には巨大なサファイヤが埋まっており、その身からは清浄で神聖な光を放っている。そんな鎧がシャルティアの前に立ちはだかり、スポイトランスの一撃を弾いたのだ。
「アインズ・ウール・ゴウンの反撃としよう」
「ば、馬鹿な、たっち・みー様だと!!」とシャルティアは信じられないものを見るかのように目を見開く。シャルティアの目の前には、〝純銀の聖騎士〟が立ちはだかっている。
「たっちさん……」とモモンガは、呟く。
「お待たせしました。モモンガさん。後は任せてください！　茶釜さんは回復を！」
そして、斬と音が立つ。
「ぎゃあああ！」
シャルティアは絶叫をあげる。伝説級（レジェンド）アイテムである鎧を容易に切り裂き、自らの肋骨を切り裂き、動いていない心臓がある位置までその刃は達していた。そして、その剣を振りかざした男の名をシャルティアは口から血を吐き出しながら叫ぶ。
「武人建御雷様!!!」
再び振るわれた刀をシャルティアは大きく飛び退き回避する。刀の間合いより、遥かに遠く。
「シャルティア……。刀の錆にしてやるよ……。いざ、シャルティア・ブラッドフォールン。尋常に勝負だ。ユグドラシルにその名を轟かせた、アインズ・ウール・ゴウンの力をその目に焼き付けろ!!!」
それが、アインズ・ウール・ゴウンの反撃の嚆矢だった。

武人建御雷は、スキル〝不動羂索〟を使う。カルマ値がマイナス四百五十であるシャルティアの回避力が低下する。そしてそれと同時に、シャルティアとの間合いを一気に詰め、雷光を這わせた建御雷八式で、渾身の突きを繰り出す。

回避は難しい。まるで体に蜘蛛の糸が絡まりついたように体が重い。

神速の速度で突き出される切っ先を目に捉え、シャルティアは冷静に判断する。〝不動羂索〟によって回避力も低下している。下手に避ければ、逆に致命傷を負いかねない。

(なら……仕方がないか)

左手を犠牲にする覚悟を決めたシャルティアは、手を突きの線上に割り込ませる。その刃は、容赦なくシャルティアの左手から左腕へと突き抜けていき、ガリガリと肉や骨を切り裂く。

建御雷八式が左肩まで達しようというとき、シャルティアは薄ら笑いを浮かべる。

(確かに左腕のダメージは深刻ですが、貴方様にスポイトランスをぶっ刺せば、それで回復して終わりです！　貴方様には、これを避ける武器も無い！)

「隙有ですね！」とシャルティアは勝ち誇ったように叫ぶ。

武人建御雷の両手は建御雷八式の柄を握ったままだ。そして、シャルティアは左腕に力を入れ、食い込んだ刀を逃がさない。

右肩を限界まで後ろに引き、そして一気にスポイトランスを武人建御雷に向けて突き出した。

――肉を斬らせて骨を断てた――

シャルティアは必中を確信する。

「何処に隙があるでござるか？」

いつの間にか、武人建御雷と自分との間――自らの懐から不意に声が聞こえる。

「え？」とシャルティアは自らの目と鼻の先で聞こえた声で一瞬惚けた。シャルティアの意識が武人建御雷の急所、そしてスポイトランスの先端に集中していた一瞬。その刹那とも言える一瞬の意識の隙。

そこを逆に突かれ、戦士としては恥としか言えない事態、気付かぬうちに懐に潜り込まれるという事態となっていた。
そして、自らの渾身の力で放ったスポイトランスは硬質な金属と共にはじき返された。
「なっ！　弐式炎雷様!?」
シャルティアの渾身の一撃を弾き返したのは、月の如き静かな輝きを宿した小太刀だった。そして、弐式炎雷様がもう片方の手に持っていた太陽の如き煌めきを放つ武器が、シャルティアに向かって振り払われる。
「あぁぁぁぁあっ！」
苦痛の声が唇を割る。毒のように流し込まれる神聖属性の痛み。それがシャルティアの全身を駆け巡る。
痛みに対する耐性が無ければ気絶してしまいそうな激しい痛み。だが、シャルティアはその痛みの中で、反撃に転じる。スポイトランスで駄目なら、前蹴りでダメージを与えてやる。弐式炎雷様は、防御力が低い方であるという記憶がシャルティアにはあった。何が何でもダメージを与えてやる。
だが、前蹴りをするよりも早く、「みんな離れて!!　とりあえず殴るから!!」という声が響く。
そして、その声がした瞬間、目の前にいたはずの武人建御雷と弐式炎雷の姿がシャルティアの目の前から消えた。
シャルティアの視界を埋め尽くしたのは、棘の生えた凶悪で巨大なガントレット。それが、自分自身に迫ってきている。前蹴りをしようとして崩れた体勢。自らの体勢を立て直すよりも先に、ガントレットが激突する。
「ぐぎゃ！」
巨大な拳で体を殴りつけられたような衝撃に、無様な声をあげながらシャルティアは後ろに飛ぶ。
「こ、このわたしに、よくも無様な声を！　全員、同じ声で鳴かせて……え？　嘘……」
シャルティアは巨大な光球をその視界に捉えると、激情は何処か彼

方に一瞬で吹き飛ばされる。
シャルティアは、何もかも忘れたように、ただ呆然とその強大な光玉を見つめる。先ほどまで怒りで醜く歪んでいた顔から感情が一気に抜け落ちた能面のような顔へと変わる。
シャルティアへ太陽のような輝きの矢が迫る。しかし、シャルティアは、それを避けようともせず、ただ、そのダメージを抱きしめる。
「これは……間違いない。属性ダメージ。ゲイ・ボウなの？　ペロロンチーノ様なの？」
シャルティアは、目の前に立ちはだかる、モモンガ、たっち・みー、武人建御雷、弐式炎雷。そしてぶくぶく茶釜。それらがいないかの如く、必死に回りを見渡し、その姿を探す。自分の創造主の姿を。
そして、ハッと空に炎々と輝く太陽を見上げる。
遙か上空。輝く太陽の中。真円の光の中に、黄金の翼を広げたバードマン。シャルティアはその姿を捉えると同時に、空へと舞い上がる。
「ペロロンチーノ様!!!!」
太陽へ飛び込もうとしているかの如く、シャルティアはペロロンチーノとの距離を詰める。
が、容赦のない巨大な光球がシャルティアを襲う。衝撃によりシャルティアの体は地面へと叩きつけられる。しかし、シャルティアは太陽へと飛ぶことを諦めない。ゲイ・ボウの攻撃に耐えながら、空へと昇る。しかし、距離を詰めようとするが、衝撃で押し戻されて、距離が中々縮まらない。
ペロロンチーノへと真っ直ぐ飛ぶシャルティア。
シャルティアは、『プレイヤーを殺せ』という最上位命令。自分の心を真っ黒に染め上げたモノ。しかし、その闇の中に、頼りなく揺らめく一本の蝋燭の炎のように、決して消えることのなかった光の中の光。
シャルティアは太陽を目指して飛び続ける。左腕には、建御雷八式が刺さったままだ。心臓近くまで切り裂かれた傷も癒えない。弐式炎雷の天照（あまてらす）によって負った傷口からは、神聖属性の痛みが続いてい

る。
シャルティアは、『プレイヤーを殺せ』という思考の奥底。薄れ行く意識の奥底にで、シャルティアは心の中で歌い始める。もう、口ずさむ余裕などはない。
・
深い闇の底から目が覚めて
最初に見えたのは
あなたの笑顔
黄金の翼が私を包んで言った。
おはよう。鮮血の戦乙女。
君の名前はシャルティアだ。
真っ赤なドレスに真っ赤な瞳。
あなたが創ってくれた、私の全て。
あなたに内緒。
設定されてはいない　私の感情。
あなたが知らない、私の愛情。
伝えられる日は、来るのかなぁ。
モモンガ様と楽しそうに話してて。
ぶくぶく茶釜様に叱られて。
スーラータン様とこっそり何かを作ってる。
あなたの全てが、私は嬉しい。
待ってろよ、シャルティア。
学校に行かせてやるからな。
あなたに内緒。
設定されてはいない　私の感情。
あなたが知らない、私の愛情。
伝えられる日は、来るのかなぁ。
突然の侵入者に私は怯える。
千五百もの狂気が、
私の幸せを土足で踏み潰そうと、
押し寄せてきて、私を殺す。

怖かっただろう。ごめんな。
これを持っておけば、もう安心だよ。
あなたに内緒。
設定されてはいない　私の感情。
あなたが知らない、私の愛情。
伝えられる日は、来るのかなぁ。
・
シャルティアの体力は、限界点へと達した。
ゲイ・ボウのダメージを受け、シャルティアは自らの肉体が崩壊していくのを感じる。そして、翼は力を失い、自らが再び地面へと引き寄せられていく。右手に持っていたスポイトランスを手放し、ペロロンチーノに向けて右手を伸ばす。だが、その手は徐々に遠くへと遠ざかっていく。
（あと少しで……言えたのかも知れないのになぁ……）
自らの体は重力に引き寄せられ、落下していく。次第にペロロンチーノ様との距離が離れていく……。それが、自らに死が迫っているという事実よりも、たまらなく悲しかった。
目からは涙が溢れる。しかし、意識の最後まで、自分の愛した創造主をこの目に焼き付けようと……もう二度とペロロンチーノを見失わないようにと、眩しい太陽を眺め続ける。
「シャ、シャルティア!!」
ペロロンチーノはそう叫び、そして、翼を羽ばたかせる。そして、落下するシャルティアを追いかける。落下していくシャルティアよりも速く。
シャルティアが地面へと叩きつけられる前に、ペロロンチーノはシャルティアを抱きしめ受け止める。
「ごめんな。シャルティア。辛い想いをさせちゃったな」
もう、胸から下が灰となって、散っていく。もう、なんの力も残されていない。それでも、これだけは言わなくてはならない、ずっと伝えたかった言葉。薄れゆくシャルティア・ブラッドフォールンという存在の生命を動員して、言葉を紡ぐ。

「ペロロンチーノさま……心よりお慕い申し上げてありんす……
あぁ、やっと言えた……」
不思議と、自分の心は非常に軽やかだった。そして、シャルティア・ブラッドフォールンの全てが灰となった。

Diligit animam mea 10

ペロロンチーノの背中は寂しそうであった。モモンガとの再会の喜びを祝うには重苦しい雰囲気であった。

自らが時間と労力、時には課金をしてでまで創造した、愛する、という形容詞が当てはまる存在を殺す。その辛さは、その場にいる誰もがペロロンチーノの気持ちを理解出来た。

そして、自らの装備が置かれていた場所。そして自分の姿に似せて作られていた化身（アヴァターラ）。不格好な人形。それは、モモンガが作ったものであるということは、仲間達は一目瞭然であった。

モモンガの名付け（ネーミング）のセンスの無さには定評があった。そして、造形に関する不器用にも定評があることが知られていた。まずは、モモンガ自体のアバターである骸骨。

ユグドラシルのモンスターであるリッチの外装データをコピーして、ちょこっと変えただけなようなモモンガの外見。そして、モモンガが創造したパンドラズ・アクター。他の仲間達、たとえばペロロンチーノが作成したシャルティア、ぶくぶく茶釜が作成したアウラとマーレ、たっち・みーが作成したセバス。それ以外でも、プレアデス、一般メイド達。彼彼女等は非常に精巧な作りとなっている。だが、パンドラズ・アクターは、のっぺらぼうのような顔。悪く言ってしまえば、埴輪（ハニワ）に軍服を着せただけと言える。

ぶくぶく茶釜にとっては、その一生懸命なくらいの不器用さと、嬉しそうに、そして満足そうにパンドラズ・アクターについて語り、何度もパンドラズ・アクターに敬礼をさせているモモンガの姿が、可愛くてどうしようも無かったが……。

そんな、モモンガのことを知っている仲間達であるからこそ、分かった。瞬時に理解できた。この化身（アヴァターラ）は、モモンガが作った物であると。なんとか仲間のアバターに似せようと、随所に課金アイテムが使われている。涙が出てしまうような努力の痕跡。

「化身（アヴァターラ）は、アイテムの保管場所ですよ。強力な装備ですし、棚に飾るよりはこっちの方が格好いいじゃないですか」

モモンガがそう言っていたのを聞いたことがあった。そして、その時の自分には理解できていなかった。モモンガが、仲間達がユグドラシルを引退していくこと。ログインをしなくなること。それを堪らなく悲しんでいたということを。化身（アヴァターラ）の数は、まだ二、三体であった。しかし、それが三十七体にまでなっていた。

どれだけ時間をかけて……、そしてどんな思いで、この化身（アヴァターラ）をモモンガが作ったのか。

そして、自分の記憶とまったく違（たが）うことがないナザリック地下大墳墓の姿。ナザリックを維持する為の金貨の月額消費量。宝物殿の金貨が減っているのであろうと思ったが、山の如く詰まれた金貨。宝物殿の金貨が目減りしている様子も無い。どれほど、ナザリックを維持する為にモモンガが時間と労力を費やしたか。

玉座の間に飾られた、それぞれを示すサインが刻まれた旗。引退を宣言した自分の旗が、色褪せることなく輝き続けていた。

ユグドラシルのサービス終了時まで、アインズ・ウール・ゴウンを守り続けていてくれたモモンガ。

ふっと誰かが不意にログインをしてきた時、荒廃したナザリックを見てガッカリしないように。無人のナザリックで寂しい思いをしないように。そのために、ずっとモモンガは一人で寂しい思いに耐えていた。

そんなモモンガを、危機一髪とも言えるタイミングで助けることはできた。しかし、モモンガにかける言葉が見つからない。「お久しぶりです」などと、気安く声をかけることが躊躇われる。

そんな中、口を開いたのはモモンガだった。

「たっちさん、ペロロンチーノさん、武人建御雷さん、弐式炎雷さん、ぶくぶく茶釜さん、やまいこさん……。これって、夢じゃないですよね？　またお会いできて、本当に嬉しいです」とモモンガが言った。

「ええ。夢なんかじゃありませんよ。お待たせしました……。本当に長く……」とたっち・みーが言う。

「いいえ。良いんですよ」とモモンガもそれに答える。

『予定の時間が迫っているよー！』と、ぶくぶく茶釜がかつてモモンガ

にプレゼントするために試作した腕時計が叫ぶ。
　ユグドラシルにログインしてから、あと数分で二時間が経過しようとしている。
「詳しい話は、ＲＥＡＬに戻ってからにしましょう。他の仲間も、みんな待っています」とたっち・みーが言う。
「あっ、モモンガさん。ＲＥＡＬに戻る前に、一つだけ良いですか？」とぶくぶく茶釜は意を決して言う。
「ん？　なんです？」
「あの時計……持ってますか？」
「もちろんですよ」とモモンガは、無限の背負い袋《インフィニティ・ハヴァザック》からぶくぶく茶釜が贈った腕時計を取り出す。
　タイマー設定のボタンを二回押した後、時刻設定のボタンを一回。分設定のボタンを二回押して、最後にまたタイマー設定のボタンを八回押してもらっていいですか？
「あっ、隠しコマンドですか？　まだ見つけてないのがあったんだ」とモモンガは言いながら操作をした。
『私、モモンガお兄ちゃんのことが大好きー。お付き合いしたいなぁー』
　かつてのこの音声を吹き込んだときの自分の気持ち。そして、今の自分の心の中にも変わらず有り続ける思いと願い。
「あの……。ネタとかではないですよ……。本気です。お返事は、現実に戻ってから戴けると、ありがたいです」
「ねえちゃん。恥ずかしいのは分かるけど、そのアバターでくねくねすると、なんか卑猥だ」
「黙れ、弟」
「分かりました。必ず、お返事させていただきます」とモモンガは答える。
「では。もうすぐ時間です。みんなで手を？いで、一つの輪になりましょうか」とたっち・みーが言う。
　七人は手と手を？ぎあい、一つの輪を作り始める。気恥ずかしいぶくぶく茶釜に、ペロロンチーノが「姉ちゃんは、モモンガさんの隣で

しょ」と、ぶくぶく茶釜の背中を押す。ぶくぶく茶釜は、気恥ずかしそうにモモンガの手を握る。

「では、帰りましょう。ＲＥＡＬへ」とたっち・みーが言った。

１：５９：４８、４９、５０……

ぶくぶく茶釜が読み上げるカウントに耳を傾けながらモモンガは目を閉じた。

ユグドラシル。モモンガの青春。人生に黄金時代というものがあれば、ＹＧＧＤＲＡＳＩＬで遊んでいたその時期こそが自分の黄金時代であっただろう。後の人生は、残り香に過ぎないのではないか。アインズ・ウール・ゴウンという思い出を抱えて、自分は社畜として身をすり減らして、そして死んで行くのだろうか。思い出の中で生きて、身を削って働き、そして死んでいく。敷かれた線路に乗って生きていく。

ＹＧＧＤＲＡＳＩＬの最終日にはそう思っていた。だが、そうでは無かったとモモンガは思う。

「楽しかった。本当に楽しかったんだ。ありがとう。ＹＧＧＤＲＡＳＩＬ。そしてアインズ・ウール・ゴウンのみんな……」

０２：００：００

モモンガのその言葉は、草原で踊る風に乗って何処までも運ばれていく。

〈おしまい〉